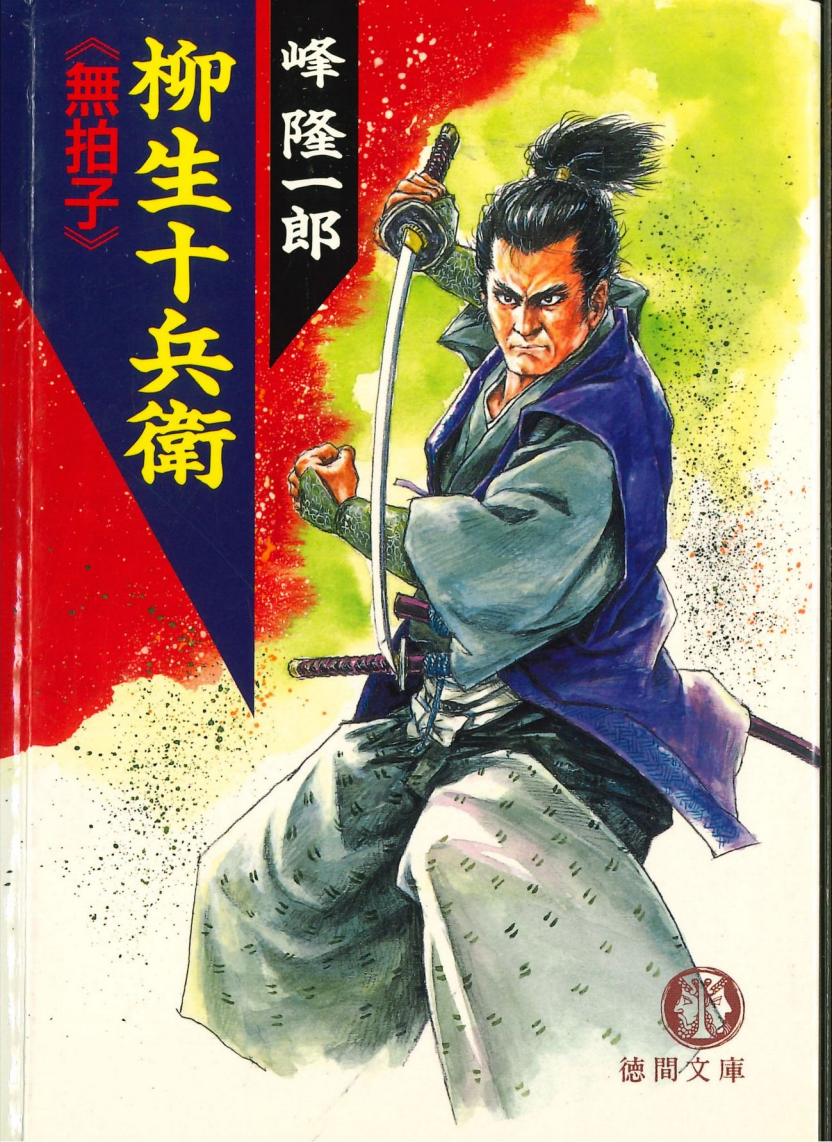
峰隆一郎

柳生十兵衛

《無拍子》



徳間文庫

徳間文庫

峰　隆一郎　作品

柳　生　十　兵　衛
柳生十兵衛《龍尾の剣》
柳生十兵衛《逆風の太刀》
柳　生　十　兵　衛《剣術猿飛》
柳生十兵衛《兵法八重垣》
柳　生　十　兵　衛《月影の剣》
柳生十兵衛《無刀取り、四十八人斬り》
柳　生　十　兵　衛《斬馬剣》
柳生十兵衛《極意転(よろけ)》
柳　生　十　兵　衛《無拍子》
孤　狼　の　牙

カバーイラスト＝鴇田　幹
カバーデザイン＝池田雄一
カバー印刷＝真生印刷㈱

峰隆一郎

柳生十兵衛《無拍子》

徳間文庫

み
7-11
520

柳生十兵衛《無拍子》

峰　隆一郎

徳間文庫

9784198901288

ISBN4-19-890128-7

C0193 P520E (0)

1910193005203

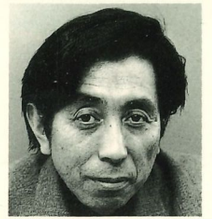
定価520円(本体505円)

寛永十二年九月、石川伝七郎は京の上七軒にいた。既にお鯉という京女と知り合い世話になっている。伝七郎は柳生十兵衛に計画を打ち明けられた。斬死を覚悟した計画だった。かつて上洛する家光を大井川に襲ったが、父宗矩に阻まれた。日光東照宮の完成する寛永十三年の参詣が十兵衛の狙いだった。十兵衛の仲間木賊孫十郎、桐生重兵衛らも京に集ってくる。死を賭した十兵衛の豪剣に血がしぶく。堂々の完結！

徳間文庫

柳生十兵衛《無拍子》

峰　隆一郎
1931年
長崎県生まれ



徳間文庫

柳生十兵衛

《無拍子》

峰 隆一郎

徳間書店

柳生十兵衛《無拍子》

峰 隆一郎

徳間文庫

徳間文庫

柳生十兵衛

《無拍子》

峰　隆一郎

徳間書店

目次

一章　上七軒　5
二章　無息　42
三章　山賊　80
四章　死神　117
五章　襲撃　155
六章　炎上　193
七章　幸手　230
八章　暗殺　267
あとがき　305
解説　前島不二雄　311

一章　上七軒

1

寛永十二年（一六三五）九月――

石川伝七郎は、京にあって北野天満宮の境内にいた。ぶらぶらと、着流しのまま、境内を歩き回る。

天満宮の楼門より南、むかし右近馬場と言われたあたりに太閤井戸と言われる井戸がある。この天満宮は菅原道真を祭神とするもので、道真が右近衛大将のときに作られた馬場で、右近馬場という。

天正十五年（一五八七）十月一日、この地で豊臣秀吉が〝北野大茶会〟を行ったものだ。各所に高札を立て、

『茶道執心の者はなにびとによらず、釜一つ、つるべ一つ、飲物一つ、茶は焦しても苦しからず、ひっさげて来るべし』

この茶会は、秀吉が九州を平定し、聚楽第の竣工の祝いであった。参加するもの千余人、この日、秀吉は秘蔵の名物名器をそろえて、会衆に展観し、また自ら境内に設けられた各茶席をめぐって、諸家の出品する名器を眺めて回ったという。

太閤ゆかりの遺跡である。いまはそういう華やかなものはない。九月とは言っても旧暦である。いまなら十月、すでにあたりの景色には、秋の気配があった。京の冬は寒い、と思うと、心細くもある。

この北野天満宮は、まだ洛中である。ほんの少し北にずれると、洛北になる。洛中と洛北の境目あたりに金閣寺がある。

この境目にこだわるには理由がある。元和六年（一六二〇）に、つまり、いまから十五年前に、幕府は洛中から浪人を追い払った。追い払ったということは、京にそれだけ浪人が多かったということになる。

関ヶ原から二十年、能のある浪人はどこかの大名に召抱えられているか、職を得ている。残っている浪人は柄が悪くなり、悪事を働く。

京には御所もある。京は治安をよくし、きれいにしておかなければならない。だから、浪人を洛中から追い払った。

すでに浪人をやめ、職を持っている者以外は、いかに縁故があっても、みな追放した。

京七口という、京の七つの入口である。そこには役人を配した。つまり京に入って来る者たちを、用がある者以外は止めたのである。

そのために、京都所司代の他に東西の町奉行所ができた。つまり、京は徹底的に浪人を毛嫌いしたのである。

洛中洛外の区別は、御土居の内か外か、ということだ。京は大雨が降ると、川水があふれて洪水になる。

京には多くの川がある。何年かに一度、京の町には水があふれる。そのために秀吉が土堤を造った。土堤で京の町を囲んでしまったのだ。それを御土居という。この御土居の中が洛中である。そのために、京の町には水害がなくなった。

つまり、この御土居の中から浪人を追い出した、ということになる。もちろん、河川が整備されて、御土居は崩されたが、まだ御土居のあとは残っている。

北野天満宮は、もちろん、御土居の中である。伝七郎は御土居の外に住んでいる。だから洛中深くは入らない。

この年の七月までは江戸にいた。江戸に飽きたということもある。この京の洛北に着いて二

カ月足らずというのに、伝七郎には女がいた。

北野天神の近くに上七軒という盛り場がある。八坂神社の祇園と、北野天神の上七軒と言われる歓楽街である。六条柳町のような遊里ではない。茶屋が並び、茶屋女がいる。

その上七軒の通りを歩いていて、草履の花緒を切った。困っているところに、女が緒をすげてくれた。

その女がお鯉と言った。誘われてお鯉の家に行き、そのまま居ついた、ということだ。江戸でも、伝七郎は女には不自由しなかった。幸いお鯉の家は洛中の外にあった。

伝七郎には、女を魅きつける何かがあるのだろう。美男ではあるが、伝七郎ほどの美男は多い。だから、それ以外に何かがあるのだ。

食えぬ浪人の多い中で、伝七郎は飢えたことはなかった。いつも女がついて回る。そして女が食わせてくれるのだ。多少は気障だが羨しいような男だ。いつの世にも食いっぱぐれのない男というのはいるものだ。

だからと言って女の機嫌をとって生きているのではない。養ってくれる女などいくらでもいる、という顔をしている。そこが魅力なのかもしれない。

これから冬になる。浪人にとっては不安な季節だ。いまはまだ暖い。夏の暑さはなくなっているが。ふつうの人には最もいい季節かもしれない。木々の葉は色づきはじめ、空気は澄み、過しやすいときだ。

その先の冬も寒いには違いないが、それなりの風趣がある。浪人にはその風趣がない。ただ寒さに怯えるだけだ。春まで体が保つかどうかだ。この冬を過しきれないかもしれない、という思いがある。

むこうに三人の浪人の影があった。その影が伝七郎の姿を見て、ゆっくりと近づいて来る。逃げれば追ってくるだろう。それとない風を装って、少しずつ寄って来る。

伝七郎を見てみないふりをしている。逃げる必要もなかった。だが、三人を待つ形になった。もちろん、着ているものも浪人たちよりもよいし、姿もよい。

「そつじながら」

と声をかけて来た。

「何か用かな」

「わしら三人、酒を呑みたい。その酒代を借用できまいか」

「けっこうだ」

と言って財布をさぐった。そして小粒を出して、浪人の手に乗せた。銚子一本ずつを呑むには充分な金だ。

「かたじけない」

一人は言った。

「おぬし、その顔では女にもてるのであろうな。食うのに不自由はないな」

「不自由はない」
「女も抱けてけっこうな身分だ」
「左様、女というのはいいものだ」
「金もありそうだな」
「そう、不自由はしていない」
「同じ浪人でも不公平だな」
「世の中、公平ではない。能がなければ生きてはいけん」
「貴公に能があるのか」
「あんたらに比べると能はある。少くとも女を蕩す能はあるな。これで飢えなくてすんでいる」
「貴公の財布を渡してくれぬか、財布がなくなっても飢えることはない。殺されるよりましだろう」
「そうだな、まだ死ぬには未練があるな」
「だったら財布を渡せ」
「さっき、小粒をくれてやった」
「さあ、財布を渡せ」
「それでは強奪だな」

「かまわん」
浪人たちも刀を抜く機会を狙っていた。伝七郎が刀を抜くのを待っているのだ。
「女を泣かせるつもりか」
「さあ、泣くとは思えんがな」
伝七郎は、体をくるりと回した。一回転したときには刀を抜いていた。浪人たちがうろたえた。
まず、逆袈裟に右脇腹を斬った。振り上げた刀を垂直に斬り降ろす。浪人の左耳朶が木の葉のように落ちた。三人目の額を浅く薙いだ。
無駄な動きはなかった。浪人たちは伝七郎が刀を抜くとは思っていなかったようだ。だから気を呑まれ、あっけに取られていた。
殺す気はなかった。そのあと、浪人たちがどうでるかである。浪人はどうするのか、もう、刀を抜くに抜けない。
三人は、一歩、二歩と退いた。そして背を向けて逃げだした。斬り殺してもよかった。だが、死体を片付けるのが面倒だったのだ。その面倒がよけい面倒なことになる。
たしかに、洛中からは浪人はいなくなった。だが、洛外には浪人がうろうろしているのだ。だが、町奉行所でも所司代でも、この浪人はどうにもならないのだ。
この浪人たちを見張るだけの兵を置いておくわけにはいかないのだ。浪人たちもわりにおと

なしく、町奉行所も少々のことには目をつむることにしているようだ。

ゆっくり歩いて、住まいにもどった。お鯉はいない。店に出ているのだ。もう一度、外に出ると、湯屋に入る。湯上りに居酒屋に入って酒をのむ。

何かをしなければならない、ということはない。遊んでいればいいのだ。女に飼われていれば、ただ遊んでいるだけでいい。

だが、江戸ではそういう暮しにあきた。どこかに死に場所を見つけたかった。それで黒羽織組に入った。

公儀が江戸にふえ続ける浪人の数を減らすため浪人を雇って浪人を斬らせる組織を作った。伝七郎はその一員になったのだ。

武士ならば武士らしく斬り合って死にたいと。だが、武士ではなかった。死ねなかった。武士らしく死にたい、というのはぜいたくなことだ。浪人は浪人らしく、どこかで野たれ死にでもすればよいのだ。

死に場所は、探すからないのだ。探さなければどこにだってある。近くを流れている堀の中だって死に場所である。

死に場所を探しているなんて気障なことだ。もっとも伝七郎には似合った言葉かもしれない。

居酒屋を出て住まいにもどった。行燈に火を入れる。二間だけの家だが、それで充分だ。快く酔っていた。次の間に夜具を敷く。お鯉の夜具も敷いてやる。

着物を寝巻きに着かえると、まだ早い時刻だが夜具に入る。一日何もしないでも、よく眠れる。

人の世は、食うてババして、寝て起きて、その後はただ死ぬるばかりだ。

その心境である。ちゃんと人並みに食えているし、便も快く出る。快く眠れて、起きるのがやや面倒なくらいだ。あとはただ死ぬるばかりぞ、ということになる。

どれくらい眠っていたか、お鯉が帰って来たのはわかっていた。しばらくしてお鯉が伝七郎の布団に入って来た。抱きついて来て、ふふっと笑う。

湯の匂いがした。湯屋に行って来たのだ。衿から手を入れて、胸を撫でまわす。紐を解いて、股間に手をのばして、一物を探った。まだ力を得ていない。

お鯉は、体を起し、股間に顔を埋めてくる。口で咥えるのが好きな女である。やり方の好みは女によって違うのだろうが。

萎えたのをしゃぶる。もちろん、すぐに充実してくる。

「うれしゅうおす」

と言った。お鯉は芸妓である。江戸では芸者である。お鯉に男はいなかった。もちろん男がいないから伝七郎を誘ったのだろう。何日か前には男はいたはずである。男に逃げられたのか、男を追い出したのか、そんなことはどうでもいいことだった。

わりに可愛くていい女だった。まだ二十三、四だろう。売れっ妓なのだ。体は柔かいし、し

なやかでもある。

一物を咥えて頭を上下させる。伝七郎は半分は眠っていた。一物は怒張している。妙なものだ。

顔を上げると体を起し、腰にまたがってくる。暗い中で、尖端を切れ込みに押しつけてくる。そこはぬるぬるに濡れていた。

伝七郎は女には触ってもいない。それなのに勝手に体を潤ませている。男を知っているから、おのれ一人でおのれの体を潤ませることは知っているのだ。

尖端が、つるりと滑り込んだ。アッ、と声をあげる。一物は根元まで壺の中に没入した。何か快く暖いものに包まれた。暖いものが生きもののように動いている。

「伝七郎はん」

と言って、男の頭に抱きついてくる。肌と肌が重なり合っている。乳房が男の腭のあたりにあった。腭を引いた。乳房の膨みが口に押しつけられる。

膨みを舐める。吸う。咬む。首をのばした。そして乳首を咥えた。それをしゃぶる。しゃぶるにはちょうどいい大きさになっていた。

「あーっ」

と声をあげる。

「こうしていると、一番安心どす」

壺の中に一物を包み込んでいる。女としては最も安心できる状態なのだ。男は自分だけのもの、少くともいまのこの瞬間だけは、伝七郎は自分だけのものだ。壺にしっかり包み込んでいると、気持は豊かになるのだ。

女はこのときのためだけに生きているような気分になれるのだ。気がいくのはそのあとでいい。とにかく男は自分のものになっている。

壺口で一物をしっかりと締めつける。これで一物が壺の中にあることがわかる。それがうれしいのだ。更に一物を確めるように締めつけて来る。

腰を振る。壺口が一物の胴に擦りつけられる。それが快感である。だから、夢中で腰を振るのだ。

「あ、あっ」

と声が出る。脳の中が白っぽくなる。女であることの倖せな瞬間である。男の脇腹を内腿でしっかり挟みつけ、締めつける。

伝七郎は、両手で尻を摑み、引き寄せる。京女の肉は柔いのだ。摑んで握れば形がゆがむ。江戸の女の尻は、尻だけではないが、こんなに柔かではなかった。

女蕩しの伝七郎にしても、京の女は格別だった。京の女は誰もがこうではあるまい。お鯉だけが、こんなにいいのか。

もっとも、お鯉の他はまだ京女は知らない。もっとも、伝七郎は女蕩しではあるが、次々と

女をあさるという体質ではない。一人いればたいていは間に合うのだ。漁色家ではないということだ。

だからといって、お鯉にのめり込んでいるというのではない。

2

伝七郎は、柳生十兵衛に計画を打ち開けられた。今度ばかりは斬死することになる。もちろん、その気はある。

ずいぶんむかしから死に場所を探している。人間いたるところに青山あり、とは言う。どこで死んでも同じだ。だがそうはいかない。どこかで自分で納得できる状態で死にたい。つまり死に場所を得たいのだ。

十兵衛は、将軍家光を暗殺したがっている。神道のためにだ。家康はおのれが将軍でありながら、仏教徒の家光を三代将軍にした。

なぜなのか、何度も書いたことだ。織田信長は、激しい神徒だった。世の仏教徒をみんな殺してしまいたかった。

寺を焼き、僧を殺し信者の百姓たちを殺した。神道の世の中は成立しない。あまりの激しさのために、本能寺で明智光秀に討たれた。

そのあと天下を取ったのは、百姓の生まれである豊臣秀吉だった。つまり仏教徒なのだ。だが、子がないために、一代しか保たなかった。

次に天下を取ったのは、神道派の家康だった。だが、家康は神道を表に出したくはなかった。歴史を見てみると、神道派というのは激しい。合戦には向いているが、天下を治めるには適していない。

足利尊氏は、源氏の流れの神道派だった。天下を取って三代目からは、神道から仏教に転心している。

仏教将軍家になった。それでとにかくは十五代まで続いている。家康は、この足利将軍家に倣った。

徳川将軍家を十五代続けたかった。それで仏徒の春日局（お福）に家光を生ませ、家光を三代将軍にした。

この家康の考えに反対したのが柳生十兵衛だった。将軍家は神徒でなければならないのだと。どうしても将軍家を神道にもどしたい。そう思って、寛永三年、二十歳のときに、父但馬守に勘当されたようにして、江戸城をとび出した。

それだけのふんぎりができたのは、駿河大納言忠長がいたからだ。忠長は二代将軍秀忠の嫡子である。忠長が将軍になるべきだった。忠長が正統であったのだ。

忠長が立てば、大名の半分は忠長に従う。それだけの人気もあった。家光と忠長が争えば、

また天下は二つに分れて、大合戦になる。

そうではなかった。徳川幕府は合戦はできなかった。忠長が蜂起すれば、家光は将軍職を退かなければならなかった。

全国の大名たちも、徳川家の嫡流は、忠長であることを知っている。それを家康が無理に家光を将軍に据えたのだ。

ところが、忠長は暗愚だった。おのれの立場が全くわかっていなかった。大坂城をまかしてくれとか、百万石が欲しいと。

そんな風に父秀忠に甘えかかるだけだったのだ。自覚がなかった。そういう忠長に秀忠はあきれかえった。

もし、忠長が天下を取るという気力があるのなら協力もしたのだろうが。もっとも忠長の家臣団がよくなかった。自覚のある家臣がいなかった。

家光も暗愚であるが、家臣団が違っていた。有能な人物ばかりだった。秀忠は、忠長では徳川幕府は危いと思い、家光の側に立った。

十兵衛は、重臣を口説き、忠長に蜂起せよと言った。だが、重臣たちも忠長も、十兵衛を無視した。

無視されても、忠長を擁して蜂起しようと走り回った。だが、暗愚の忠長は、どうして十兵衛が口説くのかがわからなかった。

そのために罪に問われて甲府に移封になった。それでも、忠長はおのれの立場がわからなかった。わかりかけて来たときには、すでに遅かった。

更に、家光によって高崎に追われ、そこで自害させられることになる。だが、十兵衛は諦めなかった。

身代りにもとの家臣を立てて、忠長は形の上では死んでいる。表むきだけでも忠長が死んでしまっては、蜂起してもついて来る大名はいない。

もちろん、これだけのことを工作するには十兵衛だけの力だけではできない。若年寄の阿部豊後守忠秋が動いた。

忠秋は、十兵衛に家光を暗殺させようとしている。家光が死ねば、忠長は生き返るのだ。死んだはずの忠長は生きていた、そして城中に乗り込む。

すると、忠長には将軍になる資格がある。十兵衛はまだ忠長に望みを託していたのである。

上洛する家光を大井川で襲った、が失敗した。十兵衛の前に立ちはだかったのは、父宗矩だったのだ。

だが、それでも十兵衛は、まだ諦めるわけにはいかなかった。生きている限りは、将軍家を神徒にしようと思っている。それが生き甲斐でもあった。

いま、日光東照宮で工事が行われている。それが完成するのは、来年、寛永十三年だろう。すると、家光は東照宮に参詣する。

家光にとって家康は父であり、自分を将軍にしてくれた恩人でもある。家康のために将軍の座に坐れたのだ。

家光が日光に行かないわけはない。それを途中で襲って殺そうというのが、十兵衛の狙いだったのだ。

その一味に伝七郎は加わった。むしろおのれのほうから頼み込んだ。それで、先に京に行っていてくれ、と頼まれて京に来た。

計画をすすめるのに、江戸ではまずい。今度こそは、どうしても家光を討たねばならない。そのために、みんな京に集まることになった。

やがて、十兵衛もこの京に姿を見せるはずである。

「いきとうおす」

とお鯉が言った。

伝七郎の体からお鯉は降りた。その体を仰向けにさせる。衿を開いて二つの乳房をあらわにする。白い肌に手に余るほどの膨みである。

それを手にして揉み上げる。柔く指がめり込む。乳首だけはしこっている。肌が白いから色に染まることもない。それを摘んでひねる。

「あーっ、お情を」

と声をあげる。

お鯉は寐巻を脱いで素っ裸になっていた。男に抱かれるには、よけいなものはないほうがいいのだ。

乳首を咥え、しゃぶりながら、手を下肢に滑らせる。内腿を撫でる。感触のいい肌だ。内腿は女の体の中で最も柔かい肉だ。

そこに手を這わせ、摘む。伝七郎は体を起して、太腿を抱いた。そして内腿に唇を這わせる。舌で舐める。

「いやどすえ」

と声をあげる。壺口がうす暗く見えていた。うす暗いが光沢がある。そして何か蠢いているようだ。壺口がしきりに伸縮しているのだ。

行燈の灯りは、白い腿を浮き上らせている。その白さが反射して、はざまを薄明るくしているのだ。蠢いているのが見える。それが妙に淫らである。

淫らということは悪いことでも、いやらしいことでもない。男と女が痴態を演ずれば、おのずから淫らになる。もっとも品のよい淫らとそうでない淫らがあるわけだ。

伝七郎は女の両足首を摑んだ。そして左右にいっぱいに拡げる。

「いやーっ」

と声をあげて、お鯉は腰をくねらせる。そのくねるさまもよい。左右の白い腿が美しいのだ。白くて腿の形もいい。その中心はしきりに収縮する。

また新しく露がにじみ出ているのだろう。キラキラと光っている。
「一物をいただかして、入れて欲しいのどす」
と泣くような声をあげる。
伝七郎は、両腿を肩にかついだ。その腿を押し開く。指で切れ込みを拡げる。
「あーっ、そないなこと、いやどすえ」
と言いながら、腰は逃げようとはしない。顔を近づける。舌をのばした。粘膜に舌を這わせる。
「やめておくれやす」
と言いながら、お鯉ははざまを押しつけてくる。擦りつける。鼻の先がちょうど肉の芽に当っていた。舌を壺口にのばす。そして口を舌でなぞる。
「ひーっ」
と声をあげて、腰から尻を震わせる。
「いやどす。いきまっせ」
いきたい気分、いくところまで来ている。だが気をやることはない。気がいきそうなのにいかないせつなさ、じれったさ。
伝七郎は、肉の芽を舌で舐めあげ、ついばんでやる。
「ひーっ」

と叫んだ。お鯉に奉仕してやっているつもりではない。気がむいているのだ。気がむかなければ、一物を没入させてやるだけだ。
「そんなこと、してはおへん」
客でも芸妓のそこは舐めたがらない。だが伝七郎は興が乗っている。それに嫌いな女ではないし、湯で洗って来ている。色が白いだけ切れ込みの中も色はついていないのだ。
小さな芽をついばむ。下肢が震える。悲鳴をあげる。芽を咬んでみる。震えた。壺口から舌を押し込む。両腿が閉じようとする。襞が動いた。舌を吸い込もうとしている。
「ああ、しておくれやす」
とせつなさそうに悶える。
両腕でしっかりと腰から尻を抱き込む。この量感がいい。肌はなめらかでスベスベしている。女の体とはいいものだ。いつもそう思う。
むしろ、伝七郎のほうが狂おしくなっていた。浪人三人を斬ったせいなのか。腰をしっかり抱き寄せる。尻を摑む、菊の花に指が入っていた。
「あっ、ひっ」
と声をあげる。中は空洞である。入口に指を出入りさせる。興が乗ると、こんなことまでする。透明な露がにじみ出てくる。
指を引き抜くと、いやどすえ、と言って、手をとり指を口に咥えしゃぶる。指が匂うのが、

それを伝七郎に嗅がれるのがこわいのだ。
「どうしてどす」
「好きだからだ」
伝七郎は体を起した。お鯉は男を迎える姿勢をして待っている。
「はよう、はよう」
と身を揉む。
尖端が壺口に当る。つるんと滑り込む。お鯉は自分で迎えて根元まで呑み込んだ。男の腰に手を当て、しがみついて来る。腰を振る。
「いきますえ」
と体を震えさせ、一気に達してしまった。体が強直し、ゆっくりと力が抜けていく。
「いやどすえ、あないなこと」
「いやか」
一呼吸おいて、
「うれしゅうおした」
と言って、またしがみついて来た。
「またどすえ、またどすえ」
と声をあげてしがみつき、腰をやたらに振り回す。また気がいったようだ。だが、そこで力は抜けなかった。次の歓喜がすぐそこまで来ている。またと言わないで、次々に気をやるのだ。

3

北野天満宮の西側を紙屋川が流れている。この流れは幅が十間足らずの川で、川底は浅く水はゆったりと流れている。水源は鷹の峰あたりで、流れは南下して桂川に注いでいる。
平安時代にはこの川のほとりで禁裏御用の紙を漉いていたことから、紙屋川と言われ、この川で漉いた紙を紙屋紙と言った。
反古になった紙を再製した粗末な紙である。一般には薄墨紙とも言われる。風流なところだ。この川に釣りに来る人も多い。
小さなゴリという魚が釣れる。この魚は料理屋で買いとってくれる、と言っても釣りで生計が立つわけではない。
伝七郎は、川沿いの道をぶらぶらと歩いていた。秋である。心地よい季節でもある。川端に釣人が坐っている。この光景も風流である。
川というのは人の心を和ませてくれる。伝七郎もなごみながら歩いていた。影がちらりと動き、眉をひそめた。

昨日、三人の浪人を斬った。斬った、と言っても、傷つけただけである。斬るべきだったのか、と思う。

このあたり、洛外だからというわけでもないだろうが、浪人が多い。十二年、洛中を追い出された浪人たちは、よその地に去った者もいるだろうが、たいていは洛外に残った。

江戸の深川ほどではないが、けっこう浪人の数が多い。集まれば二、三百にはなるだろう。浪人は何かあると群れたがる。群れていれば、何とか生きていけるのだろう。

歩く方向に、浪人の姿が見えた。振り向くと五、六人の浪人がいた。伝七郎は狙われているようだ。

浪人が集まってくる。伝七郎は足を止めた。浪人は、歩いて来て足を止めた。十間ほどの間だ。後の浪人も同じ距離で足を止めている。合わせて十一人か、と思う。

「何か用か」

「昨日は、わしらの仲間を可愛いがってくれたそうだな」

「何だ。金か、金ならばくれてやる。そこに坐って、金をくれ、と言え」

「なんだと、金ではないぞ」

「金の他に何の理由がある。仲間の仇討ち、冗談ではない。そんなことするおまえたちか」

「暇つぶしだ」

浪人の一人が言った。それを聞いて他の浪人が下品に笑った。

「暇つぶしか、ならばこちらも暇つぶしになるな」

伝七郎は、ふところの財布を摑んで取り出すと、路上に投げた。浪人たちが、それを無視はできない。

財布にみんなが気を向けたところで刀を抜いた。

「さあ、取れ、いくらも入っていないがな、一両と二分くらいは入っていよう。まあ、酒くらいは呑めるだろうな」

「ならば、いただく。ただし、そこから一間ほど退っていただく」

「勝手なことを言うな。金が欲しければ取れ、わしは眺めている」

「斬らないのだろうな」

「ただでくれてやるわけにはいくまい。さあ、命を賭けて取れ」

「その手には乗らん、下れ、こんなところで命を失ってはつまらんだろう」

「まこと取れるか、取ってみろ」

浪人たちも伝七郎を殺すまでもないことだ、と思っている。殺さずに金だけを手に入れたいのだ。

「さあ、どうする」

「ガチャガチャ、面倒なことを言わずに金を渡せ」

「死ぬる気がないのなら引き上げてもらおうか」

「あんたは、昨日わしらの仲間を斬った。その詫び料としていただく。これでどうだ」
「持っていけ、だが、言っておく。その財布に金など入っていない」
「なんだと」
「わしらを、たばかったか」
「許せん」
浪人がそれぞれに口走る。刀を抜いて前に出る。頭らしい浪人が前に出て両手を拡げた。
「待て待て、浪人同士がここで斬り合ってどうする。一両と少しのことで、情ないとは思わぬか。わしは倉田主膳だ。貴公の名を聞こう」
「石川伝七郎」
「石川さんか、なるほど、女に好かれるような男だ。それにわしらに囲まれてもびくともしない。腕にも自負があるのだろう。わしらはな、焦っておる。生きているのがいやになっている。それにこれから冬に向う。みんな心細い。だから、やけになる、すぐに刀を抜きたがる。べつに命は惜しくないのだ。だがな、どうせ死ぬのなら、もう少し大きいことをやって死んだらどうなのだ、とわしはみんなに言っている」
「倉田さんの言う通りだな。惜しい命ではない。だが、たいしたことはできん。あんたらは善人なのだ。悪党にはなれん。わしを斬って財布を取ってみたとて、たかが一両二分だ。死甲斐がない」

「石川さんの言う通りだ。わしもはじめはあんたを斬るつもりだった。だが、だんだん馬鹿らしくなって来た」
「悪いやつはぬくぬくと生きている。今度の冬だって、怖ろしくもなんともない。おい、悪党になろうではないか。わかった。おい、みんなで居酒屋に行こう。一両二分あれば、銚子の一本ずつくらい呑めるだろう」
倉田主膳はにやりと笑った。
「石川さん、あんたはいい男だ」
「賞められることではない。倉田さん、行こうか」
伝七郎は刀を鞘に収めて歩き出す。北野の上七軒にもどる。このあたりには、料亭がずらりと並んでいる。その中には居酒屋もあるのだ。
その居酒屋にぞろぞろと入る。伝七郎は、財布を店の老爺にさし出した。
「酒をはじめに一人に一本。そしてあとはゆっくり出してくれ」
浪人たちは、それぞれの卓に坐る。
「あとは、金があるだけ出してくれ」
倉田の卓の向いに坐った。
「石川さん、よくその気になったな」
「はじめは斬るつもりだった」

「わしら、十三人が斬れたか」
「さあ、斬れないかもしれんな」
「斬れないかもしれんのに、刀を抜いた」
「まあ、たいした命じゃないさ」
「浪人の命というのは軽いものだ。死んだって誰も悲しんではくれん」
「倉田さん、そうではない。わしもむかしは、わしが死んだら、何人が悲しんで、涙してくれるかな、と思ったこともある。いまはそうは思わん。悲しむ者が一人もいない。それが浪人というものだろう」
「石川さん、あんたには涙してくれる女が一人はいるだろう」
倉田はにやりと笑った。
銚子が運ばれて来た。浪人たちは、一応は伝七郎に、いただく、と言って呑みはじめる。
「あんたは、江戸から来たんだろう」
「そうだ」
「江戸のほうはどうだ。浪人は住めそうか」
「無理だな、浪人が生きにくいのはどこも同じだ。江戸では浪人払いはしない。その代りに、腕の立つ浪人を集めて、町の浪人たちを斬らせている。浪人は背に腹は変えられない。公儀に雇われて浪人を斬る。そういうおのれに抵抗がないのだな」

伝七郎も斬るほうの一人だった。だが、そのことは口にしなかった。
「浪人はどこにいても同じだな。これでも、むかしはみんな武士だった、侍だった。それが、このざまだ」
と倉田は浪人たちを見渡す。
「善人を止めたらどうだ」
「わしらが善人か、妙な言い方をする」
「妙な言い方ではない。この世で飯も食えない貧乏人を善人という。飯が食えて冬も怖ろしくない者たちを悪人という。そう区別すれば、たいてい間違いない」
「なるほど、言えている。石川さん、あんたは悪党だということになる」
伝七郎は笑った。
「その通りだ。だが、小悪党だ。女を蕩込んで生きている。ほんとの悪党にはなれんな」
「石川さん、わしらの頭になってくれんか。それで大仕事をやろう」
「何をやるのだ」
「冬を過せるだけの貯えをしておきたい。所司代お達しの商人を狙う。押し込み強盗だ。一人十両あれば、この冬は越せる。わしらの命は軽いが、いつまでも生きのびてやる」
「なるほど、倉田は悪党だったか、いやそうではないな、悪党になりたくてもなれん男だろう」

「どうしてだ」
「悪党なら、いまごろ、こんな姿はしていない。やはり善人だ。善人というのは、なかなか悪党にはなれんものだ。悪党が善人になれないようにだな。いざ、押し込みをやろうとしてもな、必ず裏切者が出る。すると、みんな捕えられ、首を刎ねられる」
「そうなのか」
「だから、善人なのだ。もっとも何年も一緒にいた仲間ならいいだろうがな。あんたの仲間を信用できるか」
浪人たちは、酒が入って機嫌よくなっている。だが、こんな浪人たちは、お互いを信用していない。どこででも裏切る用意はしている。こうやって十三人がまとまっているようだが、腹の中はそれぞれに違う。それが浪人なのか。
浪人は結束できないと言われている。例えば、十人結束できる。すると、押し込み強盗、何でもできるのだ。
すると世の中は強盗団だらけになる。ないわけではないが強盗団は少い。少い中の強盗団はそれだけ結束が堅いのだ。
「人数だけ集めて押し込みができると思っているのか、商家の戸締りは堅い。どうやって押し入る。押し入る前に捕えられてしまうぞ」
「ふむっ」

「まず、店の中に手引きの者を入れる。その商家の間取りも知らなければならない。暗い中に押し入るのだからな、押し入っただけでは駄目だな、金がどこにあるのかわからない。仕事は早く片付けなければ逃げられない。店の者が何人いるかも摑んでおかなければならんな。一人でも逃したら、その者が所司代に走り込む」
「くわしいな」
「考えたことはある。押し込みだけでもむつかしいな。簡単に押し込みと言うがな。この十二人の中で誰が調べるのだ。京の中で浪人はうろうろはできんぞ」
「そこまでは考えたことはない。十二人の浪人を連れて商家に押し込む」
「まず、店の中には入れまいな」
「店に入らなければ何もできんな。押し込みなど、とんでもないことだ」
「そういうことだな。結局、浪人は何もできずに餓死するか凍死するか。江戸ではそれが多い。死ぬほうが最も簡単なことなのだ」
「辻斬りはどうだ」
「わしも辻斬りをやったことがある。夜、歩いている者が金など持っているわけはないのだ。鐚銭五文というのがいたな。簡単に辻斬り強盗、武士のならい、と言ってもな、それほどの金にはならない」
「そういうことだろうな。悪事というのは面倒だし、きついことだ。だから、浪人は悪事を働

けない。手引きを入れたり、間取りを調べたり、人数を書き止める。押し込むのも楽ではない。だから浪人は善人でいるしかない、ということか」

「簡単には金にはならん。だから餓死と凍死が一番楽な死に方だ。何もしなくていいのだからな、斬られて死ぬのも悪くはない」

「何もしないで生きるというわけにはいかない。何か技術がいるな。石川さんの女蕩しも技術か」

「技術だろうな、能かもしれない。だが、女もそれほど楽ではないぞ」

「楽ではないか、女を抱いて女に食わせてもらう。こんな楽なことがあるか」

「たとえ女でも、食うということは楽ではない。ただ飯というのがな、ただほど高いものはない、と言うぞ」

語ってみたってわかるわけはない。江戸で伝七郎は、料理茶屋で働くお高という女に養われていた。お高には食わせてやっているという気がある。それだけのことはして下さいよ、と言った。

その気がなくても、女がその気になったときには抱いてやらなければならないのだ。これが意外とつらい。矜りが傷つく。

お高は、男のそんな矜りなど認めない。すると一物は立たない、そのことに怒る。男は女ではない。女ならその気がなくてもまぐわいはできるのだ。

そのとき、女は囲いものになれるが、男はなれないものだなと思った。

傍目には女に養われるのは楽でいいように見える。だが、内実はそうではない。もっとも女次第でもある。いずれはお鯉もそうなるのかもしれない。いまのところは、きれいで女っぽいが。

「そうだな、何かをやってみなければいかんな、押し込みをやる。千両ほど手に入ればいいだろう。すれば、この冬も寒さに震えないですむ。考えてみよう。失敗してもともとだ。わしのもとに七、八人は集まるだろう。まずどうすればよい」

「襲う商家を決めることだな。まず襲って逃げ道を考える。これが第一だな」

「だろうな、逃げ道を考えておく」

「三本くらいは必要だろうな。一本の道をふさがれると逃げられなくなる」

「なるほど、昼間に押し入れば問題はない。金を奪って、さっと逃げる」

「その金はどこにある」

「帳場にあるだろう」

「どれくらいの金があるのかな、これも運次第ということになるな。客の多い、はやっている店ならば、いくらかの金はあるだろう」

「そうなれば、千両とは言わん。二百両ほどでもよい」

「うまくやれよ。うまくいけば、またやりたくなるな。けっこうなことだ」

酒がなくなった。店の老爺が言った。一両二分だけの酒は出たのだ。
「いや、馳走になった」
浪人たちがぞろぞろと出ていく。
「石川さん、また、どこかで会おう」
店を出ると手を振って別れていった。体に酒が回って気持いい。ふらふらと歩く。柳生十兵衛が京に着くのはいつになるのか。江戸を出るときに打ち合わせはしておいた。
お鯉の住まいの近くの湯屋に入った。金は財布の中だけではなかった。ざくろ口をくぐって湯槽に入る。
中はまっ暗で、その上に湯気がもうもうとしている。湯気をためるために、ざくろ口があるのだ。この湯気で垢をふやかすのだ。
伝七郎は、湯の中で手足をのばした。足が人の体に触れて、あわてて足を引っ込める。どうやら女のようだ。
このころは、まだ男女混浴だった。江戸で男女の混浴を禁じるのは、寛政二年（一七九〇）のことである。それまでは混浴が続いた。風紀もそれほど乱れなかったのだろう。
女の髷だけが見えた。その髷が少しずつ体を寄せてくる。女蕩しの伝七郎も思わず逃げ腰になる。顔が見えないことには、どういう女かわからない。
どういう女かわからないというのは、妙に怖ろしいものだ。女の手がまず肩に触れて来た。

体を寄せて来て伝七郎の胸に手を這わせる。
「いけまへんか」
と耳もとで囁いてくる。
「わしを知っているのか」
「いいえ、存じまへん、そやけど、男と女でっしゃろ、かましまへん」
女は伝七郎の手をとって、胸に誘った。乳房に触れた。女は求めているのだ、逃げることはない。乳房は若かった。手に余る大きさで弾力がある。
下から手に包み込んで揉み上げる。なめらかで弾力もある。お鯉よりも若そうだ。左手で女の肌を撫でる。肥っているというほどでもないが、骨は感じられない。
「はあ」
と熱い息を吐いた。もっとも湯に入っていれば熱い。伝七郎も熱くなって立ち上る。すると女も立ち上って、体を寄せ、押しつけるようにして一物を手にして来た。
まだ怒張はしていない。それを指にしてひねり回す。それも湯気の中である。体を押しつけてようやく白い肌が感じられるくらいだ。
「どうしようというのだ」
「うちにまかせておくれやす」
こういうことが好きな女もいるのだろう。あるいは醜女か、顔は見せたくないので、こんな

ところで男を求めるのか。

伝七郎は、女の体を撫でた。肌はなめらかで弾力はあるが、それほど若い娘ではない。娘というのは、十九歳以下である。二十歳になれば女である。

一物は怒張して来た。

「うれしゅうおす」

と女は言った。江戸でも風呂は男女別ではない。もちろん、流し場では、男も女もお互に見ないようにしているし、乱れることはなかった。

なるほど、と思う。江戸でも湯の中ではこういうことがあったのかもしれない。女は一物を手にして体を湯に沈めると、尖端を咥えて来た。

舌を這わせる。舐めまわせる。そして奥まで呑み込んでおいて、腕を腰に回してくる。腰に抱きついて来る。

思わず、あっ、と声をあげるところだった。ふぐりが手に包み込まれたのだ。ドキンとなった。女が何者だかわからないのに、ふぐりまで握られるとは。ふぐりを握りつぶされれば、悶絶して湯に浮くことになる。

もっとも女に恨まれるような覚えはない。女はしきりに尖端をねぶっている。女は一物を手にして立ち上った。そして体を押しつけてくる。

「名を聞こう」

「かんにんしておくれやす」

「いつも、こんなことをするのか」

「いいえ、そんなことはおへん」

「わしを知っているのか」

「存じまへん」

湯の中には、二人だけとは限らない。姿は見えないとしても、声は聞えるだろう。女の勘は鋭い。こういうことの好きな男とわかったのか。

妙なこともあるものだ。

伝七郎は湯につかる。すると女は一物を手にしたまま、男の膝に跨がってくる。尖端を壺口に当てた。手をわずかに動かしてから、壺口に当てる。

つるんと滑り込む。

「あっ」

と声をあげる。女は首に両腕を回してくる。伝七郎は両手で女の尻を抱き寄せた。大きくない腰である。

「うれしゅうおす」

と耳のあたりに囁いて、腰をくねらせはじめる。どういうたぐいの女かわからない。茶屋女のたぐいであれば、こんな求め方はしないだろう。

顔を寄せてみても、顔はよくわからない。暗さだけではない。湯気のせいでもある。

「名は」

「お藤どす」

江戸にお藤という女がいた。しばらくは世話になった女だ。そのお藤ではない。しっかりしがみついて来て腰を回す。息を荒げていた。

「これでは、気はやれまい」

「よろしいのどす。気をおやりになっても、かましまへんえ」

よく動く尻をしっかりと抱いていた。しばらく腰を使っていて、体を放した。そして、

「うれしゅうおした」

と言って湯舟から出ていく。ざくろ口をくぐって出るときに、女の裸身がチラッと見えた。女の体は見えたが、顔は見えなかった。

体つきもよくは見えなかった。伝七郎も流しに出て体を洗う。垢擦りをたのむ。若い男がやって来て、肌を擦る。胸から腿、足、おのれで手のとどくところは自分で擦る。

女たちは、背を向けて体を洗っている。だが、どれがどれだかわからない。たしかに女の背中を眺めてみると、たしかにそれぞれに違う。

だが、さっき抱いた女の背中はわからない。

「湯の中で、男と女がまぐわうことはあるのか」

と垢擦りに聞く。

「あるようでござんすよ。でも、騒ぎになるようなことはめったにありません。旦那はいい体をしておいでになりますね。これじゃ女が抱かれたくなるの、わかりますよ。この体で女を泣かせておいでなのでござんしょうね」

そのまま、お湯で流してもらって、脱衣場に出る。裸の女がいろいろといる。いろいろの尻を見せている。だが、どれがお藤かわからない。

着物を着て、湯屋を出た。そこに待っている女もいない。しばらく待っていたが、お藤らしい女はとうとう現われなかった。

二章　無息

1

柳生十兵衛は、北野天満宮の西側、平野というあたりに部屋を借りた。その近くに上七軒という茶屋街がある。祇園と格式を争っている。

一応の家具は揃い、住まいらしくなった。伊勢屋から女中が来て、働いている。ふつうの貸家に比べると、一部屋多い。この冬はここで過すようになる、と思っている。

江戸・神田鍋町に奈良屋宗吉という商人がいる。この宗吉が十兵衛のあと押しをしてくれている。金はいくらでも出るのだ。

江戸には神徒の商人は多い。将軍家が仏教徒だから、表むきは仏教である。ちゃんと仏壇はある。だが、部屋の高いところには必ず神棚があるのだ。

そのような商人たちが裏で金を出す。それをまとめているのが奈良屋宗吉である。その宗吉

が、京・河原町通りの木綿問屋伊勢屋に話をつけてくれた。だから伊勢屋が十兵衛のために便宜をはかってくれる。

その神徒商人たちのためにも、家光を討たなければならない。仏徒将軍家光を討って、神道将軍にしなければならない。それが十兵衛の仕事である。

十兵衛は、居間に坐っていた。火鉢もある。どうにか居間らしくなっていた。表には人の気配がした。

「ごめん」

十兵衛は立っていく。玄関に石川伝七郎が立っていた。

「おお、伝七郎さん」

「十兵衛さん、いつ、京に」

「昨夜着いた。伊勢屋に泊めてもらった。まあ、玄関先では話はできん、上ってくれ」

それでは、と伝七郎が上ってくる。居間に坐る。さっき、書付けを伝七郎の家に投げ込んで来た。だから、あわててやって来たのだ。

「一別以来」

「それほどのことはない。伝七郎さんこそご苦労であった。あの家で女と一緒か、そういう香りがしたな」

「芸妓だ」

「伝七郎さんらしいな」
「わしは、どういうわけか、女とは縁が切れんようだ」
「それも能だよ。能があるから食えていける」
十兵衛は、五十両の金を出した。
「これは、来年までの生計の費用だ」
「いや、江戸を発つときにもらった」
「伝七郎さん、金はいくらでも出るのだ。遠慮することはない」
「わしは、たいしたことはしていない」
「むつかしく考えないでくれ。いま、風衆が動いてくれる。百人ほどは出してくれるという。今度こそは討ちもらせない。伝七郎さんもそのつもりでいてくれ」
「わかっている。わしも今度こそは死に場所だと思っている」
「まあ、死なんでくれ。とにかく、ちょっと呑みに行こうか」
「わしが案内する」
「いや、席は取ってあるのだ」
住まいを出て歩く。北野社頭という。北野天満宮の門前町だ。盛り場になっていて一隅が茶屋街になっている。江戸で言えば料理茶屋である。料亭がずらりと並んでいる。
その一軒『竹乃屋』に入る。この上七軒は、洛東の祇園に相当する所だ。仲居が出て来て座敷に案内する。伊勢屋の名で席はとってあったのだ。伊勢屋の名はどこででも通用する。
六畳の部屋に案内される。しばらくすると仲居が、酒と料理を運んで来る。京にはうまい酒が集まるのだ。
仲居に酌をさせて呑む。もちろん、伝七郎は、こんな料亭には来たことがなかった。
「あの、お姐さんを二人呼んでありますが」
と仲居が言う。芸妓である。
「そうか、呼んでくれ」
はい、と言って仲居が去る。しばらくして、襖が開いた。そこに芸妓が二人いた。
「ありがとうさんで」
と頭を下げる。そして部屋の中に入ってくる。酌をする。芸妓にも盃を渡して酌をしてやる。芸妓は、雛菊と小桜と言った。
「お武家さまのお名を聞かして下さいな」
「わしは神谷兵庫、こちらはわしの朋輩で石川伝七郎だ」
この京で、柳生十兵衛を名乗る気はなかった。伝七郎も、はじめは十兵衛を神谷だと思っていた。
策を練るために京に来たのだ。柳生の名が高まっては困る。江戸で集まっては人の目につく。江戸の町には密偵の目が光っているのだ。それで京に集まることにした。

もっとも京は浪人を洛中から追放した。だから京の中には住めない。だが、京に全く住めないわけではない。洛外にはいくらでも住める。

だから、洛外には以前よりももっと浪人がふえている。浪人たちも、特別のことがなければ、洛中には入らない。それで京の治安は安定しているように見える。

「神谷はんも、石川はんも美男どすな」

と小桜が言った。二人とも美男である。だが格が違う。伝七郎は十兵衛と比べれば落ちるが、女が興味を持つのは伝七郎である。

十兵衛は、女たちがどこか近寄りにくいところがある。

「どうだな、近ごろ、このあたりは」

「この何年かで、ご浪人がふえたんどすえ。にぎやかどすが、それだけどす。お金は動かしまへんのどすえ」

「だが、この上七軒は美人が多いと聞いておる。洛中の分限者がよく集まるのだろうが」

「へえ、それでもっている町どす」

銚子が空になって、芸妓が手を打って酒をたのむ。仲居が運んで来る。

十兵衛は、二十九歳になっている。来年は三十だ。神道将軍をめざして浪人になったのは二十歳のときだった。もう十年になろうとしている。

大納言忠長を口説けなかったおのれを、いまだ悔んでいるのだ。あのころなら、忠長が将軍になるのは、それほどむつかしいことではなかったのだ。

江戸城の中にも、忠長派の重臣は多かった。だが、いま思えば、忠長は将軍になるような質ではなかった。家光だって暗愚だが、周りの重臣たちに頭の切れる人が多かった。それだけの差でしかない。

忠長のそばに一人でも切れる男がいたら、と思う。もちろん、重臣たちは、徳川本家の家臣たちだった。謀叛はできなかった。

雛菊が十兵衛のそばに寄って来て、腿に手をつく。そしてそれとなく撫でる。これが芸妓の手だろう。

もっとも女たちがいる前では、家光暗殺のことなど喋れない。もちろん、十兵衛は喋るつもりはない。

「雛菊、そのほうの肌に触れたいな」

「ほんまどすか、うれしゅうおす」

と体を押しつけてくる。

「伝七郎さんも、小桜を可愛がってやれ、それとも、女には食傷しているのかな」

「いや、それほどには、金がない」

「伝七郎さんは、金ではなかろう。女が自然に寄ってくる」

「女は、もういやどすか」

と小桜が言う。
「神谷さん、それほどに女にもてるわけではない」
「いいえ、石川はんは女のほうから寄っていきたい男はんどす」
「伝七郎さん、小桜がそう言っている。抱いてやれよ」
そのために軍資金を渡したい、と言いたいのだ。
「そうだな、お言葉に甘えよう」
「ほんまどすか、うれしい」
と小桜も伝七郎に抱きつく。
芸妓は、売りもの買いものである。だが、遊女ではない。客を選べるのだ。小桜だって伝七郎はいやではないのだ。
「だが、神谷さん、話のほうは」
伝七郎は、暗殺の話をしたいのだ。
「伝七郎さん、その話はゆっくりとしよう。急ぐことではない」
「そうですね」
「それでは、案内してもらうか」
と十兵衛は立ち上る。雛菊を連れて去る。料亭には、もちろんそのための部屋はある。芸妓を連れて外に出る手もある。

部屋に入る。そこには夜具が敷いてあり、行燈がついている。雛菊は一度出ていき、もどって来た。
どうぞ、お風呂にと言う。
湯殿に案内される。料亭では、風呂も馳走の一つである。それだけに立派に造ってある。総檜造りの湯殿である。
裸になって、流しに降りる。脇指だけは手にしていた。武芸者の心得である。料亭の風呂は流し込み式である。もちろん垢を落すために来る客は来ない。だから、湯気をたてることはない。
だから、湯舟の中も明るい。裸になって湯に入る。手足をのばす。湯の中に手足も見えている。明るい湯は快い。
やがて、十年になろうとしている。美少年もやがて三十になるのだ。おのれの意地を通さなければ、いまごろは大名になっている。家光の小姓の一人だったのだ。小姓たちはほとんどが大名になっている。もちろん、大名の子もいた。
美少年が多かった。家光はこの美少年たちを念者（恋人）にした。十兵衛が家光の念者であったかどうかはどうでもいい。美男の多い小姓たちの中でも、十兵衛は美男だった。
雛菊が湯帷子姿で入って来た。
「お背中、流します」

と言う。十兵衛は湯槽を上って、腰掛けに坐る。雛菊は背中に回って背中を擦る。

「大きくてきれいな背中どすな」

擦る途中で背中に抱きついて来る。もちろん、湯帷子が濡れるのは承知である。若ければ、雛菊の体を前に抱き取るのだが、それだけの興味はなかった。

雛菊は、背中を擦って、前に回って来た。まず、腕を擦り、胸から腹に指を這わせる。股間の一物は怒張していた。

だが、そこに手をのばすのは遠慮している。十兵衛もそれを握れとは言わない。雛菊は足を擦る。最も垢がつきやすいのは、足首の下である。

足の指股、甲からくるぶしのあたり、垢がないようでも、ボロボロ垢が浮き上ってくる。目の前に女の体がある。買った女だ。一刻は十兵衛のものである。

女のほうでは抱かれたがっている。彼女は最後に一物を手にした。手を払いのけられそうな気がして、おそるおそる、ふぐりも手に包み込む。洗っているのだ。

そうされながらも、十兵衛は別のことを考えていた。女のために一物を怒張させているようなものだ。怒張させないでは雛菊に申しわけない。

「よろしゅうおすか」

と言った。一物を口にしていいか、ということだ。十兵衛は頷いた。湯帷子は濡れている。肌に貼りついて快くない。それで脱いで裸になった。

まだ、体には自信があるのだろう。白い肉付きのいいきれいな体をしていた。乳房の膨みも、大きくはないが体つきに似合った大きさで形もいい。まだ若い。二十三ほどか。

ゆっくりと股間に顔を埋めてくる。白い背中から尻が見えていた。それをぼんやりと眺めながらも、別のことを考えていた。

日光東照宮が落成するのは、来年の三月ころだろう、とすれば、家光の参詣は四月ころになるのか、その日程はまだ決っていない。もちろん決まれば阿部豊後守あたりから洩れて来る。

日光道中の途中で家光を襲うことになる。大井川では失敗した。十兵衛の目の前で、父但馬守宗矩が目を剝いたのだ。

ごく普通のときなら、剣はすでに宗矩をしのいでいる。だが、家光を守るために命を投げだしている。こういうときの宗矩は、十兵衛でなくても討てない。

雛菊は一物を口に咥えてしゃぶっている。白い尻をぼんやりと見ていた。一物を放して彼女は上を向いて、

「好きどす」

と言った。たしかに買われた身だが、商売抜きで、ということだろう。そして、また咥える。深く呑み込む。頭を上下させる。体を起した。

「よろしゅうおすか」

膝の上に跨がってもいいか、ということなのだ。うむ、と頷いた。十兵衛の腰に跨がってく

る。一物を握った手で尖端を壺口に押しつける。手をわずかに使って、つるりと滑り込ませ、わっ、と声をあげてしがみついて来た。

両腿がしっかりと十兵衛の腹を締めつけてくる。そして腰を使う。十兵衛は両手で女の尻を摑む。なめらかで弾力はある。手に快い感触だ。

背中に手を這わせ、太腿を撫でる。優しい襞が一物をぴったりと包み込んでいる。桶に湯を汲むと、雛菊は胸を開いて、そこに湯を流し込んだ。そしてまたしがみついてくる。肌と肌をぴったり押しつける。

呻き声をあげて、腰を回す。

「うち、好きどす、好きになりました」

一見の客にこれほど夢中になるのは、惚れたのだろう。だが、十兵衛はそれほどの気分ではない。女が惚れ込んでくれるのは、有難迷惑なのだ。

女は嫌いではない。だが、情を絡ませずにまぐわいだけを楽しんでくれればそれでいいのだ。芸妓というのは、そういうものだろう。もっとも芸妓の前に女だということになれば別だ。女としての情を絡みつかせてくる。

「うちでは、いやどすか」

いやだとは言えない。もっともいやではないから、こういうように抱いている。

「いやではない」

その先は言えないのだ。

十兵衛は雛菊の尻を抱き上げた。立ち上ると湯舟のふちを跨ぐ。そして抱いたまま、湯に入る。そして肩まで沈む。

「あっ、あ、あ」

と声をあげてしがみついて来て、しきりに腰を回す。いまは、それほど女に夢中にはなれないのだ。小野次郎右衛門忠明の娘冴には夢中になった。あのころは若かった、と思う。

女は冴がはじめて、というのではなかったが、冴の体には夢中になった。美しくもあったし、年上でもあった。優しくてよく気のつく女だった。

冴で女というものを知った、と言ってもいいだろう。

「あとにしよう」

と言うと雛菊は、はいと言って膝の上から降りた。先に湯から上って体を拭う。脱衣場に行くと、湯帷子が置いてある。それを着て脇指を手に部屋にもどる。そこに、脱いだ着物とふところの中にあったもの、それに刀が置いてあった。

夜具の上に仰向けになる。天井を眺める。

2

どうしても家光を殺さなければならない。今度はどうしても殺さなければならない。最後の機会だろう。今回、もし失敗するようなことがあれば、もう気力が続かないだろう。

柳生の庄にもどって髪を落し、坊主になるしかないだろう。神道将軍を諦めなければならなくなる。諦めるということは、この十年何をやって来たのだろうか、と思う。

二十歳から三十歳まで、青春の十年間が全く無駄になる。何もしないのと同じだ。この年になって悔むのはつらい。何のための十年だったのか。

それを考えると、引けないのだ。何が何でも達成しなければならない。

どうして将軍家を神道にしようと思ったのか。父宗矩は、そんなことはどうでもいい、柳生家こそ大事と言った。

石舟斎、その前の代から思えば、柳生家こそ大事というのはよくわかる。一度は柳生家は潰れかけたのだ。

石舟斎は、家康に、余に仕えよ、と言われ嫡子の又右衛門を推挙した。石舟斎ならば三千石ほどで召抱えられたろう。だが又右衛門は二百石だった。

そこから苦労して柳生家を守って来たのだ。血のにじむような思いだったろう。それなのに

十兵衛は、将軍家を神道にすると言って出て行った。

但馬守宗矩はどういう思いだったろう。わが子でも斬り殺してしまいたかったろう。いまは、そのときの宗矩の気持を思う。

最低の親不孝だった。悪くすると、柳生家はなくなってしまうのだ。もっとも、十兵衛一人で何かができるわけではなかったのだ。

ここ十年、将軍家を神道にすることは正義だと思って来た。大権現家康の考え方は間違いだと思い込んで来た。

家康自身は神になっている。なのに家光を仏教徒にした。わからない。秀忠の子忠長を将軍にすべきだったのだ。

秀忠の正室江与の方は、織田信長の血を受けている、とすれば、子の忠長も信長の血がどこかにある。それで家康は忠長を嫌った。

家康は、後から糸を引いて、明智光秀の武将斎藤内蔵助に、信長を本能寺に討たせている。その血を引いている忠長を嫌い、斎藤内蔵助の娘お福に手をつけて、子を生ませた。このお福が家光を生んで春日局になった。

その辺のことを考えてくると、家康の考え方は道理のように思えてくる。

「おのれの考え方が浅はかだったのか」

と呟いてみる。

雛菊が入って来た。そして、胸に顔を伏せてくる。
「神谷はん」
衿を開いて、胸に頬を押しつける。
「うちが、神谷はんお一人、養ってさし上げられます」
もちろん、浪人としては有難いことだ。なるほど、惚れるということは、こういうことなのだ。芸妓は稼いでいる。浪人を一人養うだけの収入はあるのだ。あるいは財力もあるのかもしれない。
「それは、けっこうだな」
「よろしいのどすか」
「世話になろうか」
「うれしゅうおす」
と言って抱きついて来た。
「ほんまどすな、ほんまどすな」
と身を揉む。
石川伝七郎などは、女にこのように口説かれるのは、毎度のことだろう。なるほど雛菊は情を絡ませる女だったのだ。
京に来て、いきなりこんな女に当るとは、運がよい、と言うべきか。

「うち、こんな気持になったの、はじめてどす」
股間をさらして一物を手にした。怒張はしていなかったが、すぐに怒張するはずである。一物を摘んでひねる。
雛菊は、体を起し、股間に顔を埋めて来た。そしていきなり一物を根元まで咥えて来た。一物は一気に怒張する。
「うれしゅうおす」
と言って舌を這わせて来る。舐めまわす。手でふぐりを包み込んで来る。
「わしは、一体何だったのだろう。このわしの十年は」
おのれのやっていることに疑念を抱く。するともう駄目なのか。
忠長は死んではいないのだ。屋代甚三郎の名で、江戸・本郷にひっそりと住んでいる。十兵衛に、忠長を死なせるな、と言ったのは阿部豊後守忠秋だ。忠長はこの忠秋の看視の下で生きている。
この忠秋は、表には出さないが、神道の一人だ。できることなら、忠長を将軍にしたかった。家光は二度ほど重病をした。もう駄目かもしれない、と言われたこともあった。そういうときに忠長の人気が急上昇する。
家光が死ねば、次の将軍は忠長だと決っていた。忠長を将軍とする動きもあったのだ。だが、その度に家光は生きのびた。

十兵衛も家光の死を願った一人だ。だが、その度に家光は生き残って来た。運のいい男なのか。

そのようなときも、忠長は平気だった。何も考えることはなかった。万が一にも家光が死ねば、忠長が将軍になるのだ。それなのに当の本人はそれがわかっていながら何も考えなどしないのだ。

家光が死ねば、何もしないで将軍になれる。当り前のことだと思っていたのだろう。ただちやほやされるのをよろこんでいた。

それを思うと十兵衛はたまらなくなる。忠長に命賭けになっていたことが悲しい。ここから洛北に入る。山の途中に円通寺がある。その円通寺で後水尾天皇に会ったのだ。

後水尾天皇に詔勅をいただいた。詔勅で蜂起すれば大義名分がある。大名たちも立つはずだった。

後水尾天皇に十兵衛がお願いしたのだ。もちろん、十兵衛などに会っていただけるわけはない。どれほど苦労したか、といまさら言ってもはじまらない。

雛菊が、一物を手にして腰に跨がって来た。一物を壺に呑み込む。そこは露をいっぱいためていた。ぬるりと滑り込んだのだ。

「うれしゅうおす」

と言って首に抱きついて来る。腰はくねっていた。腰のくねりを早くする。腰が疲れて、はあ、と声をたてうつ伏して来た。

内腿で男の腹を強く締めつけてくる。一物を締めているのだ。

「神谷はんを、大事にいたします」

「よろしくたのむ」

そう言うしかない。しばらくはそれもよかろう、と思うのだ。

雛菊は、上半身を起した。目の前に乳房がある。よい形をしている。色が白いから乳首も色づいていない。きれいな乳首だ。もちろん、どこもかしこもきれいだから商品になる。

両手で乳房を摑む。それを揉みあげる。あーっ、と声をあげて腰をひねる。

このところ、いつも頭の中はもやもやしている。いまは、何と言ってもどうにもならないが。死んでしまいたい気分でもある。

十兵衛の下で働いてくれている人がいる。木賊孫十郎、桐生重兵衛だ。そして臥雲玄蕃も江戸にいる。旅に出ていたのを連れもどした。もう一人、二階堂主水がいる。

これらは、十兵衛のために、これまで働いてくれていた。いずれもこれらは京に集まることになっている。

とにかく今度が最後なのだ。十兵衛ももうこの辺でよかろう、と思っている。家光が憎いのではないのだ。

雛菊は、腿を閉じた。そして自分から反転した。十兵衛が上になったのだ。股を開く。膝を

折る。踵で体を支え、尻を浮かして回す。
「気が、気が」
と声をあげて、悶え狂う。一気に達したようだ。
「いきましたえ」
と言ってしがみついてくる。
「うち、神谷はんと離れられしまへん」
身を揉む。
「惚れてしもうたんどす。神谷はんのためだったら、うち、死ねますえ」
と言いながら、腰を回して達するのだ。
「うち、どうして、こんなに好きになったんどすやろ。またどす」
と悶え狂う。
「有難迷惑と言ってはいかんな」
ゆっくりと出し入れする。ヒーッ、と声をあげた。女はこれほどに悶えるのか、と思うほどに狂う。
次々に気をやっている。
「いつまで、気がいくのどすやろ」
これまで、よほどいい男に出会わなかったのか。もっとも、芸妓を自由にするにはそれなりの金がかかる。
たいていは金が自由に使えるようになると年をとっている。金で女と遊ぶことになる。金はあっても、女は本気で惚れ込んではくれない。すると生人形と同じだ。
それでも、女を抱ける男はいい。たいていの男は、女を眺め、よだれを流しているうちに年とってしまうのだ。
十兵衛は放出した。雛菊は、しばらくは動けない。失神したようになっている。
「あっ、いやっ、抜ける」
と声をあげて、抱きつき、はざまを押しつけてくる。一物は壺の中で力を失っていた。雛菊は、体を放しはざまに紙を挟み込み、男の体を仰向けにすると、萎縮してぬめる一物を口に咥えた。
舐めしゃぶる。そして体をずり上げて来て、胸に顔を押しつけてくる。指は一物を摘んでいた。そしてひねる。まだ、終ったわけではないのだ。ふぐりを手で包み込んだりする。充分に気をやったはずなのに、まだまだ足りないようだ。女は欲が深い。

3

雛菊を連れて、料亭を出た。彼女は寄り添って歩く。うれしくてたまらない様子だ。今日、

はじめて会ったばかりなのに、もちろん一目惚れと言うこともある。

「うち、こんな気持になったのはじめてどす」

十兵衛は美男である。そしてどこかにひんやりとしたものがある。あるいはそこが女を狂わせるのかもしれない。

女は男に惚れると死んでもいい、という気持になれるのか。女ではない十兵衛にはわからない。

目の前に黒い影が立った。十兵衛は雛菊を押しのけた。

「離れていろ」

と小さく言った。

「いいご身分だな。芸妓を連れて料亭から出て来るとは」

「それがどうした」

「少しこちらにも分けてもらいたいものだな」

「何をだ」

「その女と、酒代と」

「取れると思うのか」

十兵衛は、体を寄せて刀を抜いた。浪人は目を剝いて動けなくなった。そこを上段から雁金に斬り下げた。

「キャーッ」

と雛菊が叫んだ。十兵衛は、ゆっくりと刃を拭う。ていねいに拭っておいて鞘に収める。左肩の着物がめくれて浅黒い肌をさらした。浪人は、体が強直して動けないのだ。

斬ることはなかった。だが虫の居所が悪かったのだ。浪人にとって不幸だったのか倖いだったのか。苦しみも飢えもせずに死ぬことができたのだ。

死にたい、死にたい、と思いながら、人間はなかなか死ねないものだ。この浪人も、この冬を過すのにつらかろう。春というのは待っているとなかなかやって来ないものだ。

それが一瞬のうちに命が終った。十兵衛は顔をあげて宙空を見た。浪人の体を放れた霊が、その辺に浮かんでいるはずなのだ。

「よかったな、苦しみがなくなって。わしが通夜をしてやる。成仏しろ」

「キャーッ」

雛菊がまた悲鳴をあげた。浪人の体半分がめくれてぶら下ったのだ。腹のあたりまで斬り下げた。左側の体がゆっくり斬り放されてめくれたのだ。それでいて浪人は立っていた。

すでに、あたりに弥次馬が集まっている。十兵衛は、それを掻き分けて外に出た。雛菊が追って来て、右腕にしがみついて来る。

「おそろしゅうおす」

「あの浪人は、金をせびる。雛菊を抱かせろと言う。そして刀を抜いて斬ってかかる。いくら

か早く斬っても同じことだ」
「神谷はんは、怖ろしい人どすな」
「いやになったか、わしはそういう男だ」
「いいえ、それとは別どす。うち、痺れました」
「怖ろしかったのだろう」
「はい、でも、人をあのように斬りはるのどすか」
「苦しませずにすむ」
十兵衛は、先におのれの住まいに連れていった。
「住まいもお持ちなんどすか」
「そういうことだ。わしはいつもここにいる。さあ、雛菊の家に行こうか」
はい、と妙な顔をした。おのれの家で十兵衛を養うつもりだったのか。だが、雛菊も、これも思ったよりもいいことかもしれない、と思う。
雛菊の住まいに着く。
「どうぞ、上っておくれやす」
暗い家の中に入る。行燈に火が入る。女の住まいらしく、どこか甘い匂いがする。
「情人はいなかったのか」
「いました。だけど追い出しました」

「なるほど、用がなくなれば、追い出すのか」
「いいえ、違います。神谷はんは別どす」
と十兵衛の膝に抱きついてくる。
「よい、わかった。明日のことは誰にもわからん、と言うことだ。いまだけ、こうしていればよい」
「いやどすえ、そないなこと」
そう言いながらも、雛菊自身が明日はどうなるかわからない、と知っているのだ。
「お風呂をわかします。釜風呂どすえ」
水さえ入っていれば、釜風呂はすぐにわくのだ。十兵衛は、坐って火鉢に手をかざす。思うことは、将軍家光のことだ。
「今度が最後だ」
と呟く。いまはもう、家光が死のうと生きようとどうでもいいことのように思える。すると、わしのこの十年は何だったのか、ということに突き当る。
一生のうちで一番大事な時期に、十年間も一体何をして来たのだろうか。そう思うと打ちひしがれてしまう。
将軍家が、神道派であろうと、仏教徒であろうと、どうでもいいことだ。十兵衛には関り合いのないことだ。

二十歳のとき、家をとび出さなければ、いまごろは大名だ。大名になれなかったのが無念などではない。十年を無駄に生きて来たことが無念なのだ。取り返しのつかないことである。いまでは、どうしても神道将軍をと思っているわけではない。むかしは、まるで熱病みたいなものだった。

雛菊が化粧を落し、ふだん着に換えていた。酒膳を運んで来た。

「化粧を落した顔もいい」

「恥ずかしゅうおす」

と両手で頬を押えた。

「今夜は、さっきの浪人の通夜をしてやらなければならんな」

はい、と酌をする。

「名もわからんな、名くらい聞いておくべきだったのかな」

三十五、六とみえる浪人だった。まだ膂力を残しているように見えた。だから十兵衛に挑んで来たのだ。

浪人には十兵衛が見えていなかった。刀を抜くときには、まず敵を知らなければならない。当然、いきなり斬られるとは思っていなかった。

無茶な、と思ったのだろうが、声を発する暇もなかった。刀柄にも手をかけていなかった。もっとも、脅し取ろうとしたのは浪人である。

斬られても文句も言えない立場である。十兵衛は人を斬るために、まず敵を作る。この北野ははじめてだ。

浪人を斬った。浪人には仲間がいるはずである。その仲間が敵になったことになる。

「神谷はん、お風呂にどうぞ」

と言った。また、風呂で体を洗ってむつみ合おうということなのだ。女とは欲が深い。さっきの料亭で充分に悶え狂った。もう十日ほどは男はいらない、というほどに。

それなのに、である。二度ほど気をやればもうたくさんという女もいる。だが、雛菊のような女は、そうはいかないのだろう。

もともと男好きの体質なのだ。三日ほども男と一緒に寝床の中という女もいるのだ。そういう女は、男に抱かれているときだけが、生きているのだろう。

雛菊もそのたぐいの女なのか。だとすれば応えてはやれないな、と思う。女は嫌いではないが、そこまで女にのめり込むことはできない。

釜風呂に入った。芸妓は座敷に出る前には必ず湯に入る。たいていは湯屋に行くのだろうが、おのれの家の釜風呂ですますこともあるのだろう。

湯から上って居間にもどる。火鉢には炭火があり、鉄びんに湯が沸いていた。その湯の中に銚子が入っていた。

その銚子を出して、手酌で酒をのむ。十兵衛は、神徒である。いまさら言うことではないが、

神徒は気が荒い。短気でもある。

だから、むかっ、として浪人を斬った。そういうことを思うと、家康が仏教徒の家光を将軍にしたのもわかるのだ。

世の中を静めるためには、仏教徒の世の中のほうがよかった。おそらくは、足利将軍家もそうではなかったのか。源氏の流れである。源氏の鎌倉幕府も長くは続かなかった。頼朝から三代の実朝まで続かずに、実朝は暗殺されてしまった。

家康は、徳川の世を長くもたせるために、いろいろのことを考えたのだろう。二代将軍には能のない秀忠を持って来た。女房の江与が怖ろしくて、側女も置けなかった。

家康は、秀忠を、

「この馬鹿が」

と思っていたのに違いない。もっとも頭の切れぬ家臣たちがいる。

家康は、いつか秀忠に聞いた。

「これから徳川家はどうだ」

「危のうございます」

と言った。それを聞いて家康は安心したという。神道派でも秀忠のように気のない男だったら安全だと思ったのだ。

紀伊の頼宣などを将軍にしたら、また合戦だろう。頼宣はもちろん神道で気性の激しい男である。できることなら、おのれが将軍になりたかったくらいである。

十兵衛も、頼宣に会ったことがある。気の荒い男だ。できれば家光にとって替りたかった男である。気が荒いだけではなく能もあった。

頼宣が忠長であったら、すぐに将軍家を乗っとっていただろう。忠長を助けて、家光を引きずり降ろせばよかった。

だから、十兵衛は何度も忠長を立たせてくれるように頼んだ。だが、頼宣は忠長が気に入らなかった。愚鈍であることを知っていたのだ。

「忠長をかつぎ出そうと思うのは、止めたほうがよいな。重臣たちにも人物は一人もおらん、止めろ、止めろ」

と十兵衛に言ったものだ。

結局はどうにもならなかったのだ。家康の考えは間違っている、と思いながら、とうとう家康には勝てなかったことになる。

雛菊が風呂から上って来た。湯帷子の衿が開いて、白い肌を見せている。乳房の膨みさえ見せていた。美しい肌である。しみ一つなく、きめもこまかい。京女にはこんな肌をしている女が多い。

膳の向うに、膝を崩して坐った。十兵衛をまた、その気にさせるだけのものはある。盃に酒を注いでやる。白い咽を見せて酒をのむ。

男をその気にさせる酒の呑み方、というのもあるのだ。白いのどを見せ、咽から白い乳房の一部分までも見せる。布をほんの少しめくれば、乳房が顔を見せる。

その危なかしいところが、男心をそそる。もちろん、その辺は心得ているのだ。媚態の巧みさというのが、商売にも影響してくる。芸妓になれば、自然にそういうことが身について来るのだ。

4

住まいにもどって来た。家の中には、灯りがついていた。女中のお留が消し忘れて帰ったのか。お留は通いで来ることになっている。

用心しながら、家に上った。伝七郎だったのだ。

「いたのか」

「ああ、ちょいとのぞいたら、書状があったので待っていた。ふつうの書状ならよい。これは左封じだ」

「なるほど」

と伝七郎がさし出すのを手にした。左封を開く。書状を読んで、伝七郎に渡した。

「果し状か。北野天満宮境内にて待つ。明、明け六ツ、柴山丹後、柴山丹後とは何者だ」

「知らんな」

「心当りはないのか」

「ある。『竹乃屋』を雛菊と出て、浪人に声をかけられた。その浪人を斬った」

「その仲間か」

「そうだろうな、その他には考えられん。ちょっとな、虫の居所が悪かった」

「十兵衛さんらしいな。天満宮に行くのか」

「行かなきゃならんだろうな」

「仲間が何十人いるかわからんぞ」

「かまわんさ」

「この北野には、浪人が多い。数百人、いや千人はいるだろうな」

「いくらいてもいいさ、十人も百人も同じだ」

十兵衛には八重垣がある。相手が多勢だと囲まれたほうが、かえって斬りやすい。しばらくすると、相手が斬り込めなくなって来る。おのれたちの仲間の死体で動けなくなるのだ。

もちろん、八重垣を身につけるまでは苦労した。囲まれて、ずたずたに斬られ、危うく助かったくらいだ。

「わしにまかせぬか」

「そうはいかんだろう。この柴山という男、わしが浪人を斬ったところを見ていた。それで挑

んで来た。もちろん、わしに勝てると思っている。勝てると思わなければ挑戦はしない。ただ、仲間が斬られた腹いせではないだろう。そうだとしたら、こんな挑戦状などたたきつけはしない」

「役に立たんか」

「伝七郎さん、こんなことで役に立たなくていい、もっと大きな仕事が待っている」

「まあな」

「あの芸妓はどうした。よかったか」

「いや、抱かなかった」

「どうして、よさそうだったではないか」

「わしにはお鯉という女がいる」

「そうだった、そうだった。伝七郎さんは、女が一人いればよかったんだ。わしとは違った。わしは女が何人いてもよい。寝てみれば女とはそれぞれ違うものだ。そのお鯉という女、伝七郎さんで、よかったな」

「そうではない。女をあつかうのは大変だ。一人で充分だ」

「伝七郎さんは、わしとは違うわけだ。帰ってお鯉さんを抱いてやれ」

「明朝はわしもいく」

「ああ、だが、手を出さんでくれ、見ているだけでよい」

そうしよう、と言って伝七郎は立っていく。玄関につっかい棒をはめて部屋にもどる。次の間には夜具が敷いてあった。着物を脱いで夜具にもぐり込む。

たしかに女というのは面倒なものだ。ただ体だけのたのしみというわけにはいかないのか。今度だって、泊っていってくれ、というのをむりやりに帰って来た。

翌朝、目をさますと、お留が来ていて、朝餉の用意をしていた。そう言えば、明け六ツの鐘が遠くで鳴っていたような気がした。

「お留さん、明け六ツは過ぎたか」

「はい、さっき鐘が鳴りました。お出かけですか」

「すぐに用意はできるか」

「はい、ご飯は炊けています。召し上りますか」

「そうだな、少し食っていこう」

「味噌汁はこれからですが」

「飯だけ食っていこう」

「はい、とお留は椀に飯を盛り、香の物と梅干を出した。それで充分だった。

「馳走さま」

と言って座を立った。玄関に出て、つっかい棒を外した。戸を開けて表に出る。空気は冷めたくなっていた。まだ日中は暑いくらいのときもある。だが、朝晩は秋を感じさせる。

ゆっくりと歩く。紙屋川に架る橋を渡る。そして天満宮に入る。本堂の裏から回り込む。本堂の階段に浪人が坐っていた。

もっと多くの浪人がいると思った。だが、たった一人でもおかしくはなかった。柴山丹後は、十兵衛の姿を見て、ゆっくりと立ち上った。

遅かったな、とは言わなかった。じっと待っていたのだろう。遅れて来るのに焦れては負けである。

間は二十間ほどあった。

「わしが、柴山丹後だ。神谷兵庫、なかなかできるようだが」

どこで聞いたのか知らんが、十兵衛はこの北野に来て、神谷兵庫を名乗っている。

「少しは歯ごたえがありそうだな。あの浪人の斬り方は気に入った」

「あの浪人の仲間ではなかったのか」

「なんの、あんな浪人は知らん。わしは新陰流をやる。わしに勝てる浪人はいない」

「それほどにできるのなら、仕官すればよいではないか、どこかの大名が召抱えよう」

「わしは武芸者であって武士にはなりたくない」

「なるほど、面白いな」

「そのほうは考えたことはないのだ。侍になれば、死なねばならん。何かあればな。武芸者というのは、何があっても生きのびることだと思っている」

「けっこうだな。生きのびたかったら、すぐにここを立去ったほうがよろしいな」

「なるほど、自負はあるようだな。何流を使う」

「神谷流だ」

左手を刀柄にかけ、ゆっくりと回り、少しずつ、間を縮めていく。お互いに刀を水平に抜いた。そして右手に下げる。少しずつ間を詰めて、間を三間まで詰めた。

柴山にも、どこにも隙はなかった。隙がないのは当り前だ。隙とは簡単にできるものではない。それなりの使い手だろう。十兵衛は相手の目をじっと見ていた。

睨み合いである。お互いの視線がぶっつかり合って火花を散らす。火花が右へ行ったり左へ行ったり、うろうろしている。お互いに押されないように、押し返す。

どちらが先に動くか、である。十兵衛には丹後の技倆は見えていた。丹後には十兵衛は見えていないようだ。

はじめは、丹後のほうが優位に見えた。それが少しずつ変化してくる。丹後の顔色が変って来るのがわかる。

丹後が先に動いた。左へ動く。右手にあった刀は左に移動する。

「わっ」

と叫んだ。一歩を踏み出して、逆袈裟に斬り上げた。更に足を擦って踏み出そうとしてあわてて、足を止め、ずるずると退いた。

逆袈裟は見せ太刀だった。その一閃で相手は一歩退くつもりだった。退けばそこにつけ込む。神谷兵庫は退かなかった。つまり見切ったのだ。ひゃっと背中に冷めたいものが滑った。そんなはずはない。退かなければならない。それが立ったまま、退かなかった。

びっくり仰天した。おそらく見切りは一寸足らずだったはずだ。一寸の見切りができる武芸者は、そうざらにはいない。

「ま」

まあ待て、と言おうとした。その寸前に、

「ギヤッ」

と声をあげた。丹後は声が出なかった。機先を制せられたのだ。兵庫は丹後に声を出させまいとしている。

「ギヤッ」

と兵庫が声をあげた。丹後は体を震わせた。丹後の顔は赤くなり青くなっていた。体が動かない。そういうときには腹の底から叫べばよい。体が動く。叫び声をあげようという寸前に、兵庫が声をあげる。すると丹後の叫びは引っ込んでしまうのだ。

叫ぼうとする。十兵衛が声をあげる。これを何度かくり返すと、丹後は叫べないだけではなく、息ができなくなるのだ。

丹後は、目を剝いた。そしてそのままドサッと倒れた。息ができなくなって気絶したのだ。

本堂のむこうから伝七郎が現われた。そして歩み寄ってくる。十兵衛は丹後の頭を蹴った。これで呼吸はできるはずである。

「十兵衛さん、これは何ですか、さっきから見ていましたが」

「気絶した」

「どうして気絶したんですか、どこか打たれたわけではなかった」

「無息という」

「無息ですか、何ですか、それは」

「術だな」

「そういう術があるのですか」

「わしの見切りで、びっくり仰天した。体が動かなくなったんだな」

「わかる」

「腹の底から叫べば、体が動くことを知っていた。だから、叫ぶ寸前に気合を入れてやる。すると叫べない。相手に叫ばせない術だな。だんだんにわしの術は嵌ってくる。そして息ができなくなるのだ。それで気絶する」

「そんな術があるのですか」

「この術にかかるかどうかは、相手次第だな」

「無息の術ですか」

「まずは、相手をびっくりさせなければならんな。びっくりすれば、全身に力が入る。動けなくなるのだ」

丹後は、起き上って、あたりを見まわした。そして十兵衛が見えた。膝を折り、両手をついた。

「遠く及びませぬ」

十兵衛はまだ三十前だ。丹後は三十五、六になっている。男としても剣士としても盛りだろう。

「神谷どの、わしを弟子の端に加えていただくわけにはまいりますまいか」

「なあに、柴山さんは、わしの術にはまっただけだ」

「それだけではない。神谷どのの見切りがすべてでした。遠く及ばぬ。これまでわしは、おのれに及ぶものはない、と思うていました。昨日、浪人を斬られたのはみごとでした。だが、及ばぬとは思わなかった。だから、果し状をつきつけた。わしの思い上りだった。あなたほどの人がいるとは、思ってもみないことでござった。弟子にして下され」

と額を、地面に押しつけた。

「柴山さん、手を上げてくれ、わしはそれほどの男ではない」

「いや、わしは死んでおったのを助けてもろうた。そなたは門弟の一人か」

と伝七郎に言う。

「そう、門弟だな」

「そなたからも、頼んで下され」

柴山は完敗を認めたのだ。

「まあ、いい、お立ちなされ」

十兵衛は歩き出した。柴山は伝七郎の手首を摑んで片手で拝んだ。

「まあ、何とかなるでしょう。一緒にどうぞ」

「よしなに」

負けた武芸者は、とたんに弱くなる。

三章　山賊

1

十兵衛は、洛北に向った。

山は色づきはじめていた。そのうち、山は黄色くなり紅くなる。

後水尾天皇の御山荘である円通寺に行ってみようと思った。本来は寺ではない。それなのに幕府は寺にしてしまった。

神道であった天皇家を、家康と家光が仏教を押しつけたのだ。それで天皇家は仏教になってしまった。仏教天皇家は幕末まで仏教であった。明治になって、ようやく天皇家は神道にもどられたのだ。

天皇家は、後水尾帝時では、代々神道であった。それを仏教に変えてしまったのが、家康と家光だった。

京に本願寺が二つある。西本願寺と東本願寺である。天皇家を仏教にしながら、本願寺派が大きくなるのを怖れて、家康は二つに分けた。

そして二派の本願寺が争うように仕向けたのだ。争わせて、二つの勢力を削ごうとしたのだ。

織田信長は、比叡山・延暦寺に手を焼いた。一向一揆、一向宗徒に悩まされた。宗徒はすぐに命を投げ出す。百姓でも命を投げ出して来るからこわいのだ。

家康が、天皇家を仏教に変えた理由があると思える。家康の言葉として有名なのは〝百姓は生かさず殺さず〟である。信長のように殺しはしない。だが、働かせこき使う。

この言葉は、よく考えてみると、怖ろしいことを言っている。百姓は人ではなく牛馬の如く働け、ということなのだ。

神道家康にして言えたことである。信長は殺してしまえ、だった。家康は生かしてやるから働け、ということである。

もちろん、後水尾天皇はお怒りになった。だが、軍兵のない帝はどうしようもなかった。徳川幕府の言いなりである。

十兵衛が、後水尾天皇にお会いするのはただではできなかった。御所に出入りする医師中国守を頼んで、天皇の中宮である、東福門院和子に、話を通してもらった。

東福門院は、秀忠の娘、忠長の妹だった。その縁をたどったのだ。東福門院は兄忠長のためにと思って、十兵衛の願いを聞き入れ、天皇に円通寺に行幸願ったのだ。

これほど十兵衛が苦労したのに、忠長は鼻も引っかけなかった。忠長は将軍は望まない代りに、大坂城をくれ、百万石をくれと、父秀忠に泣きついた。

それだけの欲があるのだったら、天下を狙うべきだったのだ。十兵衛は、いま思っても歯ぎしりする思いである。

十兵衛がどれだけ働いたかを、忠長は無視したのだ。後水尾天皇の詔勅を、忠長はよく考えもせず、父秀忠に渡してしまった。

一介の浪人である十兵衛が、後水尾帝に会ったということを考えてもみなかった。十兵衛は腸が煮えくり返った。全くの水泡であったのだ。

それなのに、まだ家光暗殺を思っている。忠長は暗愚だった。だが、それ以上に、十兵衛はおのれが馬鹿のように思えてくる。このことにおのれの一生を賭けた。

寛永三年から九年間、全くの無駄であったことになるのだ。紀伊の頼宣も、〝十兵衛よくやる〟と言って笑った。笑い話になった。

将軍家をもとの神道にもどす。そう考えることがもともと間違っていたのだ。家光と忠長の首をすげ換える。わりに簡単なことだと思った。それは若さだったのだろう。

幕閣の中にも神道派は多かった。だが、実際に動いたのは、十兵衛ただ一人だった。愚の骨頂だったのは十兵衛である。

仏教将軍は、世の流れでしようがないのだと納得していれば、九年間を無駄にしなくてすんだ。

十兵衛は無駄だと思っているが、そうではなかったようだ。多くの剣の極意を身につけて来たのだ。

転という剣を知った。剣はいろいろとむつかしいことを言うが、結局は〝まやかし〟であったのだ、と気付いた。

極意というのは、たいてい〝まやかし〟なのだ。一カ月ほど前に、柴山丹後という武芸者と対峙した。

丹後は、息ができなくて気絶してしまった。無息である。相手に息をつかせないようにする。これだって〝まやかし〟である。

一寸の見切りに丹後は全身を堅くした。そこに無息の術にかかる要素があった。十兵衛には丹後が簡単に斬れた。だが、斬らなかった。斬る必要がなかったのだ。

この〝無息の術〟は、剣術を知らない者はかからないのだ。丹後は術にかかってしまった。それだけで満足だったのだ。

大悲山・円通寺という。後水尾天皇は寛永六年に退位されている。となれば拝顔したのは六年前ということになる。

円通寺には留守番の僧がいた。僧ではない僧形のものである。無理だとは思ったが、声をかけてみた。

六年前の十兵衛を、僧は憶えておいてくれた。

「京に来たのでな、ちょっと寄ってみた」

「どうぞ、お入り下さい。せめて庭なりと」

と言って門を入れてくれた。もちろん、十兵衛でなければ、門から入れてくれないところだ。もちろん、部屋には上れない。だが庭くらいはよいだろう、と言うことだ。

縁に坐って庭を眺める。枯山水である。庭園は四百坪ほどと言われている。庭はまるで芝生のように、こけむしていた。

あちこちに石を配されている。むこう端に生垣があり、杉の木が立っている。下方の枝は払われている。七、八本も立った杉のむこうに、紫色の山が見える。比叡山である。つまり、比叡山は借景になっているのだ。

この借景だけが、円通寺の宝のようなものだ。円通寺そのものは、立派な作りではない。僧が茶を運んで来た。

六年前にここに来たときには、風景などさして目につかなかった。いまはよい眺めである。一幅の絵である。この絵は、四季によってその趣きを変えるのだ。

「わたしは、毎日、この景色を眺めながら生きております」

茶碗を手にして茶を口にする。

「あのころは、柳生さまも、若うございました」

「若かったな」

山が燃えているようだ。

若かった。若気の至りだったのか。

杉の木の枝はときどき降される。杉の木があるから、山も美しく見えるのだ。

「ここにこうしていると、時が移っていくのがわからなくなるな」

「季節の移ろいは、よくわかります。この寺にこうしていると、一生が長いのか短いのかようわかりません。柳生さまがおいでになったのは、ほんの昨日のような気がします」

「あのときのわしは命賭けだったからな」

ずいぶんむかしのような気がするのだ。時というのは長くもなければ短くもない。人々の感じ方だろう。

僧に礼を言って円通寺を出た。少し東へ向うと妙満寺がある。このあたりはすでに岩倉である。更に上っていくと岩倉村にたどりつく。その北のあたりに、実相院、石座神社、大雲寺がある。この岩倉は公卿の領地である。

この岩倉で、津三十二万石の藤堂和泉守高虎の家臣たちと斬り合った。危いことも何度もあった。

危いところを、猿女一族の鐚三夢ら三人が助けてくれた。三夢らは、ずっと十兵衛を守っていてくれた。十兵衛が危くなると、石をとばし、手裏剣を投げる。それで何度助けられたこと

か。

たしかに若いころは、無茶なことをしていた。若さというのは、無茶をするものなのか。十兵衛が危いことをしなくなったからか、三夢たちは出なくなった。

このあたりで声をあげれば、三夢たちは、木々を渡って猿のように現われたものだ。どういう生き方をしていたのか、全くわからなかった。

そのころは藤堂高虎が生きていた。徳川家康にべったりだった男だ。つい先日まで生きていた。徳川家のために、十兵衛を討ち取りたかったのだ。徳川家に対して唯一の忠義者だった。

岩倉から更に谷間の道を登っていくと、大原へ出るのだ。その先に三千院がある。だが、そこまで足をのばすつもりはなかった。そろそろ降りようか、と思っているところに、

「お助け」

と女の声がした。十兵衛は足を止めて振り向いた。女が裾を乱して走ってくる。白い足がチラチラと見えた。後から男たちが追って来る。

浪人ではない。山賊なのか、それぞれのみなりをしている。浪人たちよりも荒々しい。この山に山賊がいるとは思わなかった。

もっとも京の山は深い、山賊がいてもおかしくないのか。賊は五、六人のようだ。女は走って来て、十兵衛の後に隠れた。

「お助け下さい」

若い女だ。もちろん、どういう女かわからない。こうなればどうしても女を助けることになる。

「わかった、先へ行かれよ。賊はここでわしが止める」

賊が走って来た。

「おい、その女を渡せ、わしらのものだ」

「わしらの邪魔するつもりではなかろうな。女の前で、いいところを見せようと思うな。ここは女を助けても、わしらの仲間は百人以上いる」

「その女は、お頭のお気に入りなのだ。おい浪人、関り合わないほうがいいぞ。身のためだ、黙って去れ」

十兵衛は、刀を抜き下げて立った。抜き遅れて不覚を取ることがある。剣術などやったことのない連中だ。かえって斬りにくい。

後から男がまた三人来た。男が両手を山賊にかかえられている。

「旦那」

と女が声をあげた。女の連れのようだ。連れの男が捕えられ、女だけが逃げて来たのだ。

「女、こっちへ来い、この男の首を刎ねるぞ」

「お近、わたしにかまわず逃げておくれ」

と男が言った。女はお近というらしい。これでは賊を斬るわけにはいかない。

「女、こっちへ来い、おまえが来れば、この男は放してやる。来なければ、ここで首を刎ねる。考えている暇などないぞ」
「大事な人だろう。行ったほうがよい」
「いやどす」
と言って泣いている。
「まず助けなければなるまい」
お近はこっくり頷き、歩いていく。賊がお近の手首を摑んだ。
「こういうことだ、悪く思うな」
賊はそう言って男を放した。男は逃げるに逃げられない。
「早く」
とお近が言う。そのとき賊が上段から、男を斬り下げた。
「キャーッ」
とお近が叫んだ。袈裟掛けに斬ったのだ。よろめくところを、刃を首に当てて引いた。血が音をたてて噴き出す。
「ヒーッ」
とお近は叫んだ。
「お頭は、男はいらねえんだ」

「たしかに山賊だな」
十兵衛は走った。賊の両眼を裂いた。二人目を雁金に斬り下げた。
「なにをする。この女も死ぬぞ」
「バカが、おまえたちに、その女を殺せるわけはないだろう」
三人目の腹を薙いだ。右に来た刀に体を寄せて、上段から唐竹割りに斬り下げる。四人目である。剣尖を車にして、五人目の首を薙いだ。
首が転げ落ちる。あとは女をそこに置いて逃げ出した。十兵衛はそれを追う。
女の連れを放してやっても、女さえ手に入れれば、支障はないはずだった。それを斬った。これが山賊なのだ。二人の賊は目を剝いて逃げていく。どうして女の連れを斬ったのか。頭が悪いと言えば悪い。何の計算もなかった。女を手に入れたのだから、男はいらなくなったのだと考えたのか。
十兵衛は、体をのばし賊の足を薙いだ。
「ギャーッ」
声をあげて転がってくる。その賊の右手首を押えた。刀をむしり取ると、そいつで首根を裂き、その刀を逃げる賊に投げた。
刀は腿に刺さった。これも叫びをあげて転り落ちてくる。この賊も首を裂いた。血を浴びないように、とび退く。

そしてもとのところまで降りて来る。お近は男に抱きついて泣きじゃくっていた。どうやら死んだらしい。

「お近さん、いつまで泣いていても仕方がない。男たちを呼んで来てくれ、旦那の遺体を運ばなければなるまい。戸板もな」

はい、と言って旦那から離れて、小走りに下っていく。まだ生きている賊もいた。腹を両手で抱いて坐り込んでいる。

十兵衛は、刀を拭い鞘に収めると、賊の前にあぐらをかいて坐った。

「どうだ、少し喋らぬか」

「何を喋る」

「おまえたち賊の巣だ。そこに頭がいるのだろう、どのあたりだ」

「あんたは、山賊を退治するつもりか」

「そうだ、みんな退治する」

「なぜだ、わしらは、あんたには何もしていないぞ」

「あの男と女も、おまえたちに何か悪いことをしたのか」

「わしらは賊だ、何でもやる。あの旦那はもう用はないと思った。斬らないほうがよかったのか」

「どっちでも、たいして変らんな。おまえたちは、あのお近という女を殺せない。それがわかっていなかったようだな。どっちにしても、おまえたちは、助からなかったな。わしに会ったのが不運だったな」

「みんな死んだのか」

「そうだ、おまえを除いてはな。おまえももう死んだも同じだ」

「あんたは、ただ者ではないな、武芸者か」

「そうだ、武芸者だ。だから、斬らなくてよいものまでも斬る」

「武芸者は、誰でも斬るのか」

賊ははみ出そうとする腸をしっかり両手で押えている。そのうちに押えきれなくなる。

「斬ってよいものを斬る。おまえらは、斬られて当り前の男だ。善人は斬りにくいな」

「あんたの言うこと、よくわかる。わしは善人というのは好かんのでな。善人を殺しても痛むものは何もないな。あの若旦那を斬ってもな。斬らないほうがよかったのかな。わしが若旦那を斬ったのを、あんたはカーッと怒ったのか」

「どっちにしろ斬るつもりだった。そう、おまえら悪党は、わけもなく人を殺す。少しは殺す相手を考えたらどうだ。といま言ってもはじまらんな」

「おかしな男だな、わしはやがて死ぬ。死んでいく者にどうして話かける」

「まあ、暇つぶしだ。若旦那の遺体を運びに来るまでだ。教えろ、おまえたちの巣はどこだ」

「天ヶ嶽だ。静原から、ずっと登っていったところだ。説明してもわからんだろうな」

「なあに、天ヶ嶽に登ってみればわかるだろう」
「これから寒いぞ、凍死しないようにな」
「死ぬのが怖ろしくないか」
「誰でも一度は死ぬ。そのうち痛みが襲いかかってくるだろうがな、そのときは舌を咬み切って死ぬ」
すでに両手はぬめっている。刀は握れないのだ。手を洗う沢も近くにはない。舌を咬み切ったほうが早いのだ。

2

船田屋清七、これが死んだ男の名前だった。お近は清七の女房だったのだ。清七の遺体が戸板に乗せられた。
「わしは、この辺で失礼する」
番頭らしい男が袖を引いた。
「それはいけません、若奥さまが、ぜひにお連れしてくるようにと、申しつかりました。まず、お名を聞かせて下さいませ」
「神谷兵庫」

「わたしは善蔵と申します。神谷さまは、若奥さまの命の恩人でございます」
「たしかにそうなるな」
十兵衛が、賊たちを斬らなければ、お近は巣に連れていかれ、頭のおもちゃになっていたはずである。もちろん、それでも生きていけないことはない。山賊も女は殺さない。飽きてくれば、どこかに売りとばせば金になる。いくらでも使いようはあるのだ。
船田屋は烏丸通りにあるという。
「お近さんは、船田屋に嫁いで来たのか」
「いいえ、若奥さまは、船田屋のお嬢さまでございます」
「若旦那は入婿か」
「はい、左保屋の次男坊で」
「好き合うていたのであろうな」
「はい、仲むつまじいお二人で。今度は、大原の三千院に参詣に行かれ、その帰り途だったようでございます」
「途中から、別の道を取ったようだな、岩倉へは山道だ。八瀬を通って来るのが本道だろう」
「はい、道に迷うということはないはずでございます」
もっとも岩倉をたどって降りて来ても、同じところにたどりつく。だが、岩倉は山の中である。

船田屋にようやく着いた。店の者、近所の人たちが、大勢待っていた。さっきの善蔵が十兵衛の手を引いた。

「どうぞ、こちらへ」

路地を入って裏口から入り、座敷に通された。そこにお近がやって来て、膝を折り、両手をついた。

「おかげさまで、命を拾いました。さっき善蔵から、お名前を聞きました。神谷さまと」

「若旦那を助けられなかったのは悔みだったな」

「いいえ、清七は、うちのために死んでくれたのどす」

「何か、方法はあったかもしれんのにな、申しわけない」

「いいえ、そのようなこと、もったいないどす。清七の仇は討っていただきました」

「なあに、お内儀のために斬ったのではない。いろいろと忙しかろう。わしはこれにて失礼する」

「いいえ、それはなりませぬ。せめて清七の葬式まで、うちの命の恩人どす。どうぞ、ここにいて下さい」

「わかった、ここにいよう。心配しないで」

「お逃げになってはいやどすえ」

お近は淋しく笑った。そこにドキッとなるような色香があった。亭主が死んだばかりだというのに、この色香は何だろう、と思う。まだ三十前だろう。色香盛りということか。それまでは色香など感じなかったのに、ハッとなるような仕草をする。

女中が酒膳を運んで来た。酌をする。そこに五十年配の男と女が現われた。お近の双親なのだ。

「お近をお助けいただき、ご恩に感じます」

と両手をつく。

「お近の母でございます。お近の命の恩人でございます。どうお礼申し上げてよいやら」

「清七さんを助けられなかったのは、残念だった」

「清七はお近の身代りになってくれたのです」

「そう言えばそうだった」

いや、そうではなかった。お近を賊に渡さなければよかったのだ。すれば賊も簡単には清七を斬らなかったはずだ、といま言っても遅い。双親は、ごゆっくり、と言って去っていった。

今夜は通夜になる。弔問客も多いことだろう。改めてうかがう、と言ってもお近は承知しなかった。

女中が酌をする。火鉢には炭が赤くなっている。叔父とか叔母とかいうのが挨拶に来る。

「この船田屋は、何を商っている」

「小間物どす。小間物の問屋どす。小売もいたしております」

「お内儀の祝言はいつだ」
「五年前でございました。きれいなお嫁はんどしたえ」
「そうだな、きれいさ故の今度の出来事ということかな」
鉄びんに入っていた銚子を取り出す。底を布で拭って、どうぞ、と酌をする。
「神谷はんは、おきれいな方どすな」
と女中は言って顔を伏せた。
「三十男をからかうでない」
三十近くになっても端正である。家光は、〝政事は但馬に教わった〟と言った。それほどに家光は但馬守宗矩を気に入っていた。それは年とっても宗矩が美男だったからである。柳生の家系は美男である。
女中が去って一人になる。手酌で酒をのむ。家の中はざわついていた。通夜だから当然だろう。さっきの女中がやって来た。
「どうぞ、お焼香を」
と言った。女中に案内されて広間に行く。豪華な祭壇が作られていて、ローソクの灯りが、まぶしいほどについている。
僧が読経している。その後で焼香をする。
「清七の父でございます」

と五十男が頭を下げた。
「助けられなくて申しわけない」
「いいえ、お近さんをお助けいただいて、清七も成仏できると思います」
十兵衛は部屋にもどった。
人が死ぬということは、こういうことなのだ。もっとも賊たちは、あのまま野ざらしであろう。どっちにしても死ぬのは同じである。やはり、弔いをしてもらえる人は倖せなのだろう。
坐って改めて酒をのむ。女中が新しい酒を置いていった。鉄びんの湯で燗して呑む。
お近が、喪服姿で入って来た。泣き晴らしたようだ。泣き晴らした女の体にはネズミの臭いがするという。もっともネズミの臭いというのは知らない。
喪服姿の女は色っぽいという。まさにその通りだ。亭主を失った女である。
「このようなところにおいでいただいて、申しわけありません」
「なんの、急く仕事もないのでな」
「どこに、お住いですか」
「北野の上七軒の近くに住んでいる」
「そうですか、旅の途中でしたら、ずっとここに住んでいただきますのに」
お近は酌をする。
「三千院に行かれたのに、どうして岩倉に」

「はい、うちが旦那さまを誘いました。登って来た道を帰るのはつまらないので、岩倉のほうに出ましょうと。うちが悪いのどす。うちがへんな気を起さなければ」

と言って、また泣く。泣きながら、十兵衛の膝の上に崩れて来る。たしかに妙な匂いがした。その匂いは湯の匂いでもあった。そうか、湯に入って来たのか、と思う。

「抱いて下さい」

と言った。

「何も言わないで、岩倉で、神谷さまに抱いて欲しいと思いました。それでここまでご足労をお願いしたんどす。悲しくて、悲しくて、神谷さまに抱いていただければ、この悲しみにも耐えられるかと」

妙な理屈だが、わからぬでもない。十兵衛はお近の体を抱き寄せた。しなやかな体だ。衿から手を入れると、お近は自分で衿を開いた。

中に手を入れる。柔かい乳房があった。いくらか手に余る大きさだ。行燈の灯りに白い肌が浮き上る。行燈の灯りというのは、女の肌をよけい白く見せるようだ。

お近は自分で帯を解く。帯がキュッキュッと音をたてて解ける。解けた帯が畳の上にくねる。まるで錦蛇のように。それが妙に色っぽい。

十兵衛は、立って袴を外し、ついでに下帯を外した。男と女の外した物が畳の上に乱れ散っている。それが妙になまめかしい。

お近は喪服を脱いだ。下は白無垢だった。そして、十兵衛に抱きついて来る。

「悲しゅうおす」

と身を揉む。

改めて、乳房を手にする。乳房を揉み上げる。乳房はいくらか重さで下り、下が丸く膨んでいる。そのために乳首は上を向いていた。乳房の形もいろいろだが、十兵衛はこの形の乳房が好きだった。仰向けになると、乳房は左右に崩れる。

乳首は大きかった。子を生んでいるのだろう。だが色はついていない。わずかに桜色である。乳房を揉み上げて、乳首を咥えた。

「あーっ」

と声をあげた。

「うちは悲しゅうおす。うちがあの道に入らなければ」

また泣いている。涙が滴り目尻から耳朶に落ちる。乳首を吸いながら、手を下肢に向け前をはねる。そこに白い足があった。その足を撫でる。

「うちは、死にとうおす」

と言いながら、腰をくねらせる。腿を撫でる。尻のあたりまであらわにする。内腿に手を滑り込ませる。柔かい肌を撫でる。

「神谷はんがおいでにならなければ、うちは狂うておりました」

この女の悲しさが十兵衛にはわからない。恋しいご亭主だったのだろう。

お近は、十兵衛の体を仰向けにする。前をめくる。一物は怒張していた。

「汚れておる」

「かまいはしまへん。うれしゅうおす。うちのためにこんなに」

と言い、いきなり尖端を口にした。そして舌を這わせる。夢中になってしゃぶる。お近は十兵衛に抱かれたいのではない。十兵衛に抱かれている間、清七のことを忘れられると思っている。

忘れさせてくれるには十兵衛が最適だと思ったのだろう。一物の根元にも舌を這わせる。一物を手にして、ふぐいをも口にほほばった。そうすることによって、清七を忘れたい。

腰に跨がって来ようとするのを押しとどめ、そこに仰向けにした。膝を折り立てる。そこに白無垢の裾を広げる。まるで鶴の羽のようだった。

膝頭を摑んで、押し開いた。

「あーっ」

と悲しげな声をあげた。腰をすすめる。はざまを撫でる。露がもれていた。切れ込みを開く。そこはまさに蜜壺だった。

女の手がのびて来て、一物を摘む。尖端を切れ込みに当てる。切れ込みをなぞるように手を上下させる。尖端が肉の芽に触れた。

「あーっ」

と声をあげ、白い腰をゆさぶる。その光景が妖しかった。

「あーっ、旦那さま」

と声をあげる。

「ごめんどすえ」

旦那の名を呼んだことを詫びたのだ。

「かまわん、気にするな」

尖端を壺口に当てた。そこはぬめっている。ぬめりの中に尖端が没入していく。

「わっ」

と声をあげてしがみついてくる。手で十兵衛の腰を押えた。

「動かないでおくれやす」

十兵衛は押しつける。お近は下からもち上げる。浮いた尻を回すのだ。

「あーっ、気が、気が」

と言って、お近は悶え狂う。一気に絶頂にたどりついたようだ。体から力が抜けていく。

「ありがとうさんどす」

「会者定離という。人は必ず別れなければならないのだ。それが早いか遅いか、の違いだけだ。いま清七さんと別れるのはつらいだろうがな」

下手な説教である。

「あっ、またどす」

と言ってしがみついて来て、腰を回しはじめる。

「旦那はん、旦那はん」

と声をあげて悶え狂う。続けざまに気をやっている。蜜壺は蜜があふれそうになっている。そこに音を発する。

「神谷はん、気をやっておくれやす。うちではいけまへんか」

「そういうことではない」

続けざまに気をやって失神したようだ。だが十兵衛はまだ健在だった。

3

お近が喪服を着て去ったあと、女中に案内されて湯殿に入った。立派な風呂場だった。ローソクが四、五本もついている。

十兵衛は風呂に入る。湯でふやかして垢を擦る。毎日湯に入っていたとしても垢は出るのだ。湯から上ったら、そこに浴衣があった。それを着て部屋にもどると、夜具が敷いてあった。火鉢には炭がつぎ足してある。そのまま行燈を消して夜具の中に入った。外は寒いのだろうが、部屋の中は暖い。

家の中は、まだ静まり返ってはいなかった。何人かは起きているのだろう。あるいは知り合いや親戚、友だちなどが集まって、故人のことについて、いろいろ思い出話をしているのだろう。

故人が淋しがらないように、線香をたやさずに、誰かが柩のそばにいる。それが通夜である。清七を助けられたろうか、と思う。助けられたろうな、と思う。先に清七をこちらに取りもどしておいて、お近を賊に渡す。

そして賊たちを斬る。賊はお近を殺せないのだから、取りもどすことはできた。だが、果してそうなっただろうか。

清七とお近を取り換える。だが、清七もお近も、十兵衛に策があったとしても、交換はできなかった。

清七はおのれが助かるために、お近を賊に渡すことはできなかったろう。おめおめ自分だけが生き残ることはできなかった。

お近は、清七が賊の手にかかるのは耐えきれなかった。それで自分から賊のほうに走った。お互いに慕い合っていると、このようになる。お近はおのれが山賊の頭のおもちゃになっても清七を助けたかったのだ。

どちらかが冷静であれば、二人とも助かった。二人は冷静ではあり得なかった。清七はお近

が助かったことを知って、安心して死んでいったのだろう。

人は慕えばこそ悲しい。

十兵衛は眠った。どれくらい眠ったろうか、ハッ、と目がさめた。人の気配がしたのだ。眠っていて、人の気配がすれば目がさめるように体がなっている。

刀には手をのばさなかった。相手がわかっていたからだ。板戸が開いた。女の姿が体を入れてくる。お近だ。喪服のままである。夜具の裾のあたりに立つと、帯を解きはじめた。

喪服を脱いで白帷子姿になる。そして十兵衛のそばに体を滑り込ませて来て、抱きつく。

「ごめんなさい、うちを助けて」

と言った。抱きついて身を揉む。

「うち、死んでしまいたい」

何を言って慰めてやったらいいのかわからない。いまはすでに言葉はないようだ。抱き寄せて、よしよしするように腰から尻を撫でる。

お近は、おのれが死んでしまいそうなのを怖れている。だから助けを求めに来たのだ。

「死にたい。死んだほうが楽やと思います。うちは弱い女どす。自分がわかりません。苦しいのどす。助けておくれやす」

仏や神にすがりたい気持で十兵衛にすがっているのだ。裾をめくって、男の足を腿の間に挟みつけて来た。男の腿をはざまに押しあげ、強い力で締めつける。

「助けておくれやす。死にとうはおへん、でもうちは死んでしまいそうな気がします」

どうやったら、このお近を助けてやれるのかわからない。このままだとほんとに死んでしまうのかもしれない。

死のうとするお近を、誰も止められないのに違いない。せっかく山賊から助けたのだ。何とかして助けてやりたい。双親も子供も、彼女を助けてやることができない。

男の腿を締めつけ、腰を前後させる。湯帷子の下に手を入れて、腰から尻を撫でまわす。尻の肉を摑んで揉む。

衿を開く。乳房を手に包み込んで揉む。乳首を指の股に挟み込む。

「あ、あーっ、もっと」

と声をあげる。一時的でもいい。忘れさせて欲しいのだ。

「ごめんなさい、お許しを」

と言う。他人の十兵衛に助けてくれ、というのは申しわけないのだ。だが、お近にしてみれば、そういうことは言っていられないのだ。いま、こうしてすがりつけるのは十兵衛しかいない。

乳首を口に咥えながら、お近を死なしてはならんな、と思う。腿から尻を撫でる。お近は股を開いた。内腿に手を当て、そのまま撫であげて、はざまにたどりついた。

はざまを上下に撫でる。切れ込みを指で割り、そこに指を這わせ躍らせる。あーっ、と悲し

げな声をあげて、腰をゆする。指に露が絡みついてくる。

お近は、膝を折り立てた。切れ込みをなぞり、壺に二指を滑り込ませた。二指で探り交叉させる。

腰をゆっくり回しはじめる。そしてしゃくり上げる。襞が指に絡みついて来る。天井には数の子があった。まだ、壺は若いのだ。

遊女たちは二十歳になる前に、この数の子をみんな失ってしまうのだ。天井を指でなぞる。天井と壺口の間を指で押す。

「あっ、そこ」

と声をあげた。腰を回しはじめる。もっと、と声をあげた。腰をしゃくり上げる。

お近の手がのびて来て一物を摑んだ。手を上下させる。

「うちのために、こんなに」

一物を手にして、十兵衛の手を押しのける。体を起すと、股間に顔を埋めて来た。そして尖端を舐めはじめる。手はふぐりを包み込んでいた。

もちろん、こんな女に出会ったことはない。お近には、死神がとりついているのだ。その死神を追い払わなければならない。

それにはどうすればいいのか、わからん、だが、何かをしてやれるはずだ。死神は清七なのか、清七がお近を呼んでいるのか。

十兵衛も死霊とはまだ対峙したことがないのだ。修験者ではない。だが、何かができるはずだ、と思う。

お近が腰に跨がって来た。尖端を壺口に当てた。そのまま腰を下げてくる。一物は壺の中に呑み込まれていく。

「神谷さま」

「旦那の名を呼んでもいいぞ」

お近は、自分のために清七が死んだのだ、と思い込んでいる。三千院に参詣して帰り途、登って来た道をそのまま降りればよかった。お近は岩倉村を通って帰ろうと言って、脇道に入った。

そして山賊に捕えられたのだ。お近は隙を見て逃げ出した。あるいは清七が隙を作ってやったのかもしれない。

お近は逃げる。必死でだ。賊は追ってくる。逃げていて十兵衛に出会った。脇道をとったのが原因だ。お近はそのことを悔んでいる。自分が誘ったからだ。

十兵衛は、しっかり両手で尻を摑んでいた。お近は死にたがっている。一方では死にたくない。おのれで死神と戦っているのだ。死神に負けそうになって、十兵衛に助けを求めているのだ。

十兵衛は体を起した。座位である。お近はしっかりと男の腰を挟んでいる。そのまま、背中

を夜具に押しつけてやった。とたんに、悶えはじめた。
「気がいきます」
腰を激しく振り、体をこきざみに震わせて気をやったのだ。ゆっくりと体の力を抜いていく。
「いきました」
と言った。
「神谷はんは、優しいのどすな、うちのような女のために」
「なんの、お近さんはいい女だ」
そういう言い方もいかん、いい女だから狙われたのだ。
「気をしっかり持て、負けてはならん」
「どうしたらよろしいのどすやろ。旦那はんが、あの世から呼んでおいでになるのどすやろか」
「そうではない。清七はお近さんが無事だったと知って、安心して死んでいった。成仏している。呼んでいるのは清七ではない」
「でも、うちが岩倉に誘わなんだら、旦那はんは死ぬことはなかった」
「そこが、むつかしいところだな。自分で自分を責めている。そこに死神が取りついた」
「死神どすか」
「そうだ。お近さんが悪いのではない。清七が道をまともに取ればよかった。清七にはお近さんを守る義務があった。まともな道を降りて来ても、山賊は出て来たろう」
「そやけど、そやけど、あっ、また」
と声をあげてしがみついて来る。

4

読経の声が聞える。
お近は、清七の柩のそばに坐っていた。うつむいて、まだ涙を流していた。泣き枯れているはずなのに。
十兵衛は、部屋にいて、女中が運んでくれた朝餉をとっていた。朝餉をすますと、女中が入って来て膳を片付ける。
「あの、大旦那はんが、お目にかかりたいと申されておりますが」
「どうぞ、と言ってくれ」
茶を呑んでいるところに、お近の父佐兵衛が入って来た。十兵衛の前に両手をついた。
「昨日から、お世話になっています。このままではお近は死んでしまいます。家内もおろおろしています。神谷はんのお力で何とかなりまへんやろか」
双親にも、お近の様子がわかったのだ。

「斎場はどこですか」
「蓮台野でございます」
斎場は、ほんとは祭場である。人の死はお祭りなのだ。
「お近さんを助けられるかどうかわからぬ。わしも、蓮台野まで行きましょう。行列のあとについていきます。そして、もどりも、ここまで参りましょう。わしがいる間は、お近さんも死ねないはずです。お近さんにそう言って下さい」
「お願いいたします。どうぞ、お近を助けてやって下さいまし」
「助ける、とは言いきれない。でも、方法はあるはずです」
「いまは、神谷さまだけが頼りでございます」
男の佐兵衛が涙をぽとりと落した。佐兵衛としても、必死でお近の死を止めたいのだ。親としては当り前のことだろうが。
読経が終り、柩がかつぎ出される。僧が先を歩き、あとに柩が続く。そのあとにお近が位牌を持って、そのあとに親族が続く。十兵衛は、行列のあとを歩く。
蓮台野というのは、京の無常所の一つである。北のほうにある船岡山の西方、千本北大路から紙屋川に至る一帯を蓮台野という。
この地名の起りは、一条天皇の御代に、定覚上人が、二十五三昧の行をおこなったところ、蓮花が生じた。それで蓮台野になった。

それより、歴代天皇・皇妃をはじめ、多くの人々の葬場となった。それで無数の卒塔婆が立ち並んだ。そのために千本の地名も生まれた。
ここに上品蓮台寺という寺がある。もちろん土葬である。
この無常所も、これからは、天皇・皇妃の葬場とはならない。家光の命令で、泉涌寺を建てた。これからは、天皇・皇妃の葬場は、この蓮台野ではなく、泉涌寺ということになる。家光の仏教はこういう所にも及ぶ。
もちろん、後水尾天皇はお怒りだが、将軍家に反抗することはできないのだ。
十兵衛は、先に船田屋にもどって来た。店の者たちが、葬儀からもどって来る人たちに清めの塩を振りかける。店の者たちと一緒に十兵衛は立っていた。
この船田屋の広間には席がもうけられている。弔問客はみんなここにもどって来る。食膳を出され、酒も出される。そして夜まで、酒をのみ、喋る。
宴会と同じだ。祝言と同じ賑わいである。葬式もお祭りなのだ。
行列がぞろぞろともどってくる。お近は精も根も尽き果て、両わきから支えられて歩いてくる。
お近は十兵衛を見て左右についている人を振り払って、よろめいて来る。十兵衛はお近に塩を振りかけた。
「神谷さま」

と抱きついて来ようとするのを、十兵衛は、
「キエーッ」
と叫んだ。
人々が十兵衛に視線を集める。
お近は、目を大きく見開き、体をがたがたと震わせて、尻から落ちた。
父佐兵衛と母親が走り寄ってくる。
「お近、お近」
と声をあげる。抱き上げようとするが立てない。気絶しているわけではない。
「腰が抜けている。二、三日は寝ていたほうがよい」
「神谷さま」
「これで死神は退散した」
十兵衛は、お近の頬をぺたぺたと叩いた。
「お近、しっかりするんだ。清七は成仏した。わしは北野にいる。三日ほどしたら来てみよう」
「神谷はん」
十兵衛は、頷いて歩き出す。誰も追わなかった。呪術を使ったわけではない。ただ、殺気を放しただけなのだ。お近は腰を抜かした。それでいいのだ。

お近も双親も、死神は退散したと思う。それで死神は退散したのだ。退散した、と思うことが大事なのだ。
北野の住まいにもどった。伊勢屋の女中お留が、
「お帰りなさいまし」
と手をついた。居間に入る。中は暖い。火鉢に火が入っている。十兵衛がいない間も、お留は毎日通って来て、居間を暖めていたのだ。もっともこれがお留の仕事なのだ。
「茶をもらおうか」
「はい」
と言って茶を入れる。濃い茶を出す。お留は十兵衛が濃い茶が好きだということを知っている。もっとも濃い茶が好きだということは上品なことではない。臭覚、味覚が敏感ではない、ということだ。
もっとも、濃い茶だと気分が落ちついて来るのだ。茶をのむ。
「お酒は」
「いらぬ、茶だけでよい」
この家には、三畳の女中部屋がある。お留は去る。声をかければ顔を見せる。声のとどくところにいるのだ。
これで、お近が助かるかどうかはわからない。あるいは死ぬかもしれない。死んだら、それ

で仕方がない。十兵衛は、死神を追い払う術など知らないのだ。

表に人の気配がした。

「神谷さん、いますか」

石川伝七郎である。

「上ってくれ」

伝七郎が上ってくる。

「どこへ行っていたんですか」

「おーい、お留さん、伝七郎にも茶を淹れてやってくれ。わしにもだ」

お留は出て来て茶を淹れる。

「山を歩いて来た」

「この寒いのにですか」

「山はいい、歩いていれば、それほどの寒さはない。山賊に出会った」

「山賊にですか」

十兵衛は、いきさつを話した。

「山賊は、天ヶ嶽に巣を作っているそうだ。その山賊を退治に行く。賊は百人ほどいるという。どうだ、伝七郎さんは」

「もちろん、行く」

「柴山丹後はどうだろうな。形だけでも少しの弟子だからな」

「行くでしょう。柴山を呼んで来ようか」

「急がなくてもよい。四日ほどしてからだな。お近の様子を見に行ってやらなければな」

「死神は、退散しますか」

「退散するだろうな。気持の持ちようだ。あのようなとき、優しくしてはいかんな。優しくしてやれば、死神はつけ上る」

「神谷さんは、さまざまな術を使う」

「何のことだ」

「無息」

「相手の呼吸が見えれば、それほどむつかしいことではない。斬り込んで来るときには、どうしても息を吸う。そこに気を放出してやればよい」

「その気がわからん」

「気合でもよい。息を吸おうとするときに、気合をかける。すると、相手は息が吸えなくなる。息を吸おうとするところで、また気合をかける。息が吸えない。吸おうとするから吸えなくなる。吸おうとしなければ、息は自然に入ってくるものだがな」

「肺の中に空気がなくなる」

「息が吸えないと、頭がくらくらする」

現代的に言えば、酸素不足になるのだ。

「ついには、気絶してしまうことになる、ということですか。理屈ではわかっても、わしにはできないな」

「できなくて当り前だろう。わしは剣術の家に生まれた。命賭けで稽古をやる。だからと言って、まだ極意のいくつかしかわかっていない。極意は何百とある。そのうちの十足らずだな。江戸の、小野次郎右衛門さんまでは、まだまだ遠いな」

「神谷さんにそう言われれば、わしなど全くの素人だ」

「それでよい。武芸者が生きている間にどれくらいの極意を得られるか、ほんのわずかだろう。すべての極意を収めるのは不可能なのだ。人は一つの極意を得る。するとそれをすべてだと思う。達人であり、名人なのだ。それでおのれの流派を名のる。その一つの術については達人かもしれない。だが、二つの極意を得た達人には勝てないということになる。達人と達人が立ち合えば、それは相打ちか、相抜けしかないという。江戸の針ヶ谷夕雲という武芸者がそう言っていると聞いた。何とバカなことを言う男だろう、と思った。もっとも、よく聞いてみると、相打ち・相抜けは、木刀術のことだった。刀を抜けば、相打ち・相抜けはない。どちらかが死ぬ」

「そういうことだな」

と伝七郎は頷く。相抜けというのは、引き分けということだ。

四章　死神

1

三日目——

十兵衛は、京に入った。つまり洛中だ。烏丸通りの船田屋に向う。近くなると表を掃いていた丁稚が店の中に走り込んだ。

店の前に立つと、お近が走り出て来た。

「神谷はん」

「元気になったか、よかった。よけいにきれいになった」

顔色もよく、華やかになっている。たしかに死神は退散したようだ。

「どうぞ、そんなところに立っていないで、入っておくれやす」

とお近は十兵衛の手首を摑んで引く。うれしそうだ。上にあがる。

「先にお焼香させてもらおうか」
「ありがとうございます」
案内されて仏間に行く。仏壇の前に坐る。そして、線香に火をつけ灰に刺す。鉦を鳴らして合掌する。
十兵衛の後にお近の双親が坐った。
「ありがとうございます。お近が生き返りましてございます」
「よかった、よかった。お近さんは、よけいきれいになった」
「神谷さまのおかげどす。何とお礼申し上げてよいやら」
「なんの、お近さんのきれいな顔を見るだけでよい」
「どうぞ、こちらへ」
と案内されて、別の座敷に入った。祭壇があった大座敷ではない。そこは火鉢の火で暖められていた。火鉢のそばに坐ると、酒膳が運ばれて来た。
初七日はまだである。だが双親としては、お近が元気になったのがうれしいのだ。三日前には死にそうだったのだ。
お近が障子を細目に開けた。
「雪が降って来ましたえ」
父親が酒の相手をする。

「お近さんは、まだ若いし、きれいだ。お婿さんを迎えられるとよいな、店のためにも」
「いやどす。うちはもう旦那はんはいりまへん。店はうちがやっていきます」
「はい、お近がそう申しますし、わたしたちも、まだまだ働けると思います。そのうち、子供たちも大きくなりましょうし」
「そうか、それもいいだろうな。それで、船田屋さん、わしが死神を退散させたこと、内密にしてもらいます」
「神谷さま、それはむつかしゅうございます。とうに多くの人が知ってしまいました。近所でも、そのことが噂になっております」
「そうだったか、止めようがなかったか」
「はい、三日前に、死にそうだったお近が、こんなに元気になりました。店を覗きに来る人もいるくらいです」
「それはいかんな、たまには死神にとりつかれる人もいる。悲しみが深いと、そこに死神がとりついて来る。お近さんは、どういう気分なのかな」
「はい、ぐっしょり濡れた着物を一枚脱いだような、そんな気持です」
「ただのお人ではない、と思うておりました。お近は、神谷さまに、二度お助けいただいたことになります」
「そういうことになるな」

「わたしどもにできることでございましたら何なりと」
「お近さんが、元気になったことだけでよい」
「ここに百両用意いたしました。とりあえずはこれだけ、お収め下さいませ。もちろん、お近の命が助かったのですから、お望みなら千両でもご用意いたします」
「佐兵衛さん、考え違いだな」
「でも、わたしどもは」
「まあ、気がすまないのだろうが、金は受け取らぬ」
「それでは、わたしどもが」
「金を受け取れぬわけがある。伊勢屋に行って、わしのことを聞いてみるがよい」
「伊勢屋理左衛門はんでございますか」
「そうだ。わしの金は伊勢屋から出ている」
「あの、神谷さまは、どういうお人どすやろ」
「なんの、ただの武芸者だ。わしのことが噂になっては困るな。死神にとりつかれた人が頼みに来てはたまらん。馳走になった」
「いやどす」
とお近は叫ぶように言った。佐兵衛も母親もびっくりしてお近を見た。
「雪が降っていますえ、せめて一夜、お泊り下さい。お願いどす」

お近の双眸は熱く潤んでいた。
「うちを、神谷はんと二人にしておくれやす」
「そうだったな、お近をよろしゅうお願いいたします」
と言って、二人は逃げるように去っていった。
「お許し下さい。大きい声出してしもて」
と言って笑った。
「やらずの雨ならぬ雪が降っています。この雪はうちの気持どす」
「わかった。お近さんの望むようにしよう」
「たった一夜、うちに下さい」
「わかった。それほど忙しい身ではない」
「うれしゅうおす」
とにじり寄って来た。
「うちは、二度も、神谷はんに助けていただいたのどすえ」
「助かってよかった。お近さんのように美しい人は死んではならぬ」
「旦那はんが殺されはって、うちは胸がふさがってしまいました。どうしたらいいか、わからなかったのどす。苦しくて苦しくて、死ぬこともできへんどした。どうしてあんなになったのかわかりまへん。たしかに旦那はんは、優しい人で、うち倖せだったんどすえ。でも、旦那は

ん、死にはって、あんなになるとは思ってもいませんでした」
「それは、おのれを責めたからだろうな。山を降りて来て、山賊に襲われ、清七さんが殺されたのなら、いかに悲しくてもあのようにはならなかった。別の道に誘ったために清七さんは死んだ。そのことがお近さんを苦しめたのだ」
「はい、その通りや思います。でも、神谷はんが叫ばれたとき、うちの体震えたんどす。しばらくぼんやりしていて寝ていたら、胸のつかえが降りていたんどす。体がひどく楽になって、生き返ったようどした。神谷はんの気合いで、死神が逃げ出したんどすやろか」
「その通りだ」
「神谷はんは、死神と戦いはったんどすか」
「そうだ、戦った。わしが勝った。死神は逃げおった」
「死神は、どんな顔をしておったんですやろ」
「ガイ骨だったな、二つの目がギラギラ光っていた」
「怖ろしゅうおす」
と抱きついて来る。
「そして、鴉のようにまっ黒だったな」
「ほんまどすか」
「ほんとだ」

「うちも、うちにしがみついていた黒い鴉のようなものが、うちから放れていくように思いました」
お近は放れて、恥ずかしそうに坐り直した。
「神谷はんは、お強いのどすな」
「まだまだ未熟ではあるがな」
と言って酒をのむ。鉄びんの中には銚子が沈んでいた。それを取り出して、布で底を拭い、酌をする。
「神谷はんは、何かおやりになるのどすやろ」
「そうだな、何をやるかは言えんがな」
「世の中がひっくり返るようなことどすやろか」
十兵衛は笑った。お近には、十兵衛が将軍家光を暗殺しようとしているのが、何となくわかるのか。
「神谷はんは、うちが思うているよりも、大きい人どすやろな」
「それほどでもない」
この九年、何もできなかったのだ。忠長を将軍にすることは、簡単なことのように思ったこともあった。
「うちが神谷はんにお会いできたのは、旦那はんのおかげどす」

ええっ、と十兵衛は思った。

「いまは、旦那はんに感謝しておるのどすえ」

もちろん、大原から岩倉への道をとらなければ、十兵衛とは会うこともなかったわけだ。お近はそう考えたほうがよい。すると苦しむこともないわけだ。

だが、十兵衛は、ええっ、と改めてお近の顔を見る思いがした。清七の死で、身をよじるほどに悲しんでいたお近がである。

「でも、今日一晩は、うちのものどすえ」

お近が元気になって、清七も成仏できるだろう。

案内されて風呂に入った。木の香りのする風呂である。一人でゆっくり入れるだけの湯槽である。湯に体を浸して手足をのばした。さすがのお近も入っては来なかった。

狂っているときは仕方がない。だが、いまは正気にもどったのだ。二人の子供がいるという。その子供たちの手前もある。昼間から男と共に風呂に入るわけにはいかないのだろう。

もちろん、十兵衛もそのほうがよかった。ゆっくりと入って、外に出ると垢を擦る。そして湯槽に入る。

立って窓を開ける。たしかに雪が降っていた。ぼたん雪である。

「やらずの雪か」

と呟いて苦笑する。

たしかに店の表で、埋葬からもどって来たら、お近に殺気を発したとき、十数人、船田屋の前に立っていた弥次馬たちも見ていた。

お近は体を震わせて尻もちついた。京の噂になって当り前だった。あとで口止めしてもはじまらない。

家の中のほうがよかったのか。だが、殺気は虚にあるときのほうが効く。お近は、あのとき、十兵衛に抱きつこうと、よろめきながら歩いて来ていた。

それを他の者に見られてしまったのはよくなかった。湯殿を出る。そこに湯帷子が用意してあった。それを着る。女中に案内されて通夜のとき泊った部屋に入った。そこには、すでに夜具が敷いてあった。

夕餉が運ばれて来て、それをすますと酒膳が運ばれて来た。女中が照れた顔をしていた。この夜具で、十兵衛がお近を抱くことはわかっている。

十兵衛は立って、外側の障子を開けた。やらずの雪はやんでいたのである。積るほどには降らなかったようだ。もちろん逃げ出す気はない。

障子を閉めて酒膳の前に坐る。女中が酌をする。

「よい、わし一人で呑む」

はい、と言って女中はもじもじしている。

「お近さんに言われたか」

「はい」
「お近さんに言え、逃げはせん」
はい、と言って女中は去っていく。十兵衛は火鉢に手を当て、手酌で酒をのむ。
「いかんな」
と呟く。女は狂う。子供に死なれても、男に捨てられても。そういうのが、助けてくれと言ってこの船田屋に押しかけて来るのではないか。
そうなれば、十兵衛は断われない。人助けなど趣味ではないのだ。もっとも死神が取りついたものの死神を追い払うということができるかどうかはわからないのだ。
お近の場合はたまたまだった。死神を退散させられる男、と思われても困るのだ。明朝には、さっそくこの家を出よう。
板戸が開いてお近が入って来た。そして背中に抱きついて来る。
「今夜だけどす。かんにんしておくれやす」
「気にせずともよい」
湯上りなのだ。体が熱い。お近は自分で夜具に入った。十兵衛も立って夜具に入る。行燈を消して、とは言わなかった。
お近は抱きついてくる。ふふっ、と声をあげて体を擦りつけて、熱い息を吐く。足を十兵衛の腰に乗せて来た。

「うち、今度は神谷はんに狂いたい」
それは困る。だがそうは言わなかった。
「嘘どす、嘘どす、神谷はんがお困りにならはるようなことは、ようしまへん」
半分は本当だろう。十兵衛は、二十九歳、美男である。体つきは逞しい。
「でも、うち倖せどす。神谷はんにお会いできて、こうして神谷はんに抱いてもろて、これだけで、うち生きていけます」
「子供たちのために、親御さんたちのためにな」
男の足を股間に引き寄せ挟みつける。
「清七はんは優しい人でした。うちのほうが気が強うて」
「わかるな」
仰向けにし衿を開いて、乳房を手に包み込む。以前よりも膨みが増しているような気がする。気持が豊かになると乳房も豊かになる。そういうこともあるのだろう。
乳房を揉み上げる。乳首はすでにとがっている。お近の手が股間を探る。一物を手にする。
ふふっ、と笑った。
「うれしゅうおす」
と言う。
乳首を咥えた。手を肌に滑らせる。肌のなめらかさも別人のような気がする。たしかに四日

前のお近の体には、ねずみの臭いがあったような気がする。いま思えばである。もちろんいまはそんな臭いはない。

尻を撫で、腿に手を這わせる。挟みつけられていた足を放し、内腿に触れる。手がはざまで届いた。低い声をあげた。

はざまに手が上下する。指で切れ込みを分けた。そこは薄く潤んでいた。指が滑るくらいには。そこに指を躍らせる。

お近は声をあげて腰をくねらせる。

「うれしゅうおす」

と呻いた。

指を重ねて壺の中に没入させる。ううっと呻いた。腰を回す。ぬめった襞が指に絡みついて来る。

指を深く埋めると小壺に触れた。その根元を震わせる。もちろん、小壺というのは鈍いものだ。壺の中がゆるくなった。潤おって来たのだろう。

お近は、男の腕を押しのけ、十兵衛の体を仰向けにすると、股間に顔を埋めて来た。尖端に唇を押しつけてくる。唇を舌で舐めまわし、そしてまた唇を這わせる。

2

帰る仕度をしていると、佐兵衛がやって来た。

「お願いがございます」

「何かな」

「吉右衛門という男が、神谷さまにお願いがあると言って来ております」

「やはり来たか、早いな」

「噂は早ようございます」

「知り合いか」

「町内にいる方でございます」

「死神を追い出してくれとか」

「はい、そのようにございます」

「店にいるのか」

「はい」

「裏に回してくれ」

「そのほうがようございますね」

十兵衛は、仕度をして炊事場に出た。そこは三和土になっている。その三和土に男が膝をついて坐っていた。十兵衛はそこに腰を折った。

「神谷だが」

「神谷はんでございますか、わたしは吉右衛門と申します。指物師でございます」

まだ四十を出たばかりだろう。

「娘をお助け下さいまし」

「どうしたのだ」

「男に捨てられて、死神にとりつかれたようでございます」

「いくつになる」

「十七でございます。金をかけて大事に育てて来た娘でございます。鴨川に身を投げると言ってききません。娘に死なれたら、わしら夫婦生きてはいけません。どうぞ、神谷さまの術で、死神を追い出していただきとうございます」

吉右衛門の言い方は、少しおかしかった。

「救えるかどうかわからんがな、行ってみようか」

と三和土に降りて草鞋をはく。

「ありがとうございます、助かります」

吉右衛門は先に立って裏から出た。振り向くと、お近が立っていて頭を下げた。昨夜は何度

も悶え狂った。抜くという言い方をすれば、十兵衛は三度抜かれたことになる。

通りへ出て路地に入る。少し歩いたところが吉右衛門の家だった。戸を入ったところは吉右衛門の仕事場になっているらしく、木くずが散っていた。

三和土をそのまま奥に入る。そこに四十年配の女が坐り、そばに娘らしい女が縛られ、猿ぐつわをはめられ、転がされていた。そのさまに、うむ、と思った。

顔は白くて美しいようだ。大事に育てられたのだろう。十七ではもう女だ。縛られているのが痛ましい。

「縄を解いてやれ」

「いいえ、このまま、死神を追い出していただきとうございます」

「吉右衛門、わしをたばかっているのではあるまいな。わしを欺しているのなら、そのほうの命はないぞ、よいな」

十兵衛は、刀を抜いた。

「ひえーっ」

と声をあげて、吉右衛門のほうが腰を抜かしてしまった。坐り込んだ吉右衛門に女房が抱きついた。

「お許しを」

十兵衛は、娘の体を引き寄せ、猿ぐつわを外してやった。そして縄を解いてやる。娘を縛る

とはよほどのことだろう。
「名は、何という」
「お稲と申します」
「死神がついているようには見えんな」
「はい、死神などついてはいまへん。うちは伊三郎はんとの仲を引き裂かれたのどす」
「なるほど、親はその伊三郎とは一緒にしたくないのだな」
「うちを、祇園の茶屋に売るつもりどす。もう売り先は決っています。だから、うちに好きな男がいてはいけんのどす。お父はんは、うちが伊三郎のことを忘れさすように、お武家はんを呼んで来たのどす」
「吉右衛門、だいぶ話が違うようだな」
「申しわけございません。ですが、十七年の間、お稲を大事に育てて来たのどす。これからは、わしらを食わせていかなければなりません。それなのにどこの馬の骨ともわからない男に惚れよって、親不孝ものどす。わしは老後をのんびりと生きていくために、お稲を育てて来たのどす。それなのに」
と吉右衛門は泣いている。
「吉右衛門、まだ二十年は働けよう」
「そういうこととは違います。金かけて美しゅう育てて来ました。これからは働いてわしらの

暮しを立てていかなければならないのどす。よその方にはおわかりになりまへん」
「わかった。お稲、わしと寝るか」
吉右衛門はびっくりして顔を上げた。お稲は一呼吸、十兵衛を見て、
「はい、抱いて下さい」
「おまえは何をいうか、とんでもないことでございます。お稲は商売もんどす」
「そういうことだな。伊三郎は、ただでお稲を抱いた。それで怒っているのだな。いくらわしでも商売ものには手はつけられんな」
「お武家さま、抱いて下さい」
「おまえという娘は、親をバカにするのか。親不孝者め」
「うち、祇園の茶屋に身を沈めます。でも、ときには伊三郎さんと会わせて下さい」
「バカもん、そんなことができるか。伊三郎のような男がついていては、高くは売れん」
「お稲はいい女だ、いい値がつこうな。お稲、親孝行はするものだ」
十兵衛は刀を鞘に収めると背を向けた。
「神谷はん、どうぞお稲を」
十兵衛は外へ出た。後からお稲が追って来た。そして腕にすがりつく。
「お願いどす、抱いて下さい。そしたら、うち伊三郎のこと忘れます」
何だろう、と思う。娘を縛って猿ぐつわまでかませる。十兵衛はびっくりした。そして娘を

商売もんという。そういう親の考え方に異様なものを覚えた。

親は娘の倖せを願うものではないのか。伊三郎という男が、どういう男かはわからん。だが、お稲をただで抱きおって、と言った。すると金を出したらいいのか。お稲の体は商品なのか。高く売るために大事に、金をかけて育てて来た。それにどこの馬の骨ともわからん男が出て来た。

それで吉右衛門は、驚きあわてた。伊三郎という虫を、お稲の頭の中から追い出してもらうために十兵衛を頼んだのだ。

「たった一度でいいんどす。抱いて下さい」

十兵衛は、三条通りにある旅籠に入った。お稲を抱いてやらねばならんのだろう、と思った。二階の部屋に通される。お互いに風呂に入った。女中が酒を運んで来る。浴衣姿のお稲は輝いていた。十七歳で京美人である。吉右衛門夫婦には宝だったのだろう。

自分たちが宝のように育てた娘だから、自分たちの所有物と思い込んだ。たしかに娘を生んだのは母親である。そして夫婦で金をかけて育てて来た。

それを伊三郎という男が盗んだ。吉右衛門夫婦にとって伊三郎は盗人なのだ。

十兵衛は、お稲に酌されて酒を呑む。お稲も酒をのむ。十兵衛のふところには百両の金があった。

船田屋佐兵衛としては、百両を受け取ってもらえないと困るのだ。お近は二度、命を十兵衛

に救われた。

百両の価値のあることだ。ただということは、むしろ佐兵衛にとっては怖ろしいことなのだ。十兵衛が百両受けとってくれれば、佐兵衛も安心できるのだ。お近にそう言われて百両を受け取った。

「うちは、商売もんとして育てられて来たんどす。祇園に入って舞子になって、いい旦那に身請される。そして毎月のお金は旦那はんから出る。うちのお父はんもお母はんも、何もせんで楽に暮していけるのどす」

「なるほど、お稲の体は金のなる木なわけだ。この体から、いくらでも金が出てくる」

と言って、十兵衛はお稲の腿を突ついた。

江戸でもたしか同じようなことがあった。売れっ妓の芸者が、好きな男を作った。すると双親は、娘を取られたと言って騒ぎはじめ、夫婦で心中しようとした。

世間では、その芸者を悪者にした。親を捨てて、男に走った。恩知らず、ということになるのだ。親不孝者である。

町奉行所では、芸者と男を捕え、男との仲を裂いて、芸者は親のもとにもどした。どんな親でも親不孝は許されないのだ。

結局、その芸者の娘は親不孝者と言われながら、大川に身を投げて死んだ。親には生きている限りは孝行しなければならない。

公儀はこれを徳とする。武士道とつながる部分だ。子供には自由がない。親孝行が大前提なのだ。

娘に死なれた双親は、絶望して、これまた大川に身を投げた。

それから考えると、十兵衛は親不孝者である。おのれの主義で、親に反抗した。十兵衛もこのお稲と変らないのかもしれない。

その上に、家光を暗殺しようなど、大悪人である。お稲など小さな可愛い悪人である。

お稲は、酒膳を押しのけて抱きついて来た。柔かいしなやかな体をしている。腰を抱き寄せた。こういうのを柳腰というのだろう。

十兵衛があぐらをかいた膝の上に、横に坐った。花車な体だ。それに軽い。たしかに売れそうな体つきだ。

衿を開いた。そこに碗を伏せたように丸い乳房があった。体つきからすれば、ましな大きさだろう。花車だから乳房がお皿とは限らないのだ。

「うち、伊三郎をそれほど好きではないんどす。ただ、親に反抗してみたかっただけどす。お父はん、腕のいい職人どす。それなのに、うちが売れたら、指物大工を止めると言うのどす」

「なるほど、わかるな。お稲が美しくなかったら、指物大工は止められんな。美しいのが悪いのだな」

「そうや、思います。うちがふつうの女子やったら、お父はんの弟子と夫婦になって、一生を過すんやと思います」

「そうか、お稲は頭のいい娘だ。だが、美しければ、それなりの生き方ができる」

色はきれいだが、乳首も小さくはなかった。乳房を手に包み込んで揉み上げる。

「きれいな乳だ。男は知っているのか」

「伊三郎だけどす」

乳房は若いだけに弾力がある。女になっているのかはわからない。

「どうして、わしに抱かれたくなった」

「はい、神谷はんはいい男どす。女やったら一度は抱いて欲しい殿方やと思います。ほんまに、神谷はんに抱いてもろうたら、祇園にいけると思いました」

「そうか、それはよかった」

お稲を抱いてやるのも功徳だろう。

お稲は、立ち上った。そして浴衣を脱いで素っ裸になった。

「うちがきれいなときを、見ておいておくれやす」

きれいだ。京美人の典型だろう。全体からすると顔は丸くて小さい。首が長い。肩もなだらかで、細腰は細い。腿は肉づいていて、膝から下は細くなっている。肢が長くて調和がとれている。

お稲は、そこでくるりと回ってみせた。いまが一番美しいときかもしれない。色が白くて肌

はなめらかだ。まさに京人形である。

お稲はそのまま夜具の中に入った。妙なためらいはない。たしかに商売ものだ。十兵衛も、夜具の中に入った。お稲が抱きついてくる。

「神谷はんに比べると、伊三郎なんぞ、つまらん男どす。神谷はんのような旦那がつけばよろしいのに、と思っているんどすえ」

これくらいの年ごろの女をしょんべん臭い娘という。そういう娘も多い。若い娘だと風呂に入っても、はざまを洗う習慣がない。女になってはじめて洗う気になる。

そこが男が求めるものと知るからだろう。だがお稲はそういうものは感じさせない。

「でも、神谷はんに、裸を見られたの恥ずかしゅうおす」

「けっこう。男には、もっと恥ずかしがってみせることだな」

はい、と言った。可愛い娘だ。

布団をはいで、うつ伏せにした。

「寒いか」

「いいえ、神谷はんの手は暖うおす」

首筋から背中を撫でる。なめらかな肌だ。肉付きは薄いが、骨を感じさせない体だ。腰から尻、そして腿まで手を這わせ、手をたのしませる。

背中に布団を掛けてやる。するとお稲は向き直って抱きついて来た。十兵衛の体を撫でる。

そして一物を手にすると、

「恥ずかしゅうおす」

と言って、胸に顔を埋めてくる。一物を握るのが恥ずかしいのだ。手を上下させ、ゆっくりと体を下にずり下げていく。そして一物の尖端に唇を押しつけて来た。

一物をお稲にまかせておいて、十兵衛は天井を見る。お近を助けた。お稲も抱いてやることで助けることになるのか。

お稲の腰を引き寄せた。小さな尻を撫でる。溝から手をのばし、指をのばす。切れ込みに触れた。

切れ込みはしっかり閉じられている。そこを指でこじ開ける。白い尻が動いた。切れ込みに指が滑った。

「うぐっ」

と声をあげる。指先が肉の芽に触れたのだ。尻を引き寄せて、

「またげ」

と言った。いやどすえ、そないなこと、恥ずかしゅうおす、できまへん、と言いながら十兵衛の顔をまたいで来た。

目の前に切れ入みがあった。指で切れ込みを分ける。そして粘膜に舌を押しつける。舌を躍らせる。

「ヒーッ」

と声をあげて、はざまを押しつけて擦りつける。小さな尻がこりこりとくねっていた。肉の芽は思ったよりも大きい。芽の大きさも女によってそれぞれだ。大きい芽が敏感ということではない。小さい芽のほうがより敏感なようだ。

だが、敏感すぎると、女はそこを刺激されるのをいやがる。女の芽は大きいほうがいいようだ。

芽を吸う。そして歯を当て咬む。

「ヒーッ」

と声をあげて、腰を振る。お稲は自分から体を放し回した。一物を手にして腰に跨がってくる。一気に呑み込んだ。

体を伏せて十兵衛の首にしがみついてくる。そして腰を回す。なかなかやるじゃないか、と言いたいところだ。祇園の舞子になるだけの素質はある。

女も、まぐわいを楽しむようになれば一人前だ。男のために体を開くのではない。おのれのために体を開く。すると男も楽しめることになる。

両手で尻をかかえる。その尻がよくくねっている。賢虚ぎみの初老男も、このお稲が相手ならぴんぴんだろう。そういう女だ。そういう女に生まれついているのかもしれない。

「お稲はいい女だ。安く売ってはいかんな。男を選べ。伊三郎など忘れてよかった。祇園に入

ったら、おのれをどれほど高く売るかだな。この体は安く売ってはもったいない」

「はい、そう心掛けますえ」

「こんな体を伊三郎に抱かれていたとは、吉右衛門でなくてももったいない」

「神谷はんに、そう言うていただくと、うれしゅうおす」

「気をやったことはあるのか」

「はい、でも、これまで一度か二度だと思いやす。でも、神谷はんにしてもらうと、気がいくような気がしています」

「けっこうなことだ」

十兵衛は、わしは悪党だな、と思って苦笑する。善人のつもりはない。世の中、悪党のほうが生きやすいのだ。

「まともでしておくれやす。せつのうなって来ました」

「けっこうだ」

お稲は十兵衛の上から降りた。そして、そばに仰向けになる。膝を折り立てた。男を迎える姿勢は知っているのだ。

足のほうに回って腰を進めると、膝が開くのだ。更に腰をすすめる。尖端を壺口に当てた。

「あーっ」

と声をあげて、お稲は迎えに来た。そして十兵衛の体にしがみつく。まだ、襞をうねらせる

力はなかった。

3

北野の住まいにもどった。

上七軒といわれる花町は、北野天満宮の社頭、つまり門前町として栄え、多くのお茶屋ができた。ここで散財するのは西陣の旦那衆なのだ。西陣が栄えれば、上七軒も栄えることになる。

居間に入ると、火鉢には火が入っていた。女中のお留は、十兵衛がいてもいなくても、部屋は暖めている。

十兵衛がもどった、と知ると、茶を淹れて来た。

「ご苦労、今日はもうもどってよい」

「ここに泊ることにしました。いけませんか」

「そうだな、この寒いのに通ってくるのは大変だ。寒くないようにしていてくれ」

「ありがとうございます」

伊勢屋の女中である。これまでは伊勢屋から通って来ていたのだ。この家には三畳の女中部屋がある。三畳でも寝起きするには充分の広さだ。

昨夜は、お稲と一緒に旅籠に泊った。神谷はんのことは一生忘れまへん、と言って、朝別れ

ていった。一夜だけでは、もったいないような娘だった。

表に人の気配があった。

「ごめん」

と声がした。お留が出て行った。

「あの、比賀志はんという方がおみえどす」

「上ってもらってくれ」

旅の侍が入って来た。みなりは浪人ではない。と言っても侍でもない。髷は総髪だった。男は、十兵衛の前に坐った。

「拙者、比賀志右近と申す。はじめて御意を得申す」

「比賀志さん。もっと気を抜いて、のんびりいきましょう」

「そうですな、楽にさせてもらいます」

「どうぞ、どうぞ」

比賀志右近、紀州頼宣の風衆の一人である。家光暗殺には、風衆が百人ほど参加してくれるのだ。右近はその連絡のために来たのだ。

「公がいつ江戸を発たれるのか、まだ決ってはいないようです」

日光東照宮の改築が完成するのは、新年の二月か三月か、まだはっきりとはしていない。落成すれば家光は参詣する。その途中を襲うつもりなのだ。

一応は、日光街道の幸手と決めている。どのように襲撃するのかは、これから策を練らなければならない。

家光の行列は、幸手で休息することになる。ここを襲おうと計画している。だから幸手で待伏せしていればいい、ということにはならない。

御先手組が一日早く江戸を出る。横綱の露払いのようなものだ。先行して道中を調べる。何か異変があれば、すぐに行列に伝えられる。

その御先手組のあとから、それとわからぬように密偵が出る。物見である。二重に警戒する。その者たちの目に触れないように幸手に入らなければならないのだ。

風衆百人が、どこにどう気付かれないように隠れているかである。風衆というのは頼宣の忍者組である。もちろん頼宣の名は全く出さないように訓練されている。

昨年、家光が上洛する途中、大井川で襲った。その者たちは、肥後・加藤清正の家臣団だった。もちろん、清正の陰にいた者たちで牙衆と言われていた。

家光暗殺に失敗した。半分ほどは斬死し、半分は散っていった。今度は頼宣が風衆を出してくれたのだ。

「お疲れであろう」

「いや、それほどではありません。わしらにはこれくらいの旅、ごく普通のことです」

「この家に泊っていただく」

「はい」

「もっとも、別に住いを探してもよいが」

「いや、ここでけっこうでござる」

十兵衛は、お留を呼んだ。

「この人は、比賀志右近と申される。ここに泊っていただくことになった。よろしく」

「はい、お世話させていただきます」

「よしなに」

「話はゆるりといたそう」

「わかり申した」

また、表に人の気配がした。

「神谷さん、いるか、上るぞ」

石川伝七郎の声がした。

「ああ、客人であったか」

「伝七郎さん、わしらの仲間だ」

二人を引き合わせた。

十兵衛は、お留を呼んだ。

「竹乃屋に席をとってくれ、四人だ。芸妓も適当にな。芸妓の中に雛菊を入れるようにな。伝

七郎、お鯉さんはどうだ」
「いや、それは止めにしてくれ」
「あまり、わしらの前に顔を出させたくないのだな、あんたらしい。お留、行って来てくれ」
お留は外に出ていく。
「いや、比賀志さんが見えた。お茶屋で酒をのもう。伝七郎さん、柴山さんも呼んだらどうだ」
「そうだな、呼んでくる」
と言って伝七郎は立った。
「お仲間が、いろいろおられるようですな」
「いや、たいしたことはない。江戸にあと四人いるのかな。それだけだ。わしの仲間では何もできん。比賀志さんたちのお力を借りなければな」
お留がもどって来た。
「伊勢屋の名で席をとりました」
「ご苦労さん」
しばらくして、伝七郎の声がした。
「それでは、行きましょうか」
「わしのことならば」

「なんの、みんな茶屋で呑みたがっている」
十兵衛は刀を手にして立ち上った。表に出ると柴山丹後が伝七郎と一緒に立っていた。柴山と比賀志を引き合わせる。
「それでは行こうか」
と十兵衛は先に立って歩き出す。角を曲ったところで、十兵衛は足を止めた。そこに三十人ほどの浪人が立っていた。
「何の用だ」
「柴山、おまえ、わしらを裏切ったな」
四十歳ほどの浪人が言った。浪人の頭だろう。
「ここは、神谷さんたちには関りないことだ。先に行ってくれ」
「柴山さん、わしにまかせろ」
と引き止めた。
「おい、おまえが、神谷兵庫か、わしらと喧嘩する気か。洛外には六千人の浪人がいる。その六千人と喧嘩するつもりか」
「おまえは馬鹿か、六千人が集まれるわけはなかろう。六千人が命を賭ければ、幕府と喧嘩できるぞ。五百人集まれば、京都所司代を襲え。わしと喧嘩するよりも、よほど金になるぞ。おまえらが集まっても、せいぜい三十人ではないか」

「わしらと喧嘩するのか」

頭が刀柄に手をかけた。そのときには、十兵衛は、つつと歩き、あっという間に間を詰めた。

十兵衛は腰を据え、刀を抜いた。薙ぎながら斬っていた。

十兵衛は踊っていた。刀が右に走る。体を右に寄せ、剣尖を車にして上段から雁金に斬り下げる。

一歩、右に動く。すると刀は左へ来る。左へ来た刀を逆袈裟に斬りあげる。四人目は袈裟掛けに斬り、左側に来た刀を薙ぐ。五人を一呼吸で斬っていた。

そこで一歩二歩と退く。

はじめの頭の首が妙に動いた。首筋に赤い糸が見えたと思ったら、その赤い糸が、血しぶきとなって噴き上る。

首が左右に動いた。首を傾ける。どちらへ落ちようか、と迷っているように見せて、前に転り落ちた。首がころりと転がる。首を失った部分から、血が噴出する。

そして、おのれの首を追うように、朽木のように音をたてて倒れた。それを見て、浪人たちは、

「ヒャー」

と声をあげて逃げ出した。

五人だけがそこに残った。二人目は棒立ちになっていた。体の左半分が、魚を三枚におろすように、その一枚が、左腕をつけたまま、というよりも、左腕の重さでめくれ返ってくる。

左手が地面を刷く。魚の白味のように肉が白く見えた。血はすぐには出て来ない。浪人は目を剝いて立っていた。白玉が白い肉の中に付いていた。

これは切断された肋骨だった。切断されて肉は収縮する。肋骨だけがとび出してくる。それが玉のように見えた。十二個の白い玉が二列に見えていた。ゆっくりと血がにじみ出て来る。

三人目は、逆袈裟に斬った。浪人の右脇腹から斜め上に入る。その刃が鳩尾あたりを通る。心臓をわずかに裂いて、刃は上に抜ける。

一呼吸あって心臓が裂けた。血がほとばしり出る。下半身が醤油樽をかぶったようにどす黒く濡れる。

四人目は袈裟掛けに斬った。左首根から刃が入る。そこからぐいぐい刃が入って、右脇腹に抜けた。

首と右腕をつけた上半身が斜めに斬り放され、滑り落ちた。落ちた頭は斜めになっている。右手が地面を掻いた。

五人目は、急に小さくなっていた。腹を薙がれたのだ。腰から下は立っていた。上半身が、腸を引きずりながら這っていた。上半身だけになって逃げようとしているのだ。

「ヒーッ」

と叫んだ女がいた。口に手を当てて嘔吐している男がいた。

伝七郎は、十兵衛の斬り方を知っている。柴山と比賀志は、目を剝いて見ていた。

十兵衛は刃を拭っていた。

拍子斬りである。五人を斬るのに全く無駄がなかった。拍子に乗れば、袈裟掛けに首と右腕を裂き、腰車に斬ることもできる。

十兵衛は刀を収めた。

「相手が大勢のときには、むごく斬ったほうがよい」

十兵衛はふところから二両をとり出した。そして弥次馬の中の五十男に握らせた。

「すまんが、みんなでこの死体を蓮台野に運んでくれんか、たのむ」

「へ、へっ」

とその五十男は、ガタガタ震えていた。

少し歩いて『竹乃屋』に入った。番頭が出迎える。

「伊勢屋はんでございますね、どうぞ、お上りになって下さいませ」

仲居が座敷に案内する。それぞれ、用意された座布団に坐る。仲居たちによって酒膳が運び込まれる。そして芸妓が来るまでの間、仲居が酌をする。

「さあ、みんな呑んでくれ」

「神谷さん、どうしてあのように斬れるのだ。あのような斬り方ははじめて見た。いや、凄い、寒気がする」

比賀志が言う。彼は神谷兵庫が柳生十兵衛だとは知らない。知っているのは伝七郎だけだ。

「神谷さん、参った。遠く及ぶところではない」

柴山が言う。

「わしはわしなりにできるつもりだったが、神谷さんの前では赤子同然だな、五人は藁人形のようだった」

「どうしてあのように斬れるのですか」

比賀志が言った。

「どうして、と言われてもな。修業したというしかないな。だが、少し拍子に乗りすぎたな」

そこに芸妓たちが現われた。呼んでもらったことの礼を言う。四人の一人は雛菊だった。いきなり抱きつくわけにはいかない。遠くから怨ずるような目で見ている。

別の芸妓がそばに来て酌をする。

「いま、浪人たちが戸板で運ばれていくところどした。何かあったんどすか」

誰も何も言わない。いまさら話題にしたくはなかった。それほどむごい斬り方だった。

「明日、山賊退治に行こうと思っている」

十兵衛はいきなり言った。

「神谷さん、用意はできている」

「山賊退治とは」

「洛北、天ヶ嶽に山賊の巣がある。百人ほどの賊がいるそうだ。女も数多く攫って来ているのだろう」

「なるほど、それはよろしいですな」

と比賀志が言った。家光暗殺を思ったのだ。予行と考えればよい。

「わしも連れていってもらえまいか」

柴山が言った。

「いや、わしは神谷さんの門弟だから、行かねばならんな」

「何のことどす。山賊退治やなんて、嘘ですやろ、怖ろしい」

「そうどす。この寒いのに、こごえ死にますえ」

別の芸妓が言った。たしかに京の冬は底から寒い。底冷えがするという。だが、北国の人に言わせると、こんなものではない。

だが、北国の人たちは、寒さに対する対策を立てている。着るものにしても、足にはくもの、頭にかぶるもの。みんな防寒法を知っている。

京にはそれほどの防寒法はない。だから、よけいに寒いのだ。家の作りからして違うのだ。それに体も寒さに馴れている。

伝七郎も比賀志も、十兵衛がどうして山賊退治に行くのかを知っている。知らないのは柴山だけだ。柴山は剣の修業だと思っているのだろう。

十兵衛が雪隠に立つ。雛菊がついて来る。腕に抱きついた。

「どこに行っておいでだったんどすか」

「いろいろと用はある」

「うち、何度もあの家に行きましたんどす。うち、毎日、神谷はんのこと考えて」

「今夜は、雛菊の家でゆっくりしよう」

「ほんまどすな、嘘ではおへんな」

「ほんとだ。だから、この店に来た」

雛菊は泣き出さんばかりだ。抱き寄せて、腰から尻を撫でてやる。すると、雛菊もどうやら落ちついて来たようだ。

用を足して席にもどる。三人は機嫌よく呑んでいる。比賀志も柴山も、このような席で酒をのむことはめったにない。伝七郎にしても同じだ。

柴山は、しきりに芸妓の体に触れている。比賀志は遠慮している。伝七郎は静かに呑んでいた。

比賀志だけは、表向きはとにかく、裏では紀伊家の侍である。伝七郎と柴山は浪人だが、その質は全く違う。

雛菊は十兵衛のそばにぴたりと坐っている。十兵衛は、伝七郎を呼んだ。

「柴山さんがついて来るのなら、山に入る仕度をしてやってくれ」

「わかった。柴山さんは、あの芸妓を抱きたがっているが」
十兵衛は、雛菊に、芸妓にその気があるのかどうかを聞かせた。比賀志も同じだ。もちろん金は伊勢屋からでる。
もちろん、伊勢屋が負担するわけではない。江戸の奈良屋が出す。
「ならば、明、明け六ツにわしの家に集まってくれ、そこから洛北に入る」
「わかった」
と伝七郎が言った。この男はお鯉のところに帰るのだ。
天ヶ嶽に入るといっても、何日もかかるわけではない。朝早く発てば、昼すぎには着くだろう。食糧は、山賊を退治すればそこにある。それぞれ握り飯を持っていけば、それですむ。
十兵衛は立ち上った。
「この辺でお開きにしよう。あとは好きにしてくれ」
柴山はまだ女とたわむれていた。
十兵衛は、雛菊と一緒に『竹乃屋』を出た。雛菊は、あとの座敷は断わったのだ。芸妓は遊女ではない。それくらいの自由はきくのだ。

五章　襲撃

1

昨夜から雪が降っていた。雪の山に入るのは厳しい。だが、これも修業のうちだと考えている。
信州・高崎で、忠長が自刃したとき、ほんとは自刃したのは身代りであったが、その年に山に入った。夜の山で樹木が放つ気を浴びるためだった。
冬でも、この気を浴びていると寒くないのだ。丹田から生ずる玉を呑み込んでいると、寒くもなく、腹も空かない。
巨木の林の中に入って坐禅する。そして頭の中にあるものをみんな放出して頭の中を空っぽにする。
この坐禅は夏からはじめた。頭を空っぽにするまで何カ月もかかった。樹木の気を受けてい

るうちに、丹田に玉が生ずるようになった。

その玉は、転がりながら股間に入る。そして尻から背中を這い上ってくる。目で見ても玉は見えない。体で感じるのだ。

玉はくるくると転がりながら、頭にたどりつき、そこからゆっくり転がり落ちてくる。口を開いてその玉が転がってくるのを待っている。

額から眉間を通って鼻に入る。鼻の頭を通って仁中から口に入るのだ。それを呑み込む。しばらくすると丹田にまた玉が生じる。

それをくり返して玉を一晩に五個くらい呑み込むのだ。夜が明けたときには、体はさわやかになっている。

仙人が霞を食って生きていると言うのは、このことだな、と思い至った。樹木はいつも気を放出している。だが、昼間は気は弱く夜になると強くなる。

そのことを教えてくれたのは徳川家の剣術指南、小野次郎右衛門忠明だった。

だから、冬の山でも寒くはない。だが、他の者にはそうはいかないだろう。

伝七郎が旅仕度をして住まいのほうに来ていた。比賀志はこの住まいにいる。比賀志は紀州の風衆だ。いつも紀州の山中で鍛練している。山に入るのは、町にいるのと同じなのだ。

柴山丹後はまだ来ていなかった。

「柴山さんは来ませんね」

と伝七郎が言う。

明け六ツには出発すると言ってある。十兵衛は黙って答えなかった。

寺の明け六ツの鐘が鳴りはじめた。京ではどこにいても鐘を聞くことができる。鐘の音が、いくつも重なって耳に達する。

「さて、行こうか」

と十兵衛は立ち上る。

「柴山さんが」

「放っておけ」

と言った。玄関に出て革足袋をはく。その上に草鞋をつけるのだ。住まいを出た。そして北に向って歩き出す。

伝七郎は後を気にしている。柴山が追ってくるか、と思っているのだ。

「放っておけ、あれはただの浪人だ」

もちろん、家光暗殺のことは告げていない。堀川通りを北へたどる。先日、洛北に入ったのと同じだ。

天ヶ嶽は、鞍馬山と金毘羅山の間の奥のほうだ。金毘羅山の東方が大原だ。その更に東に三千院がある。

三人は雪の中を歩く。積りそうな雪ではないし、垂直に落ちている。風がないのだ。堀川通

りが加茂川にぶっつかり、御園橋を渡る。
「来たっ」
と伝七郎が声をあげた。優しい男なのだ。柴山が走ってくる。息を切らして走って来た。
「いや、間に合ってよかった。遅れてすまん」
と言った。
「柴山さん、あんたはもどってくれ」
と十兵衛は冷めたく言った。
「えっ、どうしてだ」
「約束を破るような男とはつき合えん。帰ってもらう。それに、その姿では山には入れん」
「いや、遅れたのはすまん。かんべんしてくれ、何年ぶりかで女を抱いたものでな」
「あんたは、わしの弟子のつもりだろうが、わしは弟子にしたつもりはない」
「神谷さん、詫びる」
「詫びてすむことかな。この伝七郎は、ずいぶん前から来ていた。女を抱いて気が抜けたか。気の抜けた者は使いものにはならん。もどってくれ」
柴山は、走って十兵衛の前に膝を折った。そして両手をついた。
「たのむ。容赦」
十兵衛は、柴山のそばを通り抜けた。厳しい顔をしている。人を赦さない男だ。伝七郎も比

賀志も通りすぎる。無視して歩いていく。
神山という小さな山がある。その谷間を歩く。右手に小町寺がある。小町寺は通称である。如意山補陀洛寺。道を上っていくと市原村に出る。
「柴山さん、まだついて来ますよ」
伝七郎は、柴山を十兵衛にとりなしたいようだ。
「放っておけ、浪人は浪人だ。汚れきっている。人との約束など全く気にしないようになっている。少しはましな男と思ったがな」
振り向きもしない。十兵衛はおのれ自身にむかついているのだ。徳川家を神道にできなかったことをだ。
この九年間、何をして来たろう、というむかつきだ。焦れている。
寛永三年、父に勘当され、浪々の身になったときには、家光を忠長に換えることは簡単なことのように思えたのだ。それが十兵衛の錯覚だったようだ。
父宗矩は、おまえにそのようなことできるわけはない、というような顔をしていた。宗矩に思い知らせてやろう、と思っていた。
子は父を超えなければならない。そうも思っていた。柳生家は春日大社に属する神道派だったのだ。それが仏教徒の家光に仕えているのだ。しかも家光に気に入られている。
家光は鷹狩りに行く。そして目黒にある柳生の下屋敷に必ず休息する。宗矩はさまざまなこ

とを家光に教えたようだ。

だから、〝余は政事を但馬に教わった〟と家光が言ったということが、伝説のように聞こえている。

まさか、宗矩が家光に尻を貸していたのではあるまい。家光は美男に弱い。宗矩は美男であった。

いかに家光を討とうとしても。その前に宗矩が立ちはだかる。宗矩は十兵衛を睨みすえる。双眸はギラギラ炯っている。上さまを討つつもりなら、わしを斬ってからにしろ。

宗矩も武芸者である。死場所は知っている。気力だけでも十兵衛には負けはしない。十兵衛は父に負けていた。

他人として斬り合えば、十兵衛は宗矩を斬れる。術だけならばである。剣は術だけではない。宗矩は気力だけで十兵衛をしのいでいた。

家光のためならば死ねる。十兵衛は大井川で宗矩のそういう姿を見た。負けである。及ばない、と思った。

気力で宗矩に及ばない。十兵衛はそういうおのれに怒っていた。なぜ及ばないのか、とうに剣術においては、父宗矩をしのいでいる。

父だから斬れない。それもたしかにある。それだけではない。宗矩の武芸者としての気力に勝てないのだ。

おそらく、家光を守るということでは、どんな剣客も宗矩には及ばないであろう。十兵衛は、そのことに焦っていたのだ。

幸い、雪はやんでいた。

市原から道が左右に分れている。左へ行けば鞍馬である。右へ行けば静原である。静原のむこうに天ヶ嶽が見える。

静原村で足を止めた。休み茶屋がある。茶屋の床几に坐った。柴山はついて来ていた。

「柴山にも茶を出してやれ」

と伝七郎は言った。握り飯を開く。伝七郎は一つを柴山に分けてやる。老婆が茶を運んでくる。

「婆どの、近ごろ山賊はどうだ」

「お武家はんたちは」

「山賊退治に来た」

婆さんは目を丸くした。

「天ヶ嶽にいると聞いたが」

「はい、この山の中にいます」

「近ごろは出ないのか」

「三カ月ほど前どした。村の娘が三人連れていかれました。ちょっと待っておくれやす。村の

人に知らせて来ます」
老婆はトコトコ走り出した。村役人に知らせるのだろう。そのほうがいいかもしれない。村の者が、案内してくれれば、山の中を迷うことはない。
元気な婆さんだ、坂をトコトコと走っていく。
「あの村を、足がかりにするといいですね」
「そうだな、山賊を退治してやれば、あの村も安心だろう」
「山仕事をする人たちもいるでしょうからね」
「なるほど、そのほうが楽だな」
「柴山さんの仕度もできますからね」
伝七郎は、まだ柴山を庇っている。
むこうから、三人の男がやってくる。老婆はそのあとからついて来る。三人の男は十兵衛の前に立った。
「村役人の忠兵衛と申します」
後に立っている二人は若い男だ。
「あの、山賊を退治していただけるとは、ほんとでございますか」
「そのつもりでやって来たのだがな。誰か案内できる者がいるか」
「はい、いるにはいますが、お四ったりで、山賊を」

「四人ではいかんか」
「山賊は百人ばかりもおりますです」
「百人か」
船田屋のお近を助けたときの山賊は、百人と言った。嘘は言わなかったのだ。
「わしも百人ばかりと思って来た。何も村の人たちに迷惑はかけん」
「この寒いときに」
「それは、わしらの勝手だ」
「でも、これから天ヶ嶽に入ったら暗くなります」
「それも覚悟で来た」
夜の山は馴れている。山賊が住んでいるのなら灯りがあるだろう。すれば探しやすい、と思ったのは十兵衛だけだ。
他の者は、冬の夜の山には入れないかもしれない。
「あの、村長の屋敷にご案内します。明朝から、山に入られたらよろしいかと」
「そうだな、そうさせてもらおうか」
「どうぞ、案内いたします」
茶代を置いて立った。
「あの、おつりが」

「なんの、婆どの取っておいてくれ」
若者二人が先に立つ。忠兵衛は十兵衛と肩を並べた。
「山賊は山を降りてくるのか」
「はい、年に二度ほど。山賊はこちらばかりではなく、若狭や琵琶湖のほうにも出ます。でも、冬はひっそりと山にこもっているようです」
「なるほど、それならばかえってよい」
「年に二度来ても、村を潰してしまうことはありません。潰せばあとは何もなくなります」
「まあ、それが山賊の生き方であろうな」
村に入った。家が点々としている。その中でも大きな屋敷があった。村長の家だろう。家の中に入る。そこは広い三和土になっている。上り框があって、その上が板の間だ。そこに囲炉裏がある。
そこに初老の男が坐っていた。頭は禿げ上っていて髭がねずみ色だ。まだ老人とは言えなかった。
忠兵衛が先に上っていってその男と話をする。男は、ジロリと十兵衛を見た。その目にはまだ気力があった。
あぐらをかいていた男が坐り直した。
「どうぞ、お上り下さい」

と忠兵衛が言う。十兵衛は草鞋を脱いで、板の間に上った。
「わたしは、静原村の村長、義右衛門と申します」
「わしは神谷兵庫」
あとはそれぞれに名乗った。
「どうぞ、ゆるりと火に当っていただきます。山賊退治と受けたまわりましたが」
と言って義右衛門はあぐらをかいた。
「これからでは暗くなります」
「暗くなったほうが、山賊の巣は探しやすい、灯りがあるだろうからな」
義右衛門は十兵衛を見て三人を見た。賊は百人いる。四人では無理だろう、という目つきだ。
「山を甘く見ては、命を失います」
「覚悟の上だ」
それぞれに茶碗が運ばれて来た。手にすると暖い。だが、茶ではなかった。燗酒である。これまで寒い中を歩いて来たのだ。体は冷えている。
「どうしてそれほどにしてまで、退治なさるんでございますか」
「なんの、遊びだ」
「遊びとは」
「このあたりの村々は山賊に襲われていると聞いた」

「わたしどもを、お助け下さるのでございますか」
「そういう気はない。賊は百人ほどと聞いた。一人当り二十五人だ。二十五人くらいは斬れよう」
村長は眉をひそめた。若い者たちが、何をバカなことをと思ったのだろう。
「わしらにできぬ、と思っているようだな」
「村の若い者が何十人も殺されました。山賊はわしらが抵抗しないと殺したりはしません。ただ奪っていくだけです」
「黙って奪われているのか」
「はい、若い者が死んでは、野良仕事ができません」
「米や娘を奪われてはたまらんだろう」
「はい、米も酒も娘も隠します。山賊に奪われる以外なものは。山賊もわしらがさし出す物を持って山に帰ります」
「なるほど、山賊とは折り合いがついているというのか」
「はい。わたしたちも生きなければなりません。山賊もそれを知っています。村を潰しては、山賊も奪うものがなくなります」
「なるほど、すると山賊は退治しなくてよい、ということか」
「いいえ、退治していただければ、助かりますでございます」

「遊びというのが気に入らんようだな。遊びでなく武術の稽古と言ったら、納得してもらえるかな」
「調練でございますか」
「このまま山に入るつもりだった。だが、ここで一休みさせてくれれば助かる。いまから山に入るには気が抜けた。明朝、村の人に案内してもらえば、ずっと楽になる」
「けっこうでございます。若い者三人に案内させましょう」
「助かる」
「お止めになりませんか、あたら美丈夫をもったいない」
「村長、わしらは山賊と斬り合うて、死ぬつもりはないぞ」
「でもありましょうが」
「一人二十五人と言うたは嘘だ。五十人も斬れば、賊たちは逃げよう。だから一人が斬るのは十二、三人だな」
村長は心配気である。

2

酒をのんで食事をとる。囲炉裏で暖くて眠くなる。はじめに眠りはじめたのは柴山丹後だっ

た。伝七郎も比賀志も、何となくトロンとなる。
家の者たちが丹前を着せかけてくる。
「神谷さま、ちょっとお話が」
と言った。隣室に立っていくと、
「神谷さま、わたしの娘に、あなたさまのお種をいただくわけには参りませんか」
と義右衛門が言った。
こんなこと言われたのははじめてではない。過去に何度かあったような気がする。つまり十兵衛を見て、十兵衛の子が欲しくなったのだ。
もし、うまく種が結実すれば、美男美女が生まれることになる。義右衛門はそれを考えたのだ。
「だが、当るかどうかはわからん」
「はい。天のさずかりものでございますから、でも、もしかしたら、娘は神谷さまの子を生むことになるかもしれません。どうぞ、神谷さまのお種をいただかせて下さりませ」
優秀な子を生めば、村のためになるのだ。つまり種馬である。
「よかろう」
「有難うございます」
と言って、女中を呼んだ。

「申しつけた通りにせよ」
義右衛門が言う。
「どうぞ」
と女中が案内する。連れていかれたのは、まず風呂だった。風呂は釜風呂だった。裸になって湯に入る。いつもの通り、脇指はそばに置いた。
風呂から上ると、女中が入って来て背中を流す。湯はさら湯だった。肌にチカチカとする。
「娘ごはいくつになる」
「はい、お嬢さまは、十七におなりです」
「そうか、十七か」
「亭主はいるのであろうが」
「はい、村の山仕事をする新之助さんです」
「まだ、子はないのか」
「一人、お嬢さまが、もう三つにおなりですが、その後、お生まれになりません」
三つと言えば十四、五で生んだことになる。早すぎるということはない。少し早いというだけだ。
「娘ごの名は」
「お綱さまでございます」

化けものではあるまいな、と思う。義右衛門の顔つきはしっかりしている。醜女ではあるまい。

十七と聞いて、指物大工の娘お稲を思い出した。あれは親が金のなる木と言っただけに、男をその気にさせるものをいくつも持っている娘だった。

祇園に入って舞妓になっているのだろうか。舞妓の間に芸を仕込まれることになる。あの娘ならいい旦那がつくだろう。

風呂から上る。湯帷子を着て、女中に案内される。刀と着物は女中が抱いていた。

部屋に入ると、夜具のそばに白帷子を着た女が坐っていた。体の細い女だ。部屋の中は暖められていた。十兵衛はそばに坐った。

「わしは神谷兵庫だ。わしに抱かれたいのか」

「はい、お情をいただきとうございます」

「亭主がおるということだが、亭主は悋気しないのか」

「はい、よろこんでおります」

女中が酒膳を運んで来た。こういうときには男と女は盃ごとをするものだ。女中はそのまま去っていく。お綱は銚子を手にした。顔を上げて、チラリと十兵衛を見た。美形というのではないが、色白の可愛い女だ。人妻だけに色香はある。

十兵衛も酌をしてやる。白い咽を見せて呑んだ。細身だが胸の膨みはあるようだ。これまで、

あちこち旅をして来た。十兵衛の種を欲しがる女もいた。夜伽をする女もいた。

「種が当るかどうかわからんぞ」

「はい、承知しております」

「義右衛門の命令か」

「はい、でも、いまは違います」

「わしの顔を見たからか」

「はい」

と言ってお綱はうつむき、耳朶を赤くした。たしかに十兵衛はおのれが美男だと知っている。その点高慢である。女なら誰でもおのれに抱かれたがっている、と思っている。いやみな男だ。女は抱く、だが女にこだわることはしない。惚れることもない。いい女だ、と思っても、いい女は他にもいるのだ。

芸妓雛菊はいい女だった。美形である。船田屋のお近も魅力ある年増女だ。もちろん、お稲もだ。女たちは十兵衛にのめり込んでは来ない。のめり込めない男だと知っている。雛菊は少し違ったが、この女も十兵衛という男を知る。するとどこかで諦めるだろう。

夜具に入った。

「恥ずかしい」

と言って十兵衛の胸に顔を埋めて来る。お綱の腰を抱き寄せ、尻を摑む。細いようでも腰と

腿には快い肉をつけていた。

前をめくって素肌に手を這わせる。なめらかな肌だ。肌は若く張っていてしっとりとしている。人妻なのだ。

女には三度美しくなる機会があるという。生娘でなくなったとき、女の悦びを知ったとき、そして子を生んだとき。

お綱はほとんど同時にこの三つを得たのだろう。若い肌なのに人妻であり子を生んでいる。最も輝いているときかもしれない。

尻から腰に手を滑らせ、そして内腿に手を入れる。肌の感触を味あう。はざまに手をのばさないで、衿を開いた。丸い乳房が二つあった。

亭主の新之助は優しい男だろう。乳房も乳首も大きさは左右同じだった。乳首は八重桜の弁のような色をしていた。子供に吸わせた乳首だろう。

乳房を揉みあげ、乳首を口に咥えてしゃぶる。

「うっ」

と声をあげた。そして腰をひねる。その女の体の動きが快い。体つきはどこか稚い。それでいて女なのだ。いい女と言うべきだろう。

「お情を」

「そう急ぐこともあるまい」

手を下肢に滑らせる。下腹部からはざまに手を滑り込ませる。丘の茂りは薄い。品がよいのだ。はざまはつるんとしている。そこを上下に撫でる。そして切れ込みを指で分けた。

「アッ」

と声をあげる。そこは潤んでいた。人の妻である。潤んでいて当り前だろう。粘膜に指を躍らせる。お綱は腰をひねった。

手を十兵衛の股間にのばしてくる。ためらいながら、一物を手にした。それを強く握って、呻き声をあげた。男の足を腿の間にたぐり寄せる。そして腿を締めつける。

「お情を」

「まだ早い」

一物を握った手を上下させる。

「口取りを知っているか」

はい、と言って体を起し、股間に顔を埋めて来る。尖端に唇を押しつけ、舌を出してチロチロと舐める。

尖端を咥える。そして深く呑み込もうと口を押しつけてくる。もちろん根先までは呑み込めない。更に深く呑み込みたいのだろうが無理である。

頭を上下させる。おのれの一物が行燈の灯りで見えていた。唇の間を出入りする。淫らな顔だが可愛い。女は淫らさがいい顔だ。

お綱は顔を上げ、体を起し、一物を手にしたまま腰にまたがってくる。壺口は濡れ光っていた。尖端を壺口に当てる。音もなく滑り込んでいく。

「あーっ」

と声をあげしがみついて来る。腰がけんめいに動いている。この体を抱いた男は新之助だけだろう。男にはそれほど馴れていない。尻を両手で抱き寄せる。

「神谷さんのでいっぱいです」

と声をあげる。根元まで没し、茂りと茂りが擦れ合っている。

「まだいいんですか、お情けは」

ここでのお情は、情の露、精汁である。

「まだまだ先だな」

新之助はこれくらいで果ててしまうのか。

「おかしくなって来ます」

「おかしくなってよい。おかしくなって当り前だ」

お綱の体を起させる。目の前に二つの乳房があった。その乳房を両手で摑んで揉み上げる。乳首が美しい色でつっ立っている。

その乳首を摘んでひねる。お綱の顔がゆがんでいた。体は反り返っている。顔はあお向けにして白い咽首を見せていた。

十兵衛は体を起した。お綱はしきりに腰をくねらせる。しなやかな体だ。そのまま両肩を布団につけさせる。お綱の肌が目の前に広がって見える。

腹が白く見える。可愛い臍があった。体が重なり合った部分に、茂りが十兵衛のともつれ合っている。美しい女の体はどこから見てもとてもきれいだ。

お綱の腰は十兵衛の膝の上にあった。肌をさらしても、いやだ、とは言わなかった。気分が淫らになっている。感じて来れば、どのようにも淫らになれる。淫らになりたがるものだ。

やはり美しい女は淫らにならなければならない。体をつないだまま、膝を外してやる。気が布団の上に落ちた。体を前に倒していくとお綱は声をあげてしがみついてくる。

布団を十兵衛の背にたぐり上げる。やはり寒いのだ。腰を回す、しゃくりあげる。

「あーっ」

と哀しげな、せつなそうな声をあげる。

「子ができる」

と声をあげた。もう一度、

「子ができる」

と声をあげ、一気に絶頂に達していく。そして失神したようにぐったりとなる。十兵衛が、大きく出し入れしてやると、また、わっと声をあげてしがみついて来る。

女は絶頂に達するとき、子ができるのだと思うことがある。もちろん、お綱はおのれの歓喜

よりも、十兵衛の種をもらうのが目的なのだ。おのれの快感のために抱かれているのだとは思えない。

「どうして、こんなに」

と声をあげながら、お綱は次々に達していく。次々に気がいくのが信じられないのかもしれない。

「もうもう、かんにんして」

と言いながら狂う。しがみついて来て、体を震わせる。体がよくしなる。

「果てる」

と言った。お綱ははいと言った。したたかに放出する。悲鳴を上げた。十兵衛の一物は女の壺に馴れている。だから、自分で調節できるのだ。

一物は萎縮していく。紙を手にして体を放す。はざまに紙を当てる。紙に精汁を吸わせるという考えではなく。流れ出るものをふさぐという思いである。

お綱は十兵衛の股間に吸いついて来て、一物を吸い取る。本能的に一物を口にしたいのだ。おのれを狂わせてくれた一物である。一物がいとしいのだ。萎えた一物をしゃぶる。

3

村長の家を出た。村の若者が三人ついた。そのあとに十兵衛以下がつくのだ。柴山丹後は山に入る仕度をしていた。

柴山は、昨日から十兵衛と目を合わそうとしない。

十兵衛の前に若者が一人立った。

「新之助でございます。昨夜はお世話になりました」

と言った。お綱の亭主なのだ。品のいい男だ。

「そうか、種が結べばいいがな」

そうか、この男か、と思う。お綱は、こんなによかったのははじめてだと言った。新之助は女も少いのだろう。それに若いから、おのれの思うままお綱を抱くのだろう。

十兵衛を知ったお綱は、これから新之助ではもの足りなくなるのではないか、とよけいなことまで考えてしまう。

山に向って歩き出す。道は谷間についている。左右に山を見ながら坂を上っていく。道は山道になる。

息を切らせはじめたのは柴山だった。次に伝七郎だ。さすがに比賀志は山に馴れていて足も

強い。

三人の若者は、さすがに山の歩き方には馴れていた。この道はまっすぐに行けば峠を越え、いくつかの山を越えて若狭に出るようだ。

まだ、肌にはお綱の肌が触れているようだ。昨夜はお綱を抱いて眠った。だから、寝不足である。

道から左手の道に入った。そこから山は急な坂になる。七人は縦に一列になる。しんがりは柴山だった。伝七郎と二人は遅れて歩く。足がついていかないのだ。

昼すぎには、頂上近くまで来た。そこで一休みする。柴山と伝七郎は坐り込んだ。

「石川さん、あんたの親分は凄い人だな。剣にも強いが、それだけではないな」

上七軒での浪人の斬り方も見ている。昨夜は村長の娘を抱いたであろうことはわかっていた。

もちろん、伝七郎は、十兵衛が将軍家光を討とうとしていることは喋れない。そこいらの浪人ではないのだ。

「わしもこれまで、さまざまな人に会って来たが、神谷さんほどの人ははじめてだ。遅れて来て、帰れ、と言われたときは怖ろしかった」

柴山に比べれば、五つか六つ年下である。十兵衛と対峙して気絶したのもはじめてだったのだ。

「浪人もぴんからきりまであるものだ。特にあの目つきが凄い。あの目で、よく女が近づくも

のだ。石川さんが女にもてるのはわかるが、神谷さんがね」

「女が酔うのは、あの目だろうな。冷めた、あの目に女は体の芯が痺れるのだろうな」

「体の芯か、わかるような気がする。わしも刀を抜けば誰にも負けんと思うていたが、あっさりあしらわれた」

若者三人が腰に下げている竹に入っていた水を呑む。水が湧き出ているところがあれば、竹筒に水を入れる。若者たちにとっては、この山はよく知っているのだ、と言っても山の奥は深い。

道もない山を歩く。この山からも木は伐り出されるのだろう。あちこちに切株がある。かなり歩いて、ぱっと視界が開けた。

「山賊の巣はあそこです」

と新之助が指をさした。

遠くに家らしきものが見える。その家から煙が立ち昇っている。

「なるほど、あれか」

あんなところに家があるとは。屋根は三棟あるようだ。もちろん、屋根は茅ぶきである。

「むかしは村だったのかな」

「いいえ、大工を連れて来て作らせたようです。あたりの木を伐り取って。近くまで行ったことがありますが、丸太造りのわりに立派な家ですよ」

「焼くにはもったいないかな」
「焼くのですか」
「焼かなければ、また賊が集まってくる」
家のそばには谷川が流れている。食糧さえあれば、暮すにはいいところのようだ。
「賊があそこに来て、巣を作ったのは、いつごろなのかな」
「もう十年になるとか、聞いておりますが」
巣までは道がついているようだ。山賊たちも、この道を利用しているのか。
「新之助、おまえたちは、ここから村に帰ってくれ」
「いいえ、見物させていただきます」
「村長に知らせなければなりません。山賊が討たれれば、わたしたちの村は、安心して暮せます」
「そうか、ならばみつからないように隠れていろ」
十兵衛が先に立った。そのあとに比賀志、伝七郎、柴山と続く。三人の若者はあとからついて来る。
細い曲りくねった道を降りていく。一丁ほどのところに近づいて足を止めた。
「物見は出ていないようだ。こんな山奥まで物好きがやって来るとは思うまい。はじめは刀を抜くな、賊の刃物を奪い取る。それで殺す。そして、わしが賊たちを集める。わしを囲む。そこで外側から斬り込んでくれ」
「それでは、神谷さんが危い」
比賀志が言った。目的はここではない。ここで斬り死にするわけにはいかないのだ。比賀志はそれを言っているのだ。
「わしには八重垣がある。囲ませたほうが斬りやすい。わしに気をとられている賊たちは斬りやすかろう」
八重垣を教えてくれたのも小野忠明である。囲ませれば、何百人でも相手にできる。いかに数多くいても、一度には斬りかかれない。斬りかかれるのは四人だけである。
四人斬って、次の四人を斬る。更に四人を斬れば、十兵衛の周りは死体だらけになって敵は斬り込めなくなる。
はじめの四人を斬れる術があれば、何百人いようと怖れるに足りず、と小野忠明は言った。
それが柳生流の八重垣であったのだ。柳生一門の中でも、まともにこの八重垣を使える者はいない。頭の中でわかっていても、十人に囲まれると動けなくなる。
術というのは頭でわかっていても、実際に使えなければ、何の意味もない。
「わしの殺し方を見ていてくれ、はじめは声をあげさせないように殺す」
三人の顔を見た。柴山は目を伏せた。まるで女のようにだ。十兵衛は坂を駆け降りはじめた。下り坂は歩くよりも走ったほうが楽なのだ。

一気に走り降りる。後の三人は遅れた。それにはかまわない。

山賊の巣は三棟の家になっている。その前には広場があった。十兵衛は広場の端に立って、下げ緒を解いた。それを両手に巻く。

賊が一人出て来た。十兵衛を見たが、おや？　という顔をした。十兵衛は走った。逃げようとする賊の首に緒を巻きつけた。

それを十兵衛は、くるりと背を向け、背負った。賊は声も出せない。そのまま背負って家の端に走り込む。そのときには賊は死んでいた。

寒いので、賊は家の中にこもっているのだろう。また一人が出て来た。その背後に忍び寄る。首に緒を掛ける。掛けたとたんに背を向けて背中にかつぐ。

これを地蔵かつぎという。声もあげずに簡単に死んでしまう。二人目の腰の刀を抜いた。もう一本を差していた。脇指ではなく、鎧通しのようだ。

左手に刀を持ち右手に鎧通しを持つ。むこうから三人の賊がやってくる。十兵衛は走った。

三人がギョッとして十兵衛を見る。

先頭の賊に鎧通しを投げた。ストンと賊の腹のあたりに深々と刺さる。刀を右手に持ち直す。

二人の賊はどうしていいのかわからない。声もあげられないのだ。

走り寄りざま、刀を薙いだ。二人目を雁金に斬る。びっくりすると人は声も出ないものだ。

一息ついた。賊の首がゆっくりと傾き、転り落ちた。血が音をたてて噴き出す。

まだ、賊たちは気付いていない。賊の腹に突き刺さった鎧通しを引き抜く。その者はまだ生きていた。

「どうせ、もう助からんな」

鎧通しで賊の咽を裂いてやった。咽の肉が白くめくれ返る。一呼吸あって、血がゴボゴボと音をたて、泡になって出て来る。

そのとき、

「キャーッ」

と女が悲鳴を上げた。

その声に何人かの賊が家から出て来る。その賊たちにはまだ何が起っているのかわからない。

五人ほどがいた。その五人の首筋を、鎧通しで薙いでいく。むこうの家から賊が出ていく。

十兵衛は賊たちに向って走る。

この賊たちもびっくりしているだけだ。予想もしないことが起っているのだ。その一人に鎧通しを投げた。

狙い通りに左胸に突き立った。十兵衛は走る。下から垂直に斬りあげる。右腕が肩から切り放されて跳ぶ。

振り上げた刀を次の賊に向って雁金に斬り下げる。刀柄に手をかけるのに、その手首を斬り落す。

その刀を水平にして賊の腿を薙ぐ。右足が腿から切り放され転がる。休む暇はなかった。息もつかずに斬る。

常に移動している。同じところにはいない。だが、斬るときには足は地に着き、腰はすえられている。

無造作に斬っているように見えるが、足を浮かしては斬っていない。足を地につき、腰を据えているから斬れる。

跳躍剣などという。跳び上って斬る。斬っても傷は浅い。地面から足を浮かしては、刃は肌を撫でるだけである。

ついでに言っておけば、厳流島での宮本武蔵と佐々木小次郎の立ち合いでは、小次郎が燕返しに対して武蔵は跳び上って小次郎の額を打つ。

これは斬るのではなく打つ。だから武蔵は刀を抜かないで櫂で打つ。打つだけならば刀より木刀のほうが効果がある。

刀を抜いていたら、武蔵が負けていたろう。小次郎の燕返しを予想して櫂を手にした。その一撃で小次郎は死んだわけではなかった。頭を割られてもまだ生きていた。だから、武蔵は倒れた小次郎に近づかなかった。

足を浮かしては、斬れないし打てない。たとえ斬れても傷は浅い。皮を削ぐくらいのものだろう。

移動するにも足は浮かない。擦り足である。足を擦って右往左往する。ようやく賊もおっ取り刀で出て来て刀を抜く。

先頭の賊に刀を投げる。刀は賊の胸を貫く。広場の中央に走りながら、はじめておのれの刀を抜いた。

4

十兵衛は、賊たちに囲むにまかせた。囲んだとき、二間より中には入れない。間合いに入るからだ。

丸く囲んでも半径二間、直径四間になる。直径四間に並べるのは八人である。それ以上は、腕が触れて動けない。

一人が斬り込んで来た。十兵衛は一歩前に出る。あわてて目を剝く。だが、急には刀は振り降せない。

十兵衛は、腹を薙いだ。腹の上部である。肝臓を裂いた。肝臓を裂かれれば二呼吸で死ぬ。その賊は後から斬って出ようとしていた賊に抱きつく。

肝臓を裂かれ、血が噴き出す。下半身が醤油樽につかったようになる。ぶるると震えた。血の生ぬるさは気持の悪いものである。

十兵衛は転がった。二人の賊の向う脛を裂いた。

「ギャアーッ」

叫び、膝を抱いて転げ回る。狂うほどの痛さである。振り向きざまに、賊の首を薙いだ。薙がれた瞬間は、本人も左右にいる者もわからない。

首が傾き血を噴きながら転げ落ちる。血が四方に散る。三人がその血を浴びることになる。比賀志、伝七郎、柴山の三人が走り出してくるのが見えた。十兵衛は前方に進む。賊は思わず刀を振り上げる。刀を振り上げるのは本能である。

刀を薙いだ。刀柄を握った両腕が足もとに落ちる。賊はそのまま抱きついて来ようとする。

「ギャーッ」

と声をあげた。落ちたおのれの刀を足で踏んづけたのだ。足を抱くにも腕がない。その賊の尻を蹴った。賊はそのまま走って仲間に抱きつく。

ギャーッ、ワーッ、と声が上る。

向う脛を裂かれた賊二人は、痛みに耐えきれず、失神していた。

仲間の死体が足もとにあって、賊たちは動けない。跳ぼうとすれば、地に落ちたときに斬られている。

外側でも、賊たちが叫びを上げていた。賊たちは、一人二人、五人六人と斬られていく。

「どけ、どけ」

と大男が賊を押しのけて出て来る。六尺の大男で、まさに鬼だった。手には重くて長い刀を握っていた。二尺六寸ほどで並の者には、振り回せない刀だ。

「うぬは何者だ。わしの手下を大根のように斬りやがって」

「おまえが頭か。わしは神谷兵庫、山賊退治に来た」

「わしだけではないぞ、むこうを見ていろ、わしの仲間がおまえの手下を斬っている」

頭が首を回した。十兵衛は間を詰めていて腹を薙いだ。腹は丸く突き出ていたのだ。

「わっ」

と声をあげて、おのれの腹を見た。何でもないように見えた。まず裂けた布が開いた。それからじんわりと腹の肉がめくれていく。その肉は白くはない。黄色い粒々が無数にある。これは脂だ。

頭は目を剝いていた。肉がゆっくり開いてその奥の腸が顔を覗かせた。まるで白蛇のようににじり出てくる。頭は目を剝いておのれの腹を見ている。

「おのれ」

と叫んで、刀を振り上げた。その腕を掬い上げるようにして肩から斬り放した。刀を摑んだ腕が転げ落ちて来た。

その腕を摑んで振り向きざまに投げる。

「ギャーッ」

と叫んだ。刃が賊の首筋を裂いていた。一人が毛むくじゃらの腕を抱いている。血しぶきが上って、その血を顔や胸に浴びる。

すでに斬り込んで来る者はいなくなっていた。だが、まだ囲んだままである。

頭目は立ったままである。開いた腹の口から、ぞろりと腸が流れ出て来て、その先が地面についた。

「わしを斬るとは、おまえは何者だ。神か鬼か」

「神谷」

「やはり神であったか。神がわしを召すというのであれば、仕方がない。いろいろ悪事を重ねて来たからな。神がわしを罰するのだな。よい、神谷であろうと神であろうと」

腸は流れ出た。驚くほど長い。生白いのが妙に気持が悪い。腕を失った右肩からは血が流れ出している。そのうち、血を失って死ぬのだろう。

「おい、神よ、おまえの手下たちに斬るのを止めさせろ」

「刀を引けっ」

と叫んだ。

「神よ、この村をおまえにやろう。米もある味噌もある。薪もある。川では魚が釣れる。女もいる。この村を焼くな、立派な小舎であろうが、わしが作らせた。この家は、釘の一本も使ってない。こんな家は二度とはできんぞ。金もある。金はわしが隠した。金だけは奪わんでくれ」

よろめいて、ドタリと倒れた。

「お頭」

と子分たちが揃って声をあげた。頭は目を剝いたままだった。手下は五十人ほど残っていた。

妙なことに逃げなかったのだ。刀を鞘に収めた。

「神よ、わしらにお頭と仲間の死体を埋めさせてくれないか。わしらは、神に逆らうつもりはない。弔ってやりたいのだ」

十兵衛の斬り方は、人間技ではなかった。頭目は神だと思ったのだ。

「葬ってやってくれ」

「かたじけない」

と言って賊たちは動き出す。河原に穴を掘りはじめる。道具はあったのだ。もっとも、十兵衛は油断はしていなかった。賊はまだ五十人ほどは残っているのだ。

むこうに女が二十数人立っていた。攫われて来た女たちだろう。たしかに山賊にとっては桃源郷だったのだろう。

赤ン坊を抱いている女もいる。二、三歳の子供もいる。山賊が子供を攫ってくるわけはない。賊の子供を生んだのだ。

「神谷さん、この村を焼くのか」

比賀志が言った。
「どうすればよい。意見を聞かしてくれ」
「だが、この村があっては、この近辺の村々が迷惑することになる。わしは焼き払うべきだと思うな」
柴山は口をきかなかった。少し離れたところにいる。
「あの女たちはどうする」
「もとのところに帰るべきだろうな」
十兵衛は、女たちのほうに歩み寄った。女たちは十兵衛を怖ろしそうに見る。
「この村は焼き払う。あんたたちはどうする」
「わたしはここに住みます。町にもどっても山賊の情女と言われるだけです」
「うちは帰ります。帰して下さい」
ここに残りますという女が半分ほどいた。
「ここにいても仕方があるまい。どうやって食っていく。いまのうちは米はあるようだがな。それがなくなったらどうする。村々に盗みに行くか。田畑があるわけではないし。この村があると、また悪党たちが集まってくる」
「帰れません」
「甘ったれるんではない。女ならばどこでも生きていけよう。この村にあるものをみんなで分

けて、山を降りたほうがよいな」
「鬼」
と女の一人が言った。
この女たちには鬼なのかもしれん。せっかく穏やかに暮しているのに、村を潰しに来たのだ。
「明朝、この村は焼き払う。ものをみんな集めて、山賊と一緒に分けよ。そして落ちていけ」
「せめて、春まで」
「そうはいかん」
「どうして、山賊がいけないのさ、山賊でなくても人は悪いことをしているんだよ。わたしたちは、ただ食っていくだけ盗んで来ているだけなんだよ」
女たちは、よろこんで十兵衛に礼を言うのか、と思ったが、半分はそうではなかった。山賊たちとの暮しに馴れているのだ。山賊だってみんな悪党というわけではない。優しい賊もいるのだろう。
女は暮しに馴れることができる。山賊と暮したほうがよかったのかもしれない。
「あんたたちより山賊のほうがましだよ」
とまた女が叫んだ。二十数人の女は二つに割れた。十数人は一緒に京まで連れていってくれという。あとの半分はここに残るという。残すわけにはいかないのだ。
「あの山賊たち、黙って山を降りていきますかね」

「また襲って来るだろうな」
「神谷さんはそう思いますか」
「頭を弔ったあと、あやつらはわしらをただで放っとくわけはない」
「どうして、あのとき殺しておかなかったんですか」
「頭目が死んだからな。あやつらは、頭目の弔いだけはしてやりたかった。今夜あたり、襲ってくる」
「今日中に静原村にもどるんではなかったんですか」
「ここに泊る。明朝、山を降りる」
十兵衛は、残った五十人が斬りかかってくるのを待っている。

六章　炎上

1

十兵衛ら四人は家を背に立っていた。
賊たちは、仲間の死体を埋めて広場にもどってくる。
「よいか、賊たちが刀を抜いたら、左右に走ってくる。わしは正面から斬り込む。賊たちの力を分散させなければならん」
比賀志たちは頷いた。
女たちも二つに分れていた。一方は親元に帰りたい女たちである。一方は賊と一緒にここに残りたい女たちだ。
賊がここにいては、近辺の村々が迷惑する。そういうことは、十兵衛にはどうでもいいことだった。十兵衛には、そういう正義感はない。

家光の行列を襲うときのことを念頭においていた。加えて、もう一つの術を考えていた。柳生の剣に転というのがある。日光街道の今市でやくざたちを斬った。そしてわかったことがある。転を含めて、剣というのは、すべて惑わかしである。

欺してあざむくことだと知った。あざむきのはじめは龍尾という剣である。上段から斬り下げるとみせて、途中で剣を水平にして水平に薙ぐ。

剣の術というのは、すべてあざむくことであることを知った。人斬りの剣を使いはじめて十年。その辺がやっとわかって来た。

剣術は、相手が思ってみないことをやって効果が出る。相手を欺す術に達すれば極意である。つまり刀は意外なところから出て来ることによって相手を斬れる。

正々堂々の剣などということはないのだ。十兵衛は、敵に囲まれたとき、寝転んで敵の足を薙ぐことからはじめる。

道場剣法には絶対ない術である。あざむくのだから、武士道では卑怯な術ということになる。逆に言えば、斬られても武士ならば卑怯という。斬死しても卑怯である。

武士はそう思わなければならない。剣術とは、武士道から相反するところにあるのだ。武士は死ななければならない。武芸者は生きなければならない。それだけの違いがある。

剣術は相手を欺すところからはじまる。欺さなければ相手を斬れないのだ。どうやって相手を欺せるのか。それが術である。人を斬るための術である。

剣には三つの斬り方がある。先の先、後の先、後の後である。先の先は相手が刀を抜く前に斬ることだ。後の先は相手が動き出したところを後から一発して斬ること、後の後は相手に一閃させて斬ること。

これは三つとも欺しである。卑怯な手である。この卑怯をつきとめていくと極意になるのだ。剣では欺されて斬られたほうが悪いのだ。欺しのない剣術は力だけになる。力だけの剣士は術に簡単に負けて死んでしまう。

秘剣とか極意とかいう。いかにも重々しくてむつかしそうである、が結局はどう欺すかでしかない。

欺し方を身につけた者が流祖となる。それを極意と思っているからだ。その極意は人には教えない。教えてしまうとおのれの価値がなくなる。それで一子相伝とかいうことになる。たいしたことでもないのに、それを重々しく価値あるもののように思わせる。

十兵衛の師である小野忠明、その忠明の師伊藤一刀斎が〝斬り覚えよ〟と教えた。剣はこれだけしかないのだ。

龍尾の剣だって、相手に読まれてしまえばおのれが斬られてしまう。上段から斬り込む。龍尾を使うな、と思えば、相手の剣尖を見切る。すると相手は隙だらけだ。どこからでも斬れる。

いかなる秘伝も相手に読まれたとき、秘伝ではなくなる。十兵衛は小野家の風呂炊きの弥助に、龍尾であっさり腹を打たれた。そのときには龍尾を知らなかったのだ。知ってしまえば、

二度と打たれることはない。

だが、真剣勝負では、二度と打たれることはない、という言い方はできない。一度、腹を裂かれると、それで命は終りである。

十兵衛は弥助に欺されたのだ。欺されたおのれが悪いのだ。弥助が木刀だったから、助かったようなものだ。

あのとき十兵衛はゾクリとした。目を剝いた。柳生新陰流の極意を得ている十兵衛が、風呂炊きに打たれたのだ。

そのときに龍尾という欺し技を見た。はじめて知った。そのことが頭の中に入った。武芸者は、それぞれに欺しの術を持っているわけだ。

欺しの術に嵌ってしまえば、そこで命を失うことになる。命を失わないためにはどうしたらいいのか。それが剣術である。

十兵衛は拍子に乗って山賊たちを斬っていた。拍子斬りというのがある。拍子で斬れば首も簡単に斬れる。腰車にも斬れる。そして、敵の頭の鉢を皿のようにも斬れるのだ。

踊るように斬る。足の運び、腰の据わり方、腕と刀の移動に無駄がなかった。もちろん神経は張り詰めている。

一人を斬りながら、その次の者をどのように斬るかを頭の中に入れている。だから流れるように、よどみなく斬れるのだ。

拍子に乗って斬っている間はいい。だが、どこかで拍子が狂ってしまったらどうなるのか、それを思ってゾーッと寒気が走った。

拍子が狂えば、腰も足も、腕も刀もバラバラになってしまう。すると、賊たちに斬り刻まれることになるのだ。

拍子に乗りすぎると、どこかでつまずくことになる。つまずいたときにどうすればよいかは考えていなかった。

もちろん、拍子に乗って斬ると、疲れもしない。面白いように斬れる。だが一度つまずくとそれまでだ。

この山賊たちに教えられたような気がする。伊藤一刀斎の言った〝斬り覚えよ〟というのは、こういうことだったのか、と思い至った。まだまだ剣は深い。

目の前に、仲間の死体を埋めた賊たちが集まって来た。五十余人いる。女がわめいた。

「この四人を斬っておくれ。たった四人じゃないか。こいつらは悪いやつらだよ。穏やかに暮しているのに、この村を焼き払おうとしている。この村をここまで造るのに、どれほど苦労したことか。悪党は殺しておくれ」

たしかに十兵衛たちは悪党である。なにも村々を救うために山賊退治に来たわけではない。山賊だって生きる権利がある、と言っているのだ。

「相手はたった四人だよ、多くの人を殺して来たあんたたちに、どうしてこの四人を殺せないんだよ。こいつらに殺された仲間の仇を討っておくれ。まさか逃げようというのではないだろうね」

女は高い声で叫ぶ。

「どうする、このまま落ちていくのか、わしらに挑んで来るのか。落ちていくのであれば斬らん。女たちも一緒に連れていけ」

十兵衛が言った。

女の一人が、脇指を抜いて走ってくる。十兵衛を突くつもりだ。比賀志が女の前に立った。上段から斬り下げた。

女は、ふらふらと二、三歩歩きバタリと倒れた。

正面の賊が刀を抜いた。

「お清にあれほど言われて、逃げるわけにはいかんな。わしはここで死ぬ」

「おおう」

と賊たちは声をあげた。比賀志、伝七郎、柴山の三人は左右に散った。賊たちが刀を抜く。そのとき、十兵衛は走っていた。正面の賊を斬り下げた。十兵衛が手にしている刀は、小野忠明にもらった斬馬剣である。長さは二尺四寸、長くはないがよく斬れる。重さで斬れる。この斬馬剣のあつかいにも馴れていた。斬り下げ、そこで刃を止めた。斬りかかってくる賊

の股間を斬り上げた。

逆風の太刀である。賊は股間から腹のあたりまで斬り上げられて体を震わせた。あるいは一物もふぐりも裂いたのかもしれない。

振り上げた刀を、そこで一度止めた。拍子には乗らなかった。間を一拍子遅らせたのだ。足がしっかりと地についている。腰は充分に据えられている。

八双から、袈裟掛けに斬る。刃は首根から入って右脇腹に抜ける。頭と右腕が滑った。そのまま地面に着地するのかと思ったが、両手で刀柄を握っていた。右手首が切断されていなかった。そのためにひっくり返り、斬り口が上を向いた。骨の中に白い肉が見えた。

次が斬り込んでくる。十兵衛は退いた。いつもなら退かずに斬るところだが。賊の剣尖が地面を削った。

賊はあわてて顔を上げる。その顔は怖ろしさにゆがんでいた。十兵衛は刃を薙いだ。刃は賊の腭の下に入った。

刃が首から抜けていく。次の賊が斬り込んで来る。賊の体をその賊に押しつける。首がずり落ち、賊は噴き出した血を頭からかぶった。

「ヒエーッ」

と声をあげた。

首筋に針で刺されたような痛みが走った。とたんに振り向きながら薙いだ。剣尖は刀を振り

あげた胸に入った。

刃は肋骨の間を走る。心臓を裂いた。一呼吸あって血が噴き出した。十兵衛はそこにいなかった。

斬り込んで来た賊が、顔に血を浴びて、うむと声をあげ、体を震わせた。血は目にも入っている。すでに目は見えなくなっている。

目が見えないと怖ろしい。刀をめちゃくちゃに振り回す。その剣尖に仲間が傷つく。それでも、斬られるのがこわいから刃を振る。当ると幸い、という感じだ。

仲間は斬られたくないから退く。その賊の周りには誰もいなくなった。その賊は力尽きて坐り込む。

柳生流には〝月影〟という術がある。柳生一門の中でこの月影を使えるものは誰もいない。漆黒の闇の中での斬り合いだ。

光がないから刃も反射しない。小野忠明は月影とは言わない。だが、刀を抜いて対峙して目を閉じることができるのだ。

十兵衛はまだ月影は未熟だ。だが、四方八方に神経を張っている。その神経に触れてくる物はわかるようになっていた。

つまり後から斬りかかってくるのはわかるのだ。斬り込むときには殺気を発する。それを感じて反応する。

だから、後から斬り込んで来る者も斬れる。目は見開いたままだ。何も見ない。視界が広い。何かを見ようとすれば、そのもの以外は見えなくなる。だから、何も見ない。すると前面の百八十度は見える。

相手の動きに反応する。拍子に乗って斬るのは止めた。拍子に乗ると、もしその拍子が崩れたときに隙だらけになる。それを立て直す前に斬られるだろう。

拍子に乗らずに、無駄な動きを加えた。一人一人をていねいに斬っていく。足を踏んばり、腰を据えて、確実に斬っていく。

柳生流には〝無拍子〟という剣がある。これが無拍子ではないか、と思った。

賊が刀を薙いで来た。薙いで来るのは薙ぐ以前から見えていた。だが、退く余裕はない。受け払えば刀が折れる。

そのときにはどうしたらいいのか。もちろん考えていては間に合わない。自然に体が反応しなければならない。

十兵衛は体を寄せた。寄せる以外にはないのだ。相手が一人であれば跳躍することもできる。すれば足が地面から浮く。

武芸者は、足が地面から放れるのは怖ろしいのだ。体を寄せ、手もとにとび込む。と同時に刀を首筋に当てる。自然に刃は動き、首の皮と血管を裂くことになる。

血が噴く前に突きとばす。賊は後によろめき、血を仲間にばら撒くことになるのだ。血を浴

びると、たいていは戦闘力を失ってしまう。

賊の死体も血も利用して味方にしなければならないのだ。それが剣の極意だろう。斬るだけが剣術ではない。

斬れば相手は倒れる。それが楯になる。人は血を浴びると、動けなくなる。できるだけ血を流させるように斬る。

気がつくと周りに賊がいなくなった。むこうで、比賀志、伝七郎、柴山が賊たちと斬り合っている。

何人逃げたのかはわからない。だが、それほど逃げた様子はない。ほとんど斬ったようだ。倒れた賊をざっと数える。四十人以上はいるようだ。

どうして逃げなかったのか。山賊の意地だったのか。先に五十人の賊が斬られた。その仇を討ちたくなったのか。

「なぜ、わしらをこのように斬る」

足もとで声がした。賊が腹を押えて坐り込んでいる。腹を裂かれたのだ。腹から腸がにじり出てくる。

体の中にあるものを失いたくないのだ。腸が出ていくのは何か悲しい。だから腹の中にもどそうとする。あるいは出さないように手で押える。

十兵衛は、その浪人の前に坐り込んだ。賊は三十五、六だった。筋肉質の体つきをしている。

「悪事を働くのはけっこう。こういう時代だ。だが、悪事を働くには殺されても文句は言えない立場にある。悪事と死は一枚の紙の表と裏だ。それがわかっていれば悪事を働くがよい。生き残るには悪事を働くしかない。わかっていようが」

「そうは言うが、貴公は何のためにわれわれを斬る。弱きを助ける正義漢か」

「そうではない。わしは武芸者だ。おまえたち山賊は斬ってもよい者たちだ。だから斬っている。好きで斬っている」

「妙な男だな。弱い者を助けるためではないのか」

「この世では弱い者は生きてはいけん。弱肉強食だ。だが、弱い者も策があれば生きていける。おまえたちは強い者だった。だが、強い者にも更に強い者がいる。わしから見ればおまえたちは弱い者だな。弱い者が生きていくには逃げるしかない」

「ふむっ」

「仲間の五十人が死んだ。どうして逃げなかった。仲間を弔う、冗談ではないぞ。弔う余裕などおまえたちにはなかったはずだ。わしは仲間を弔うのを許した。弔ったあとは逃げるべきだった。弔い合戦など力のある者がやるものだ。おまえたちは弱い。みてみろ、わし一人にこのように斬られたではないか」

「わしらにも意地がある」

「ならば、意地で成仏しろ。さんざん悪事を働いて来たのであろうが、死んでも納得できるだ

ろう。仲間のために死ぬ。意地で死ぬ。これはいいことだ。悪いことではない」

十兵衛は立ち上った。そこに伝七郎ら三人がやって来た。伝七郎と柴山が傷ついていた。たいした傷ではない。

袖にはたもとぐそというのがたまる。これを傷口に押さえ、布で巻く。

女たちは、首領が隠したという金を探していた。この村を放れるには金が要るのだ。二十数人の女たちは、首領がいた所や、家の裏あたりをけんめいに探す。宝探しである。

「あった」

と声がした。

十兵衛もその声のほうに走る。金は床下に埋めてあった。金を床板の上に並べる。千数百両はあった。

女たちは十兵衛の顔を見る。

「女は何人いる」

「二十二人」

「ならば、二十二等分しろ」

女たちが、金を分ける。十兵衛たちはそれを見ていた。

「争いはなしだ。一山ずつ取れ」

「お武家さんたちは」

「わしらはいらん。その金を持って山を降りろ。この三軒の家は焼き払う。賊がここに住みつくようになってはいかんからな」

だが、山賊がなくなるわけはない。また別の賊がここに村を作るかもしれないのだ。

十兵衛は、村の家に火をつけて回った。これだけのものをもったいない、という気はした。村を焼き払えば、新しく山賊が巣を作るには、何年かかることになる。

家は燃え上る。女たちも、十兵衛たちもこれを見ていた。

山で見ていた静原村の若者たちが降りて来た。死体をこの家の中に投げ入れて焼いてやりたかったが、その手間をかけることはない。死体は風雨にさらされ、やがて白骨になることだろう。

2

女十人と十兵衛たちが、静原村にもどって来た。他の女十二人は、あちこちに散っていった。若者が村に走った。

だから、村では全員で十兵衛たちを迎えた。大歓迎である。これで村は何年かは安心して生きていけるのだ。

すでにこのときには、村は暗くなっていた。明日は、京にもどることになる。京にもどらな

い女もいる。それぞれに親のいる所があるのだ。
女たちは炊き出しをやり、釜風呂に水を入れて焚く。女たちもそれほどに汚れているわけではない。山賊と一緒にいても風呂には入っていた。
十兵衛はお綱の部屋にいた。もう一度、種馬にならなければならないのだ。
「お疲れでございました」
とお綱は手をつく。たしかに疲れてはいる。だが、二十九歳だ。体力はある。
「父も、よろこんでいます」
もちろん、この村のために山賊退治をやったのではない、とは言わなかった。酒膳が運ばれて来た。お綱が酌をする。
「たくさんの山賊をお斬りになった、と聞きましたが」
「山賊のほとんどを四人で斬った。山賊も逃げればよかったのだろうが、逃げなかった。斬るより仕方がなかった」
「どうして、逃げずに斬られたのでしょう」
「山賊の意地、と言っていた。意地など張ってはつまらんな」
「どうして百人も斬れたのですか」
「わしは武芸者だからな」
「神谷さまの子が欲しい。神谷さまのように強くなって欲しい」

「生まれつきの武芸者というのはいない。修業しなければな」
浴衣の上に綿入れを着ていた。十兵衛も同じだ。
「神谷さまにはお子は」
「一人いる。いや、もしかしたら、あちこちにいるのかもしれないな」
小野忠明の娘お冴を思い出した。お冴は十兵衛の子を生んだ。女の子だった。
「そういう方たちが羨しい」
お綱は体を寄せて来た。腰を抱き寄せる。衿を開いて、そこから手を入れ、乳房を手に包み込んだ。人を斬って気が荒らぶれている。この気持を静めるには、女の肌に触れるのが最も効果がある。
前をめくって腿に触れる。そして撫でまわす。快いのだ。お綱は自分から夜具に入った。十兵衛はお綱のそばに滑り込む。お綱が抱きついて来る。
腰のあたりを抱き寄せる。よくしなる体だ。細腰から腰、尻を撫でる。体のまろやかさが手に快い。
山賊を何人斬ったのか、七十人ほどか。気持は荒ぶっている。二、三十人斬れば、山賊は逃げ出すと思っていた。だが、山賊は意外に向って来たのだ。充分すぎるほど斬った。
はじめは拍子に乗って斬っていた。たしかに流れるように、踊るように斬る。途中でふと斬り方を変えた。

拍子に乗って斬っていると、拍子が違ったときに危い。そう考えた。相手が山賊だ。拍子に乗って斬ってもよいだろう。息もつかずに十人ほどを斬る。息をして、またおのれを拍子に乗せる。

拍子に乗せるということは、刀が動くままにということでもある。賊を斬る。刀が移動する。その刀に身をまかせる。無理に引きもどそうとすれば、それだけよけいに力も使うことになる。それで、刀の流れた方向に体を移すことになる。

拍子に乗ると、体の動きが止まらなくなる。あのように人を軽く斬ってはならない。結局、いつかは拍子が狂っておのれが斬られることになる。

あと十日あまりで、二十代は終ることになる。三十になれば三十代の刀術を使わなければならない。

剣術というのは、年齢によって変えていかなければならない。三十になれば、三十の斬り方がある。若さにまかせて斬るべきではない。

小野忠明にそう言われそうな気がする。人を斬るにも、もっとていねいに斬るべきだろう。息をしないで二十人は斬れる。これは無息である。二十人を斬ったあとで息をしなければならない。肺に空気を入れる。そのときに、隙が生ずる。

少しずつ息をしながら、ていねいに斬る。つまり拍子に乗らないこと。これが無拍子である。三十になれば、もう若くはない。若いというのは、十五、六歳のことを言う。剣士だけでな

く、三十五歳が盛りである。盛りがすぎれば衰えていくだけだ。

そこに二十代の剣と三十代の剣の違いが出てくる。盛りまであと五年、そのあとの剣をどうするかである。

体が違ってくる。二十代と三十代では、動きからして差が生じる。その差を埋めるには技術しかない。

十兵衛は体を起し、仰向けになったお綱の内腿に手を這わしていた。そっと撫で、その感触をたのしむのだ。一物はすでに怒張している。

だが、それを耐える。怒張しているから壺の中に入りたいというのではない。乳房を揉むのもいいが、内腿に触るのもいい。

このところ、女の内腿の感触にこだわってみたいと思っている。内腿の感触も女によって異るのだ。

「あーっ」

とお綱がせつなげな声をあげ、腰をひねった。腿を閉じようとする。閉じて股間を締めつけたいのだ。

はざまに手が届いた。手を上下に撫でる。丘には申しわけ程度に茂りがある。そこまで手を這わせる。

上下に撫でながら、指を折った。指が切れ込みの中に滑り込む。

「あっ」

と声をあげて腰をくねらせる。切れ込みの中は、指が滑るほどに潤んでいた。切れ込みの上半分は潤んでいない。そこに潤みを運ぶ。指が肉の芽に触れた。

「あっ」

と声をあげて、腿を大きく開き、そして閉じる。せつなくなっているのだ。お綱は手を男の股間にのばして来た。

一物を手にする。また、声をあげた。そしてしっかりと握る。それをはじき返す弾力があった。その感触に女は痺れるのだ。

お綱は体を起した。男の股間に顔を埋めてくる。唇を尖端に押しつけてくる。しばらくそのままでいた。舌で唇を濡らし、唇を尖端に這わせる。唇が乾くとまた舌で舐め濡らす。

女が一物を咥えるのを口取りという。女の口取りの方法はさまざまだ。女の癖というものがある。

唇を這わせて尖端だけ口に咥えた。そして舌を躍らせる。口を放して舌をのばし、改めて舌で舐めまわす。

胴と頭の間に舌を這わせる。女自身ではわからない。男にそうしろと教えられたのだろう。裏の縫目に舌を這わせる。鈴口を舌でなぞる。

それから深く呑み込んでくるのだ。半分ほどのところで咽につっかえる。咽で一物を味あう

のだ。顔を左右に振る。一物を口にすることによって女はおのれの体を潤ませていくのだ。

七十人も斬ることはなかった。斬りすぎた。二十人も斬れば、賊たちは逃げ出すものと思っていた。

家光の行列が日光街道を行く。行列は、幸手の寺で休息する。その寺で家光を討つつもりだ。寺の境内では行列の侍たちが休んでいく。

十兵衛は、その侍たちを斬ることを考えて、山賊を斬っていた。家光は寺の休息所で休んでいる。そこまで達しなければ、家光は斬れないのだ。

斬りながら前に進む。あるいは家光にたどり着けずに死ぬことになるのかもしれない。これが、家光暗殺の最後の機会だろうと思っている。

斬死するつもりでいる。十年間の無駄をここで取りもどしたかったのだ。こと成らなければ死ぬしかない。

山賊退治は、その前哨戦だったのだ。

臥雲玄蕃、木賊孫十郎、桐生重兵衛、二階堂主水、それに石川伝七郎、比賀志ら風衆百人が斬り込む。

これで家光は討てるはずである。山賊退治は、その前哨戦になったのか。家光の行列には、それなりの備えがあるだろう。山賊とは異る。

お綱が一物を手にして、体を起した。またがって来るつもりなのだ。それを押しとどめてお

いて、そこに四ツに這わせた。

尻のほうへ回る。白い尻を撫で回す。小さいが、美しい尻である。尻の溝から手を入れて前に進め、指をのばす。

そこは切れ込みだった。切れ込みの中にぬめるほどに潤んでいた。そこに指を躍らせる。お綱は声をあげ、腰を振った。

十兵衛は腰を進める。一物だけでは壺口はわからない。それで一物を握って指を立て、その指に案内させる。

ようやく尖端を壺口に当てた。腰に力を加えると、つるりと抵抗もなく没入した。お綱が、アーッ、と声をあげ、腰を回す。

両手で体を支えきれず、肘を折り夜具に肩をつく。腰だけが高く掲げられている。一物が埋もれている壺口が見えた。

そこが見えているということには、女は気がつかない。ゆっくりと出し入れする。もちろん、壺口は濡れ光っている。それが行燈の灯りで見えていた。

一物を出入りさせる。引き抜くときに一物に絡みついている襞が、壺口から出て来る。

そのままにしておくと、ゆっくりと壺の中にもどっていく。その光景は妖しかった。

没入させて引き抜く。また襞は外に出てくるのだ。お綱はせつながって腰を振り、声をあげる。

十兵衛は膝を揃えてお綱の股間に入れる。そして伏せている体を起き上らせるのだ。うしろ居茶臼、つまり背座位である。

「あっ、恥ずかしい」

と声をあげる。腰をくねらせれば一物が抜ける。それで動けない。それがかえってせつないのだ。

股は大きく拡げられている。前方からは一物を迎えた壺が見える。女にとっては最も恥ずかしい姿勢かもしれない。だが、その気になってくれば、男が思っているほど恥ずかしくもないし、恥ずかしくてももっと淫らになりたがっている。

「ああーっ、どうしたらいいんですか」

一物の尖端は、壺の天井に当っているはずである。それが快いのだ、と男は思う。女ではない十兵衛には、その感覚はわからない。

手を前にのばした。そしておのれの一物に触れる。壺口は一物によって拡げられている。その淵をなぞる。その上に肉の芽がある。

指が芽に触れた。

「あっ」

と声をあげ、思わず腰を振った。とたんに一物が抜けた。

「いやん」

と声をあげ、一物を摘んで壺に入れようとする。が入らない。お綱はくるりと体を回して、十兵衛の膝に跨がって来て、壺の中に一物を誘い込んだ。しがみついて来て、

「いやです、いやです」

と口走りながら、腰を回す。ただ種をいただくだけではなく、遊び方を知っている。狂うこともできるのだ。あるいは十兵衛が狂わせているのかもしれない。

女は、男によって狂うことができるのかもしれない。亭主を新之助という。十兵衛たちを山に案内した男である。新之助はお綱の体をこのようにはあつかえないだろう。

「気をやりたい」

と言って腰を回す。両足は十兵衛の胴に巻きついている。

そのまま、お綱の背中を布団に押しつける。とたんに、

「いきます」

と叫ぶような声をあげて、はずまを押しつけ悶え狂う。

3

翌日——

十人の女たちは、それぞれに旅姿になり、村長の家を出て行った。どこから山賊たちに攫われて来たのかは聞かなかった。おのれの家にもどるのだろう。

十兵衛たちは、村長・義右衛門たちに見送られて静原村を出て山を降りていく。そのまま北野・上七軒までもどって来た。伝七郎と柴山はおのれの住まいにもどった。十兵衛は比賀志を連れて住まいに入った。

お留が、お帰りなさいませ、と言った。居間に落ちつく。火鉢には炭火が入っていた。

「お酒の用意をしましょうか」

とお留が言う。そうしてくれ、と言った。鉄びんの湯に銚子を沈める。それから酒膳の用意をする。

「神谷さんの斬り方を見ていました。凄いものですね。あのような斬り方をする剣士は見たことがありません」

「少し調子に乗って斬りすぎた。人をあのように斬るものではない」

「たしかに、あれでは、斬られるほうが憐れです」

「たしかに、比賀志さんの言う通りだ。あのようには斬ってはならんな。どこかで調子が乱れる。乱れるときが終りだ」

「まるで、山賊たちは藁人形のようでした」

斬り回し、ということがある。藁人形でも竹でもよい。四方八方に立てておいて、一本ずつを斬っていく。流れるように斬っていかなければならない。

足の運び、腰のすわり方を馴らす斬り方である。竹でも藁人形でも、足と腰が決っていなければ切れないのだ。

お留が酒膳を運んで来た。銚子を湯から上げる。手酌で呑む。比賀志の盃にも酒を注いでやる。

酒をのむ。

「竹とは違いますからね、あのようには斬れないものです。山に入って鍛練はしていますがね」

もちろん、拍子斬りはなかなかできないものである。相手は竹や藁人形ではないのだ。

「柴山丹後を仲間に入れるつもりですか」

「無理だろうな、信用できん」

「何か、神谷さんを怖れていましたね。近づこうとはしませんでしたね」

「浪人暮しが長いと、あのようになる」

「けっこう賊を斬っていました。かなり使うようですね。わしなど及ばんかもしれません。神谷さんのことを、どういう人だとしきりに気にしていましたのに。若いのによくできると」

十兵衛は笑った。たしかに柴山から見れば若いのだろうが、

「若くはない。もう何日かしたら、三十になる」

「そうでしたね。年が明ければ、わしも一つ年をとる」

「比賀志さんは、奥さん、お子さんがいるのだろうに」

「いますよ。だけどこれが仕事でしてね。そのために禄をもらっている。家内も子供も何とか生きている」

と言われると、お冴のことを思い出す。お冴は阿部豊後守忠秋の屋敷に飼い殺しになっている。人質に取られないように、と言うが、ほんとは阿部忠秋に人質にとられているのかもしれない。

忠長が身代りを自刃させて生かしたのは忠秋だった。忠秋は将軍家光を亡きものにして忠長を将軍にしたい。だが、忠長は将軍になるうつわではない。そのことに気付きはじめたようだ。もちろん、もう少し切れる男であれば謀叛を起していた。おのれが徳川家でどういう立場にいるか、全くわからない男だった。

紀州の頼宣が忠長であれば、十兵衛が動くまでもなく、九州の大名たちとはかって、蜂起していたはずだ。家光では、徳川家が危いと思っていた一人だ。

頼宣は神道派である。気性は激しかった。徳川家のためには頼宣を将軍にしたほうがよかったのかもしれない。

家光も暗愚だが、忠長はそれに輪をかけた馬鹿だと言っていた。父秀忠も、この忠長を好きではなかった。

将軍家の子は、たいていが生母は育てない。乳母が育てる。生母とは放されるのだ。それな

のに生母江与の方に育てられた。

せいいっぱいに甘やかされて。甘やかされると、自分の考えというのがなくなる。それより前に、家康は、信長の血を受けている江与が好きではなかった。

誰も知らないが、信長を本能寺に暗殺したのは家康だった。お江与の生んだ忠長にも信長の血が流れている。

だから、忠長を将軍にはしなかった。血筋から言えば、三代将軍は忠長だったのだ。忠長の血は断たねばならなかった。

雛菊がやって来た。

「神谷はん、どないしやはったんどす」

と抱きつかんばかりだ。

「ちょっと旅に出ていた」

「いやどすえ、そう言うてくれはったらよろしかったのに」

「わかった、わかった。今夜は雛菊のところに行こう」

「ほんまどすな」

「比賀志さん、ゆっくりしていてくれ」

と言って立ち上った。

「いい男だと、忙しいですな」

と比賀志は皮肉を言った。

雛菊と一緒に住まいを出た。

「いい男はいたか」

と雛菊の尻を撫であげる。

「いやどすえ」

とぶつ真似をする。

上七軒の通りを歩く。むこうから三人の浪人が歩いてくる。目つきは十兵衛を狙っている。いくらかはできるのだろう。

芸妓連れの浪人なら、金を持っている、と思ったのだ。四十歳ばかりの肩の張った男だ。後にいるのは仲間か兄弟か、獰猛そうな顔をしている。

「なるほど、近寄って見ればよい男だ。女が惚れるか、わかるわかる」

どうやら十兵衛のことは知らないようだ。

「何か用か」

「酒を呑みたい。色男、金を出してくれ。ついでに、その女もいただきたいな。いい女だ。うまそうだ」

「放れていろ」

と雛菊に言った。

「金はやる」
と言って十兵衛は、ふところから財布を出して三尺ほどのところに投げた。
「呉れてやる、取れ。二十両ほどは入っている」
浪人は、財布と十兵衛を見る。
「拾え」
「うむっ」
唸った。おそらく財布を手にする前に斬られるだろう。二十両と聞いて、目を見開いた。
「そこを除け、二間ほどな」
「ただでわしの金を取ろうというのか。少しは働け。ただより高いものはない、と言うぞ」
「わしらをからかっているのか」
浪人は笑った。
左にいた浪人が走った。不意を突かれた。
「ひーっ、いやどすえ」
と雛菊が叫んだ。浪人に捕えられたのだ。なるほど、ただの浪人たちではなかった。もちろん、浪人は悪党だ。
悪党は、雛菊を引きずってもとの位置に立った。後では十兵衛には見えない。その浪人は雛菊の帯を解きはじめた。

「いやどす、神谷はん、助けておくれやす」
「そうか、神谷か、刀を抜いて捨てろ」
浪人が帯を解いて、着物を脱がせる。長襦袢姿になった。
「なるほど、いい女だ。芸妓だけのことはある」
衿を大きく開いた。
「いやどすえ」
と叫ぶ。
胸が大きく開いて、白い肌をさらしていた。両肩まであらわにしている。両腕は動かない。白い二つの乳房があらわになっている。
正面の浪人が刀を抜いた。十兵衛も抜いた。もう一人の浪人は、雛菊の後から抱きついて両手で乳房を摑んでいた。
「神谷はん」
と雛菊は泣きべそをかいている。
「なるほど、いい女だ。これだけじゃすまんな。たのしませてくれそうだな。おい、源兵衛、この女、どこかに連れていって、たっぷり楽しもうぜ」
「孫、待て、この女を手に入れてからだ」
雛菊を抱いている浪人は孫と言うらしい。源兵衛は、剣尖を雛菊の白い肌につきつけた。

「刀を捨てろ、この白い肌を切り裂くぞ」
もう一人の右方の浪人は黙ってつっ立っている。青白い顔をしている病いのようだ。酷薄そうな顔をしている。切れ長の目が細い。ただの悪党ではなかった。
「刀を捨てろ」
「刀を捨てればどうする」
「命だけは助けてやる」
「女も金もか、それはずるいよ」
「この女を殺してもいいのか」
「殺せないな」
「殺せる」
「女は殺すものではない。楽しむものだ」
「何をわかった風なことを言いおって」
「源兵衛、こいつに見せつけてやれ」
孫は、体を沈め、長襦袢の裾を摑んでめくり上げた。
「ヒーッ」
と雛菊が声をあげる。白い肌を尻のあたりまであらわにしていた。こうして眺めるのもいいものだ。白くてむっつり肉をつけている。

雛菊は坐り込みたいが、孫に抱きつかれているので坐れない。
「どうだ、いい眺めであろうが」
「いい眺めだ。こういう形で、肌を見たことはない。きれいだな、惚れ直したぞ」
「神谷はん」
と雛菊は声をあげる。
「わしが相手になろう」
と右にいた浪人が出て来た。
「わしは板坂半兵衛だ。なかなか使いそうだがな、面白い、相手に不足はない」
半兵衛は刀を抜いた。
「ギャーッ」
と叫んだ。胃の腑を震わせるような叫びだった。刀を振り上げ斬り込んで来る。十兵衛は、一歩踏み込み、刃を返して下から掬い上げるように斬り上げた。
半兵衛は斬り下げたつもりだったのだろうが、右腕がなくなっていた。目を剝いた。おのれの腕がどこに行ったか、探すように目玉を動かした。
刀柄を摑んだ右腕は、足もとに落ちていた。
「おのれ」
青い顔が更に青くなる。右肩から血が噴き出す。地に落ちた右腕を拾った。それを投げた。

源兵衛はその腕を斬った。だが、刃は左胸に刺さっていた。
孫は目を剝いた。こんなになろうとは予想もしていなかった。また、刀も抜いていなかった。
両手は雛菊の股間に入っていた。指は壺の中に入っているのかどうか。
「どうする」
「近づくな、この女を殺す」
「殺せ、どうやって殺す」
たいした悪党ではなかった。
「首でも締めるか」
「おのれ」
孫は、雛菊を十兵衛に突きとばした。十兵衛は雛菊を左手で抱き止めた。孫は刀を抜こうと刀柄に手をかけた。
その右手首を斬り落した。
右手はしっかりと刀柄を握っている。そのために、ぶら下らない。
「お、おのれ」
左手で右手首を摑んだ。
「ちくしょう。ただの浪人ではなかったのか」
雛菊は、脱がされた着物を抱いて走った。弥次馬が集まっている。十兵衛は歩いていって、

財布を拾った。財布の中から二両を出して投げた。
「すまんが、この三人の浪人、どこかに運んで捨ててくれないか」
そう言って、孫のそばに立った。
「血止めをすれば、助かる。このまま死んでいったほうが楽かもしれんな」
「た、たのむ、助けてくれ」
血はかなり出ている。助かるかどうかわからん。とにかく、十兵衛は下げ緒を解いて、軽く肘の上に巻きつけ結ぶ、その緒と腕の間に刀の鞘をさし込みひねる。
「ギャッ」
と声をあげて気絶した。その鞘を肩のあたりに結びつけてやる。これで血は止まる。あとは生きるか死ぬか、十兵衛には、どっちでもよかった。
まともでも浪人は生きにくい。右手首を失って、生きていけるかどうかはわからない。後に回って活を入れた。孫は目をさました。顔をゆがめている。痛いのだろう。
「このあたりに外道医はおらんか」
と弥次馬に向かって聞いた。
「そこの角を曲ったところに」
「連れていってくれ。金はわしが払う。わしは神谷兵庫だ」
弥次馬の一人が前に出て来た。

「こんな悪党、どうして助けてやるんです」
「悪党たって、たいした悪党ではない。生きるか死ぬかは、当人次第だな」
と言って歩き出した。
「おい、待て」
と孫が言った。
「何か用か」
と十兵衛はもどって来た。
「わしはもう生きていたくなくなった。首をはねてくれ、たのむ」
「さっきは、助けてくれ、と言ったぞ」
「いまは死んだほうが、楽のような気がする」
孫は坐り込んだ。力が失せたのだろう。
「戸板で運んでくれ、礼はあとでする」
と言って歩き出した。たしかに浪人は、生きるより死んだほうが楽だ。だが、そう簡単に死にきれるものではない。
歩いていると、雛菊が後から追ってくる。そして腕に抱きついた。
「どうして、すぐに助けていただけなかったんどすか」
「裸にされて恥ずかしかったか」

「うちは、そんなにやわではおへん」
「そうか、よかった。雛菊を目でたのしんでいた弥次馬もいた。目の保養をしたんだ。いや雛菊は、目の保養をさせてやったんだ。よいことをしたと思え」
「いやどすえ」
と肩を叩いた。芸妓というのは、それほど弱くはないのだ。体を張って生きている。
「雛菊を助けるには順序がある」
たしかに、右の青白い浪人が気になっていた。源兵衛に斬りつければ、同時に、板坂半兵衛が斬りつけて来るだろう。その半兵衛が前に出て来てくれたので助かった。
ほんとは孫も刀を抜いて備えなければならなかった。雛菊の乳房を揉み、はざまに手をやって、ついその気になってしまったのだ。
そのまま湯屋に入る。雛菊は先に裸になって洗い場に降りる。たしかに、あのように路上で雛菊の肌を見たことはなかった。
十兵衛も裸になり、湯で体を流しておいてざくろ口をくぐる。湯槽の中に入ると、雛菊が抱きついて来た。
「うちの体、清めておくれやす」
「わかっている。たっぷりと清めてやろう」
「ふふっ、うれしゅうおす」

と抱きついて来る。湯気と暗さで何も見えない。雛菊は、十兵衛がざくろ口から入ってくるのを見ていた。そこからわずかに光は流れ込んで来ている。だから、抱きつく男を間違えないですんだのだ。

「あのように見ても、よい体をしていた」

「いやどすえ」

と言って肩のあたりを咬む。

抱き寄せて、腰から尻を撫でる。それから手を乳房に向ける。手に余る大きさだ。この乳房を手にして、孫はゾクッとなったのだろう。刀を抜くのを忘れていた。

壺まで指をのばしながら、そこに一物を埋められなくて可哀想だった。

「立っておくれやす」

と耳もとに囁いて来た。十兵衛が立ち上る。そして一物を手にする。一物は怒張してはいなかった。その一物を口に咥える。根元まで呑み込んだ。怒張すれば、根元までというわけにはいかない。

咥えておいて、腰に抱きついて来る。そして男の腰から尻、腿のあたりまで撫でまわす。柔い手で撫でられるのも悪くはない。その手でふぐりを包み込む。

立っていても誰にも見えないのだ。一物はたちまち怒張した。根元を手で握って尖端に舌を這わせる。

「出して下さい。呑みたいのどす」

と言った。だが、そう簡単には出ない。しきりに舐め回し、頭を前後させる。

「ねえ、いただかして」

と手で摘み前後させる。しきりにしごいては尖端を舐める。ふぐりの下に指を這わせる。男を放出させる技は持っているのだろう。

蟻の戸渡りに指を這わせる。指は菊の花までのびていく。菊の花を指でなぞる。花芯に指を入れて来た。

「うむ」

と声をあげた。菊の花まで開かれるのははじめてだ。指がそこで動いている。

「果てる」

と十兵衛は言った。そしてしたたかに口に放出した。雛菊はそれを口で受ける。しばらくそのままにしておくと、一物は萎えていく。そこで唾液と混ぜて呑み込むのだ。咽が鳴った。

十兵衛が体を沈める。

「おいしゅうおした」

と耳もとに囁いて来る。

七章　幸手

1

寛永十三年（一六三六）正月――

雛菊の家の炬燵に入っていた。十兵衛は三十歳になったのだ。正月料理は雛菊が作ってくれた。

京の冬は寒い。外には出たくない。炬燵でぬくぬくとしていたい。江戸から知らせが来るのを待っている。

日光東照宮が完成すると、家光は日光に向う。その日が決定するのはいつか。老中・阿部豊後守忠秋がその日を知らせてくる。

忠秋にしてからが最後だろう。これ以上十兵衛を動かしては、おのれの身が危くなる。この辺でけりをつけたいのだ。

屋代甚三郎忠正は、江戸・本郷に住んでいる。町の暮らしにも馴れたようだ。この甚三郎は忠長である。

高崎で、忠長と甚三郎を入れ換えた。甚三郎は忠長の身代りに殺された。忠臣である。

父宗矩は、但馬守、六千石、総目付である。この寛永十三年に四千石が加増され一万石の大名に列した。のち、一万二千五百石に至る。

宗矩は、柳生家のことだけを考え、家光の寵を受け、大名にまでなる。柳生家を守って来たのだ。

十兵衛は、柳生家のことよりも徳川将軍家のことを考え、この十年を苦労して来た。徳川将軍家は、神道でなければならない。そこに命を賭けて来た。

いま考えると、それが全く無駄だったのだ。一体、何をして来たのだろうと思う。体の力が抜けていくようだ。

年明けて、ちょうど十年になる。二十代をそのことだけに費して来た。その十兵衛の努力を阻んで来たのは、忠長であり、忠長の重臣たちだった。

はじめから無理だった。蟷螂の斧だったのだ。おのれ一人でできることではなかった。いまは、将軍の首をすげ換えようとは思わないだろう。

だが、二十歳のそのころは若かった。神道将軍にすることが正義だと思っていた。父に説得されながら、それをはねのけて浪人した。

若さのせいだったのか。神道であろうと仏教であろうと、幕臣にはどうでもいいことだったのだ。おのれだけ出世すればよかった。武士は家名だけが大事なのだ。

宗矩には、父石舟斎までの苦労がわかっていた。柳生家は一度は沈んでしまったのだ。それが、宗矩が二百石で徳川家に召抱えられた。徳川家のために働いて来て一万石の大名になった。十兵衛は、一体何をして来たのだろう、と悔む。この十年の無駄が十兵衛の気力をむしり取るのだ。

私利私欲ではなかった。すべて徳川家のためだった。徳川家にそれほど忠節をつくさなくてもよかったのだ。自分の力で徳川家を神道にもどせる、と思ったのは思い上りだったのだ。

蟷螂、かまきりだった。一匹のかまきりに一体何ができるのだ。この十年をぼんやり思い返す。

足を炬燵に入れて、畳の上に寝転び、天井を見ていた。十代の十年間、一生で最も大事な時である。それを無駄にしてしまったのだ。

家光の家臣でいれば、とうに大名になっていた。柳生家ということを考えなければ、家光は容易に殺せた。殺しておいてその場で自刃すればすんだのだ。

それができなかった。父宗矩がいたからでもある。宗矩は柳生家のために、必死で家光を守った。

十兵衛は、宗矩との板ばさみになっていた。大井川での襲撃のとき、家光の前に宗矩はものすごい形相で立っていた。上さまを斬るにはわしを斬ってからにしろ、と。もちろん、刀を抜いて対峙すれば、十兵衛はとうに宗矩を越えていた。

だが、斬り合いは術ではないのだ。宗矩もまた武芸者である。わが子である十兵衛を斬っても家光を守る。

その双眸からは火が出そうだった。十兵衛は、そのとき宗矩の気力に負けたのだ。

はじめから、家光のそばに宗矩がいる限りは無理だった。家光を暗殺しようと思ったのであれば、二十歳のときにそのことは辞めていた。

はじめは、家光を暗殺することなど、考えてもいなかった。ただ、忠長を蜂起させればそれでよかったのだ。将軍が家光と忠長が入れ換る。それだけでよかった。それを可能と考えた。

家光を暗殺しなければ、と思ったのは高崎以後だった。当時、阿部忠秋は若年寄だった。昨寛永十二年に老中になっている。

その阿部忠秋が、十兵衛に家光を暗殺させようとした。そのために忠長の身代りを立てて自刃させ、忠長の命を助けた。

十兵衛一人ではできないことだった。家光が十兵衛に暗殺されれば、忠長を立てて江戸城に入城するはずだったのだ。

そうすれば、徳川将軍家は神道にもどる。忠長が将軍になれば、老中も若年寄もすっかり入れ換ることになる。まだ、いまでも神道派の重臣は多い。

神道派将軍を望んでいながら、神道派大名たちは動けなかった。重臣たちも同じだった。彼らは、十兵衛が突破口を開いてくれるのを望んでいたのだ。

部屋の中は暗かった。だが、行燈に火を入れるために起き上るのは面倒だった。このところ、住まいにもどらず、雛菊の家にいた。酒を呑みにも出かけない。

比賀志左近は十兵衛の住まいにいる。比賀志と話すこともあまりなかった。気が抜けてしまっている。

江戸にいれば、いろいろ面倒なこともある。命を狙われることもある。十兵衛に挑んで来る者もいる。公儀の目もある。それで京にやって来たのだ。

この北野に入れば、十兵衛のことを知っているのは伝七郎と比賀志だけなのだ。おのれの気と体力をつなぐために、山賊退治に出かけた。

山賊こそ迷惑であったろう。十兵衛の気力で討たれたのだから。京・船田屋のお近を抱いてみたい、と思ったが、それも面倒だった。

玄関の戸が開いた。入って来るのはこの家の主、雛菊である。彼女は、手さぐりで入ってくると、行燈に火を入れた。

そこに十兵衛がいるのを見て、ギクリとなった。

「ああ、びっくりした。おいやしたんどすか」

「ああ、行燈に火をつけるのも面倒でな」

「うれしゅうおす」

と言って抱きついて来た。酒と白粉が臭った。それが女の匂いと混ぜ合わされている。

「早いな、客はとらなかったのか」

雛菊は返事をしなかった。十兵衛と知り合ってから、彼女は客を断わりつづけている。まだ、金はあるのだろう。

もちろん、料亭のお座敷に出ているだけで暮しには足りる。西陣の旦那が客である。客に誘われることもある。それもずっと断っている。

雛菊は立って化粧を落す。そして着換えて酒の仕度をする。いそいそと動く。十兵衛がいるのがうれしいのだ。銚子を鉄びんの湯に沈める。

静原村のお綱は、十兵衛の種を孕んだだろうか、と思ってみる。村長は強い男の子が欲しいのだ。もちろん、孕んでも男子か女子かはわからない。

十兵衛は起き上った。酒膳を炬燵のそばに置いた。盃は二つだ。炬燵のむかいに坐って、照れたように笑った。

「何をお考えどすのやろ」

「いろいろとな、男には考えることがある」

銚子を鉄びんから出して底を布で拭い、そして酌をする。

「おなごはんのことどすか」

「女のことは雛菊のことだけだ」
「うれしゅうおす」
と笑う。
先日は、浪人に裸にされた。乳房を揉まれ、はざまにも指を入れられた。そのことはとうに忘れているようだ。芸妓はただの女ではない。強い。強くなければ生きてはいけない。
その点、船田屋のお近は、弱い女だった。もっとも亭主を目の前で殺されれば、女は狂ったようになるのが普通だろう。
酒を注いでやる。白い咽を見せて呑む。首の白さが、そのまま肌にも及んでいるのだ。
「うちの体、もう潤んでいるのどすえ」
きわどいことをいう。これが芸妓だろう。料亭に来る旦那たちは、芸妓をそばにしてきわどい話をする。そういうことには馴れているのだ。
酒膳を押しのけ抱きついて来た。そして衿を開く。そこに十兵衛の手が入り、乳房を包み込む。
「うふっ」
と鼻を鳴らした。男に乳房を触られ揉まれたかったのだ。男に体を触られていると安心できるのだ。乳房を揉みあげる。揉んでいると乳首がしこって来た。
雛菊は手をのばして来て股間を探る。着流しだが下帯は締めている。その下帯の上から撫で

る。手を回して下帯を解く。解放された一物は怒張していた。それを手に握る。うふっと笑い、
「うれしゅうおす」
と言った。一物を強く握ったりゆるめたりする。そして手を上下させる。十兵衛はすでに仰向けになった。雛菊はしばらく一物を眺めていた。この一物が女を狂わせるのだ。どうしてこの一物にそんな威力があるのだろうと思う。
できることなら、切り取って自分だけのものにしたい。女にはそういう願望がどこかにあるのだ。萎縮しているのはみっともないが、怒張している一物は立派であり美しいのだ。
そこに顔を埋めると、一物を手にし尖端に舌を這わせはじめた。
家光は、必ず日光東照宮に参詣する。これを討つしか機会はない。道中、幸手の聖福寺で休息する。
いま、木賊孫十郎と桐生重兵衛は、この聖福寺の間取りなどを調べている。寺の勝手がわからなくては、斬り込んでも家光まではたどりつけない。
十兵衛たちが、聖福寺に家光を討つ、その気配を悟られないために京・北野に来た。もちろん、家光の参詣が決ってから探っては相手に気取られる。それで二人は昨年の春ころから調べていた。
相撲では〝露払い〟というのがある。家光が参詣する日光街道には露払いがいるし、密偵たちも数多く、道々を調べている。

だから、幸手で待ち伏せている、というわけにはいかない。不審があれば、道中奉行に報告され、守りは堅くなる。聖福寺までの休息はなくなる、ということになりかねない。

どうやって家光を急襲できるかである。この行列に柳生但馬守が付くかどうかも問題になる。但馬守は命賭けで家光を守ろうとするだろう。

もちろん、守りは厳しいはずである。だが、この機会を逃しては、二度と家光は討てなくなる。

雛菊は一物を咥えていた。尖端だけ咥えてそこに舌を躍らせる。そして深く呑み込もうと顔を押しつけてくる。だが、半分以上は口の中には入らないのだ。頭を上下させる。

体を起し、裾をめくった。腰に跨がって来るつもりだ。一物を手にしている。だが、雛菊は背を向けた。そして腰に跨がってくる。逆茶臼である。

壺口に尖端を当てる。一物は壺の中に一気に滑り込んだ。あーっ、と声をあげる。炬燵に両肘をついて体を浮かし、腰を回す。炬燵の中には火が入っている。はざまはその火で焙られることになる。

露は乾いていく。だが、新しくにじみ出て来るのだ。抜けないように、いくらか前かがみになっている。尖端は数の子天井あたりに当っているはずだ。

はじめての姿勢である。炬燵にうつ伏せ、のけ反るのだ。素人女ではない。芸妓だから男と女は夜具の中で体を重ねるだけが遊びではないことを知っている。

手をのばして腰を撫でる。十兵衛は起き上った。背座位である。一物は反り返る。雛菊は、あーっ、と声をあげた。

壺の中で反り返った一物の尖端は数の子天井に強く押しつけられている。雛菊はかすかに腰を使っている。強く振れば一物が外れてしまうのだ。

姿勢によって一物が壺に当る部分が異るのだ。だから、女が感じる快感が異るのだ。

「ああ、よろしゅうおす」

と言った。

手をのばして、腿の表と内を撫で回す。炬燵の中は熱い。火に焙られている。肌は熱くなり、そしてなめらかだ。

帯を解く。軽く解けた。着換えて軽く締めていたのだろう。衿を拡げる。胸があらわになる。抱きしめるようにして二つの乳房を手にした。

乳房を揉みあげる。しこった乳首を摘んでひねる。雛菊は、ひくひくと腰を動かしている。

「せつのうおす」

と上半身をくねらせる。下半身を動かしては外れるからだ。さすがに芸妓だ、外さなかった。たいていは、思わず腰を振って外すものである。

「もう、いきとうおす」

右手で右乳房を摑み、左手を前に回す。腰から腿を撫で、内腿からはざまにたどり着く。壺

口に入っている一物を指でなぞる。
「いかせて、おくれやす」
指は切れ込みをたどった。その上に肉の芽がある。指先が芽に触れる。
「あっ」
と声をあげた。たいていはここで外れる。腰を振りたいのを我慢している。炬燵にしっかりかじりついている。
十兵衛が少し腰を引く。すると反り返っている一物がゆるやかになる。とたんに雛菊は腰を振る。
炬燵にうつ伏して、しきりに呻き声をあげる。両手をのばして腹を抱き寄せる。腹もまた柔かい。丘の上の茂りを手で撫でる。そこから谷間に手を滑り込ませる。やはりそこに芽があった。
「あーっ、いやーっ」
と腰を振る。一物は外れた。外れたのではなく外したのだ。膝の上から降りる。そしてまた一物を手にして舐めまわる。一物は露に濡れている。その露を舐めとるのだ。
そこに仰向けになった。十兵衛は両足首を摑んだ。そして上に押し上げる。膝は乳房を押しゆがめ、はざまはむき出しになっている。
雛菊は手をのばして一物を摑むと、そのまま尖端を壺口に当てる。腰に力を加えると、一気

に滑り込んだ。
「わっ」
と声をあげる。両手をのばして十兵衛の体にしがみついてくる。腰を激しく振る。
「いきます」
と口走る。悶え狂う。体がこきざみに震え、ウーン、と声をあげた。ゆっくりと手足から力が抜けていく。
「いきましたんえ、ようおした」
と言っては、また抱きついて来る。
「どうして、こんなにええんやろか」
体を重ねていれば寒くもないのだ。

2

もう二月に入っていた。
十兵衛は、雛菊の家に居つづけた。ときたま住まいにもどる。住まいにいるのは比賀志左近だけである。もちろん、伝七郎もやってくる。
雛菊と一緒に湯屋に行く。湯舟の中で楽しむことになる。十兵衛はいくらか飽きていた。だ

が、雛菊は毎夜でもいいのだ。女というのは欲が深い。

あるいは、こんなに好きものにしたのは十兵衛かもしれない。よく続くな、と思う。その日も、炬燵に入って、うつらうつらとしていた。

雛菊はお座敷に出ている。料亭は夜だけではない。さすがに朝のうちは客は来ない。だが昼すぎると客はやってくる。遊びにではない。仕事の打ち合わせとか接待である。

昼間のお座敷が多ければ、日の暮れるころにはもどって来る。十兵衛がいるとそのまま抱きついて来る。一緒に湯屋に行く。そしてまぐわう。よく続くものだと思う。

近ごろお客にも評判がよくなったという。色香が濃くなったのだ。だから、お座敷も多くなる。いまや売れっこ芸妓なのだ。女というのは男次第である。

この日も、十兵衛はぼんやり炬燵に入っていた。まだ、寒さの盛りだ。積もるほどの雪は降らない。それだけに寒い。

外に出ると、刀を抜くことになる。浪人を斬る。十兵衛を知っている浪人は近づかない。ところが、知っている浪人ばかりではない。

十兵衛を知らない浪人は挑んでくる。雛菊など連れていると、浪人の反感を買う。美人を連れて、その上美男と来ている。ちくしょうと思うのだ。つい、挑みたくなる。

浪人を斬るのも少々あきた。小野忠明の四百五十人までは無理だと思う。武芸者はどれほどの人を斬れるのだろうか、と思うこともある。

人が人を斬るのだ。千人も二千人も斬れるわけではない。小野忠明の四百五十人が最高だろう、と思っている。千人も二千人も斬ったと言えば、絵そらごとになる。

四百人を過ぎたあたりから、だんだん斬れなくなってくるのではないか、と思う。限界があるのだ。

十兵衛は限界に近づいているのではないかと思っている。何となく人を斬るのがいやになって来ているのだ。あとどれくらい斬れるのか。

人一人を斬るのだ。藁人形を斬るようなわけにはいかないのだ。人の命を奪っていくのだ。命には魂があるのだろう。その霊魂が肩に積み重なっているような気もする。

四百人近い人の霊が、折り重なって肩にしがみついているような気もする。

浪人たちは、おのれたちの不遇を嘆いているのだろう。そういう浪人たちは、十兵衛を見ればムカッとなるのかもしれない。

炬燵に入って畳に寝ていると、瞼の皮が重くなってくるようだ。つい、うつらうつらと眠ってしまうのだ。

十兵衛は待っている。江戸からの知らせだ。起き上って炬燵を出る。障子を開けてみる。静かだ、と思ったら雪が降っていた。雪が降ると、かえって暖い。

まだ、春は先のようだ。障子を閉めてまた炬燵に入る。横になって、うつらうつらと眠りはじめる。

山賊村は焼き払った。あとはあのままか、多くの賊たちの死体は、もう白骨になっているのか。

一つの山賊村を焼き払って、それで山賊がいなくなったわけではない。山賊村はあちこちにある。また、天ヶ嶽に山賊が巣を作るまでには、四、五年はかかるのではあるまいか。その辺はわからないが。

表に人の気配がした。さすがに起きて刀を手にする。雛菊がもどってくる時刻ではなかった。

「神谷さん、いるのか」

比賀志の声だった。

「比賀志さんか、上ってくれ」

「いや、江戸から使いが来ている」

「そうか、ならば少し待ってくれ」

炬燵と火鉢の火の始末をした。そして帯を締め直し、脇指をさし、刀を手にした。表に出る。

比賀志が待っていた。

「やっと来たか」

「そのようだな」

草履をはく。外へ出ると雪は降っていた。柔かい雪である。

「名は聞いたかな」

「トクリと申しておる」

「そうか、土久里三郎だな」

「豊後守の家臣か」

「そうだ、前に何度か会ったことがある」

やっと使いが来た。これを待っていたのだ。長いような短いような、待ちくたびれたところもあった。

住まいにもどる。土久里三郎が坐っていた。阿部豊後守忠秋の家臣である。

「ようまいられた」

「一別以来でござる」

十兵衛は火鉢のそばに坐る。

「豊後守どのの老中昇進、おめでとうござる」

「はい、よしなに、と申しておりました」

土久里と比賀志を紹介する。

「ゆるりとされるがよい。あとで酒宴でも張ろう」

「いいえ、柳生どのにお会いできたからには、報告だけして、すぐに江戸にもどります」

「左様か」

豊後守としては、十兵衛と同穴ということを知られたくないのだ。

「わかった。江戸からわざわざ、おいで願ったのにな」
「さっそくですが、四月十三日と決まりました」
「そうか、四月十三日か」
日光東照宮の大造替が完成するのは、四月のはじめだろう。それを予測して出発の日を決めたのだ。
もちろん、準備に二カ月くらいはかかるのだ。
「四月十三日に岩槻坂泊り。四月十四日に古河城泊り。十五日が宇都宮泊りになります」
そばで比賀志が、紙に書きつけている。
「なるほど」
「先発が、尾張の義直さま、紀伊の頼宣さま、水戸の頼房さま、それに井伊直孝さま、松平忠明さまたちです」
御三家も日光に参詣するのだ。
「上さまと同道されるのは」
老中の酒井忠勝、堀田正盛、阿部忠秋の三人、あとは永井尚政、稲葉正則、三浦正次、朽木植綱、太田資宗たち、家光政権の中枢幕閣である。
「それに、八王子千人頭・志村勘左衛門貞昌も従います」
「但馬守は」

「はい、柳生さまは、今回は同道されない由にございます」
十兵衛は、まことか、と小さく言った。
「それで休息場は」
「はい、川口の錫杖寺、幸手の聖福寺、小金井の慈眼寺、石橋の開雲寺、大沢の龍王寺、今市の如来寺でございます。前と変りないと思いますが」
もちろん、一応は決っているが、宿泊所の城以外は、異変があれば、変更されることになる。休まなければならない、ということはないのだ。
「何か他には」
「何か他には言うておくことはないか」
家光上洛のときの行列に比べれば当然少い。それでも休息する寺には、その境内にも、行列の侍たちは、みんなは入れないだろう。
寺の境内に入れるのはどれくらいか、十兵衛は聖福寺というのを知らない。他の寺もである。その辺は、木賊孫十郎と桐生重兵衛の二人が調べている。やがて京に上って来るはずである。裏の頭である阿部豊後守も一緒について来る。比賀志たちの殿である頼宣もだ。やりにくいが、やらなければならない。
十兵衛は、幸手の聖福寺で襲う、と決めているが、変更もある。そこまでは口にしなかった。
「よろしゅうございますか」

と土久里が言う。

「それだけわかればよい。わしに喋ったことは忘れてくれ。ご苦労であった」

ならば、と土久里三郎は立っていく。まっすぐ江戸にもどるのか、どこかに用があるのか。十兵衛との接触を知られたくないのだ。

お留が茶を出した。それを呑む。濃い茶だった。

「やはり、幸手ですか」

「幸手の聖福寺を考えているが、まだ決定したわけではない」

「どうだ、石川さんを呼んで来ようか」

「そうだな、頼もう」

比賀志は立っていった。十兵衛は、

「四月十三日か」

と呟く。もっとも岩槻で一泊するから、家光を襲うのは十四日になるわけだ。長かったような気もする。

父宗矩は、今度は江戸城に留守番か、ほんとだろうか、と思う。宗矩が来ない、と聞いて、ホッ、としたが、待てよ、という気になった。

今回、宗矩が家光と同行を共にしないというのは、何か策があってのことなのか。何も策を考えないわけはないのだ。

十兵衛たちが聖福寺に斬り込んだところで、柳生一族が出て来て、行手を阻む。門弟二百人ほどなら、すぐにでも動かせるはずだ。

疑心暗鬼だ、考えれば考えるだけ深みにはまっていく。その辺は宗矩も考えていることだろう。何も策がなくて留守番するわけではないだろう。

大井川で宗矩の鬼のような顔を見たのだ。今度も策がないわけはないはずだ。今回も宗矩が邪魔をするのか。

石川伝七郎がやって来た。

「神谷さん、やっとやって来ましたか、四月十三日と聞きました」

「どうやら決ったようだな」

伝七郎が、ふところから紙を出して拡げ、畳の上に置いた。江戸から日光までの地図が書いてある。

日光街道は、江戸を出て、千住、草加、越ヶ谷、粕壁、そして幸手である。家光は幸手までは御成街道を来る。

江戸を出て、岩淵、川口、鳩ヶ谷、大門、ときて、岩槻城に一泊する。そして幸手である。この宿場で日光街道に合流するのだ。

幸手の次は栗橋、その先に利根川が流れている。ふつうは渡し舟だが、家光が通るときだけ船橋が架けられるのだ。

ここを房川の渡しという。暴れ川で雨でも降れば渡れなくなる。大井川よりも流れは荒い。川を渡れば中田宿、次の古河城に泊る。

十五日は野木、間々田、小山、新田、小金井、石橋、雀宮、そして宇都宮城に泊る。十六日は下徳次郎、中徳次郎、上徳次郎を経て大沢、今市、鉢石と来て日光である。

宿場と宿場の間に休息所が用意してある。岩槻、古河、宇都宮の宿泊所では襲えない。少くとも城なのだ。風衆が百人いても歯が立つまい。

となると休息所だ。それも聖福寺しかないような気がするのだ。

「房川の渡しではどうですか」

と伝七郎が言った。

「船橋を渡る。そのとき襲うのか」

「そうです。泳ぎの達者な者に、上流から泳がせます。そして、連なっている船の紐を切るのです。船は流れていく。船橋はこわれる。将軍の駕籠もひっくり反って流されます」

「だけど、駕籠が船橋を渡るころ、駕籠に近づけるかな。これは、なかなか難しいぞ。危いだけに敵も用心しよう。船橋を架けるだけでなく、船に一人ずつ手練れが乗っているかもしれない」

「今度が最後だと思っている。失敗は赦されまい。比賀志さんはどう思う」

「房川渡しもなかなか、捨てられないがな。神谷さんの言うように、守りは厳しいと思わなければならん、八王子の千人同心もついて来るといった。鉄砲隊もいるだろうな」

「川で襲っては、風衆は斬り込む前に狙い射ちされる。

「みなさん、揃っているようだな」

と声がして柴山丹後が上ってくる。地図を折り畳むひまはなかった。

「おや、みなさん集まって談合かな。わしも入れてくれぬか、わしは神谷さんの弟子だ。仲間に入れてもらってもよいと思うが。押し込みでもやるのか」

十兵衛は笑った。うろたえてはかえって疑われる。

「わしらは、何を相談していたと思う」

「さあ、わしにはわからん」

「将軍家光暗殺だ」

「神谷さん」

と比賀志が言った。

「家光暗殺、冗談だろう」

柴山は、三人の顔を見た。

「わしの本名は柳生十兵衛だ」

「柳生十兵衛、あの総目付の息子の、そうか、そうだろうな。いや、ただの浪人ではないとは思っていた。そうか、柳生十兵衛どのか」

柴山のほうが青ざめた。予想以上の重大事だったのだ。
「これだけで、暗殺」
「街道には百人の仲間がいる」
「そうか、だから、この北野に隠れていたのか」
「江戸にいては目立つからな」
柴山は、そこに畳をついた。秘密を知ってしまったのだ。ただではすまない。
「わしも仲間にしてくれ」
「知られてしまったからには、仲間になってもらうしかないな」
「そうか、仲間にしてもらえるか」
柴山は、ホッと肩を落した。
「いや、わしは死に場所を探していた。これで死に場所ができたということだ」
「仲間にはできんな。あんたは信用できぬ」
「なにっ」
「知られたからには生かしてはおけん」
「それは」
と言いかけて立つ。そして這うようにして逃げる。ワーッ、と叫んだ。十兵衛は、刀を手にして立った。

柴山は裸足で逃げる。十兵衛は草履をはいて表に出る。脇指を抜いて、逃げていく柴山に投げた。脇指は尻に刺さった。
「ギャッ」
と声をあげて転んだ。あわてて起き上る。逃げきれないと知って刀を抜いて、振り向いた。かなりの使い手である。伝七郎や比賀志では斬れない。
これだけできる男を斬ってしまうのは惜しい。だが、浪人は信用できない。男としてのすべてを失ってしまっている。
山賊退治には平気で遅れた。言いわけをした。人を裏切るのも平気、嘘だって平気でつく。特に柴山が悪いというのではない。浪人はみなそうだ。
浪人を信用するとひどい目にあう。十兵衛は浪人たちとつき合っている。長いつき合いだ。信用できると思っているからつき合っている。
山賊退治のとき、帰れと言われてついて来た。そのときから十兵衛に怯えていた。そのまま帰っていればよかったのだ。
それをあとをついて来て、山賊を斬った。十兵衛にくっついていれば、何かいいことがあるかもしれん、と思ったのだ。たかが、ほんの少し遅れて来ただけだと思っている。それは許されることだと思ったのだろう。だが十兵衛は許してはいなかったのだ。
浪人にはけじめがない。けじめなく生きている。二年浪人すれば、仕官はできない、と言わ

れている。もう腐っているから、もとにはもどらない。だから、例外を除いては、大名も浪人を召抱えようとはしない。

逆に言えば、十兵衛には狷介なところがある。家光暗殺のことがなければ、放っておいたのだろうが。

柴山は刀を正眼に構えた。そのときにはもう負けていた。一度負けている。だから自分では及ばない、と思い込んでいる。こうなると、万が一にも勝てる可能性はない。

正眼と言いながら正眼ではなかった。体が傾いている。尻が傷ついている。痛いのだろう。

「な、なんでわしが斬られなければならぬ」

「ここが、あんたの死に場所だ。死に場所を探していると言った」

「わしは、あんたに何も悪いことはしておらんぞ」

「悪事をした者だけが斬られるとは決っていない。あんたは、わしらの密事を聞いてしまった」

「わしは何も喋らん」

「それが信用できれば、仲間にしている。あんたは信用できないのだ。汚れてしまっている」

伝七郎と比賀志もあとから出て来て見ている。

「どうせ死ぬのだ、開き直れ」

柴山は、刀を手から落した。そして膝を折った。そして両手をつく。

「かんにんしてくれ、ここで死にたくはない。助けてくれ」

十兵衛は笑った。刀は手に届くところにある。これも柴山の手だ。うかつには近寄れないし、気も抜かなかった。

「なるほど、そういう手もあったか。柴山さん、世の中はそんなに甘くない。だが、まあいいだろう。立って刀を収めてくれ」

「かたじけない」

柴山は、刀を手にして腰を浮かす。素速く動いた。刀を左に引きつけ薙いだ。十兵衛はそれを予測していた。

跳躍した。そして一閃させた。猿飛である。跳び上りながら、剣尖で首筋を裂いた。

「わっ」

と声をあげ、刀を投げ出し、首筋を手で押えた。一呼吸あって、指の間から血が噴き出す。そのまま、背を向けて走り出した。血が地面に散る。血を振りまきながら走って、やがて見えなくなった。

十兵衛は刃を拭った。一丁あまりも走れば血を失って死ぬ。走れば心臓の動きが早くなる。それだけ血は勢いよく出ることになる。

首を裂かれると、たいていは走る。どういうわけだろうと思ってみる。首根を裂かれると血は止まらない。血を失って死ぬことは決っている。それなのに走るのだ。

3

三日後に、木賊孫十郎と桐生重兵衛が着いた。二人は幸手を昨年から調べていたのだ。五人が居間に集まった。

「そうですか、決りましたか」

「四月十三日だ」

「不穏な動きがあると知れば、幸手には休息しないで、白河城をめざすかもしれませんね」

比賀志左近が言った。

「いや、幸手では休息しなければならんでしょう。古河城の間には房川渡しがあります。利根川を渡るのはきつい。船橋ですからな。もし雨でも降れば、船橋は作れない。作っても渡れないでしょう。すれば、幸手に泊るしかない。先の栗橋には、将軍家が泊るところはない、と言って岩槻城までもどるわけにはいかない。幸手は重要な場所です」

と孫十郎が言った。

「それにまだ日光までは先が長い。古河まで無理に行くことはない。どうしても幸手で休まなければならないですね」

重兵衛が言う。

十兵衛は、はじめから家光を襲うのは幸手だと思っていた。だから幸手を探らせたのだ。

「他に手は考えられないのか」

「まず、考えられませんね」

日光街道と御成街道は幸手で合流する。家光は御成街道を行く。すると日光街道のほうは、取締りはそれほど厳しくない。地の利ということがある。

「幸手で決まりですね」

と伝七郎が言った。

重兵衛が、聖福寺の見取図を書いて来てくれた。街道から山門がある。山門を入ると参道がある。

境内に入る前に勅使門がある。この門は四脚門である。勅使が天皇の代りに日光東照宮に社参する。そのときには勅使もまたこの聖福寺で休息する。

そのために勅使門がある。もっともこの門は日頃は閉っている。将軍家と勅使が休息のときだけ開けられる。

門の中は境内である。右手に墓地と鐘突堂がある。その外側に塀がある。左手はそのまま塀になっている。

正面に本堂がある。この境内で侍たちは食事をとることになる。

「境内にどれくらいの人が入れるのかな」

「さあ、百五十人ほどですか」
「すると、お供のみんなは入れないな」
「はい、それはあとにして、正面の本堂ですが、かなり広い本堂です。この本堂の右手に将軍の休息所があり、左手は勅使の休息所です」
「よく調べたな」
「はい。この聖福寺から一丁ほど先に正福寺という寺があります。ここで御三家、老中の何人かは休まれるものと思われます。二年前の社参のときにも、この正福寺が使われています。供の侍の半分は、正福寺の境内で食事をとるものと思われます」
「なるほど」
「われわれ風衆は、勅使門から斬り込むことになりますな」
「柳生どのとわれわれは」
と伝七郎が言う。
「風衆が境内で騒ぎを起し、そのあとで、右側の塀を乗り越えて墓地に入り。本堂に向われるがよいと思われます」
重兵衛が言った。
「庫裡はどうなっている」
「庫裡は、本堂の裏ではなく、別棟になっていて、境内の右側にあります」

「本堂に裏口はないのか」
「なかったようです」
「将軍の休息所の出入り口には、腕利きの旗本が配されることになるな」
「どれくらいの旗本がいるのかな」
伝七郎が言った。
「二十人ほどだろうな」
と孫十郎。
「その二十人を斬らなければ、家光にはとどかないわけだ」
関ヶ原のとき、家康暗殺団が本陣に斬り込んで来た。そのとき旗本だった柳生又右衛門（但馬守）は十人ほどの敵を斬ったという。
今度も、家光を守る旗本には腕の立つのが揃えてある、と考えなければならない。斬り込むには、臥雲玄蕃、二階堂主水がいる。それに十兵衛、伝七郎、重兵衛、孫十郎の四人がいる。二十人の旗本くらいは簡単だ。
「正福寺の供侍たちが来ないうちに決着をつけなければならんな」
孫十郎が言う。
「多くを斬ることはない。目的は家光ただ一人だ。家光を討ったら、わしが笛を吹いて合図をする。すると散ってくれ」

と十兵衛が、比賀志に言った。
「わしは、明日にでも、紀州に帰る。そして斬り込みの手はずをととのえる」
比賀志が言った。
「玄蕃さんたちとは熊谷宿で会う。そこから山越えで幸手に入る。四月十日、三日前だ。その日にわしは、熊谷に着く。孫十郎、熊谷宿から幸手への道を探しておいてくれ」
「わかった。重兵衛、わしらも明日、出発するか」
「それがよいな」
「間違いはないと思うが、この絵図をよく見ておいてくれ」
家光を斬るのは十兵衛ではない。臥雲玄蕃に頼むつもりだ。そうすれば、目の前に父但馬守宗矩が立っても心配ない。
大井川の襲撃でも玄蕃がいれば討てたのだ。十兵衛は家光の小姓だった。だから討ちにくい。
「比賀志さん、風衆もできるだけ死なんようにしてくれ、死ぬことはないのだ」
「わかった。みんなにそう言っておく」
「いよいよだな」
「と言っても、まだ二カ月ある」
「茶屋で、宴でも開こうか」
「神谷さん、それは止めておいたほうがよい。酒宴を開いては気が抜ける」

「それもそうだな」
十兵衛は、立って隠しておいた二百両の金を持って来て、みんなの前で開いた。
「玄蕃と主水にも持って行ってくれ。重兵衛と孫十郎もだ。もちろん、伝七郎もだ。伝七郎は、わしと一緒に熊谷宿に行く。それに、鎖帷子と黒装束を揃えておいてくれ。四月ならば、鎖も冷たくあるまい。逃げるときには黒装束も鎖も捨てたほうがよいな」
「わかった」
と重兵衛が言う。
その夜は、部屋を暖くして雑魚寝だった。朝飯はお留が作ってくれた。もちろん伝七郎は女のところにもどって行った。
木賊孫十郎、桐生重兵衛、比賀志左近の三人は北野を発っていった。その見送りには伝七郎も来ていた。三人を見送って伝七郎と十兵衛は、部屋にもどった。
お留が部屋を片付けている。
「よけいな仕事をさせたな」
「いいえ、これがうちの仕事ですから」
と言う。二人は火鉢を挟んで坐る。
「いよいよですね」
「なんの、まだ二カ月ある」

外へ出ようか、と伝七郎を誘う。上七軒の茶屋町を歩き、小料理屋に入る。奥の小座敷に上る。

卓を挟んで坐った。酒と料理が運ばれてくる。仲居が酌をする。美形というのではないが色っぽい。尻を撫でて知らん顔をする。仲居が十兵衛の横顔を睨む。

「いやどすえ」

「いやか、だが触りたい尻をしている」

一度ずつ酌をして、むくれたように仲居は去る。伝七郎は笑った。

「神谷さんらしいですね。いまの仲居、神谷さんを気にしていますよ」

女には馴れている。だからつい手が出る。だが、伝七郎はこういうことをしない男である。女は一人いればいいのだ。お鯉という女がいることは十兵衛も知っていた。もっとも顔は見たことがない。同じ男でもいろいろの男がいるものだ。どちらが真面目とか不真面目というのではない。

「今度は、目的をとげられますね」

「長かったな。こんなことになるとは思ってもいなかった。忠長派の重臣や大名は数多くいるのに、誰も何もできなかった。わし一人がどうあがこうと、どうにもならなかったのだな」

江戸の浪人たちを集めて、江戸に騒動を起そうともしたが、たいしたことはできなかった。浪人たちに気力がなかったのだ。

忠長や重臣たちも何一つできずに、五十二万石の太守が、高崎で自刃させられた。誰かが動いてくれれば、簡単なことだったのだ。

紀伊の頼宣は家光を憎んでいた。家光は徳川家三代将軍になれなかった男だ。それを家康が無理に将軍にした。

それを誰も反対できなかった。二代将軍秀忠にしてもだ。父家康が怖ろしかったのだ。もっとも何もできない男だった。女房のお江与が怖ろしくて、徳川将軍十五代の中で、唯一人、側室を一人も持てなかった男だ。軽蔑に価する男だ。

そして三代将軍家光は衆道だった。男の尻ばかり狙っていた。これでよく徳川家が保ったものだ。

徳川家を換えなければならない、と十兵衛は思った。いまになれば、思い上りだった。そのためにおのれの十年を捨てた。その十年はもどって来ない。

仲居が銚子を運んで来た。尻を撫でた。今度は声をあげなかった。そばに坐って酌をする。

「うち、お京と言います」

「そうか、お京さんか、色香はある」

「まだ、十八どす」

「なるほど、ならば色気というべきだな。触ってもよいかな」

酒の肴に女を触る。伝七郎は苦笑して見ている。

「十年はもったいなかった」
「でも、神谷さんは、多くの極意を得られた。無駄ではなかったと思いますがね」
「神谷はんとおっしゃるんどすか」
「そうだ。神谷兵庫だ。お京さんはよい体をしている」
「ほんまに、だったら、うちの体あげます。一晩だけ。お金はいりへんのどすえ。抱いておくれやす」
もう話は決ったようなものだ。十兵衛は腿を撫でる。肉付きのいい腿だ。
「わしはカマキリだったな。カマキリが思い上った。伝七郎には苦労をかけたな」
「なんの、わしは好きでやっていることです。おかげで退屈しないですんでいる」
膝の前をめくった。手をその中に入れて。腿に触れる。肌は張っていた。京女である。なめらかな肌をしている。
「お京さんも呑め」
と盃を渡す。酌をしてやる。
「うれしゅうおすえ」
と言った。もちろん仲居だ。雛菊に比べれば落ちる。だが、女は美人だからよいとは限らん。抱けば女は同じものかもしれん。
内腿に手を入れる。お京は膝を開いた。内腿は汗をかいているようにしっとりとしていた。

「だがな、伝七郎、今度もうまくいかないのではないか、そんな気がする」
「そんなことはありませんよ。ここまで来たんですから」
「何の話どす」
「押し込みの話だ」
「いやーっ、嘘どすやろう」
「お光といういい女がいてな、これを手込めにしたい」
「冗談ばかり。そんなことする人やおへん」
手を内腿に入れ、奥に入ろうとする。
「いやどす。恥ずかしゅうおす。二人きりになったときに」
「そうだったな、もう酔ったかな」
お京はせつなさそうに腰をくねらせた。好きものだろう。
また、失敗するような気がする。所詮は蟷螂である。いつかは蟷螂であることに気付く。父宗矩は、十兵衛が二十歳のときに言った。
やっと三十になって気付いたようだ。むこうにも何か策がある。その策は何だかわからない。日光行きを取り止めるとか、幸手には休まないとか。特別な警備をしているのか。飛んで火に入る夏の虫とか。
内腿をたぐる。

「恥ずかしい」

と言いながら、股を開いていくのだ。こんな十兵衛を、伝七郎はよく知っている。だから照れもしない。

お京は、膝立ちになった。そして膝を開く。このほうが手は動きやすい。お京は両手を十兵衛の肩につく。

両内腿に手を這わせる。もちろん仲居も店に入る前に湯を浴びて来る。腿を撫でながら酒をのむ。お京が酌をするのだ。銚子と盃がカチカチと音をたてる。

「お鯉さんはいい女だな」

「いい女です」

「生きていたら、またここにもどって来るんだな」

「わしは死に場所と考えている」

はざまを撫でる。指を折るとつるっと滑り込んだ。そこは指が動くくらいは潤んでいた。壺の中に指を没入させる。お京は腰をくねらせた。

八章 暗殺

1

十兵衛は、京を出た。そして中山道を行く。江戸までもどらずに、中山道の熊谷で落ち合い、山越えして幸手に入る。

江戸の密偵たちは十兵衛を探している。見張っていたのだ。それで京の北野にいた。密偵たちは京までは追って来なかった。京にいることも知らなかったのだ。

その密偵たちの頭は柳生但馬守である。宗矩にも、十兵衛の情報は入っていないはずだ。十兵衛が、もう諦めた、と思っているのか。

前回の大井川では、密偵たちに知られていた。だから宗矩は家光の駕籠のそばにいた。また、宗矩が出て来るかもしれん、というのは頭の中にある。

いま十年前のことを思ってみる。もしかしたら宗矩もまた将軍家を神道にしたかったのでは

ないか。

そういう気がしてくる。もちろん、柳生家はもともと神道である。だが、宗矩としては柳生家を守っていかなければならない。

だから、正面きっては家光に背を向けることはできない。柳生家は大事だ。だが、腹の中では、将軍家を神道にしたかった。そうでなければ、宗矩は十兵衛を殺したはずである。

柳生家は、もともと忍者の上忍であった。十兵衛を殺す方法はいくらもあったはずである。柳生一門には、さまざまな術を使う者もいる。

あるいは、十兵衛一人を殺してしまうのは簡単だった。柳生一族の総帥なのだ。下忍は多くいる。宗矩が総目付になったのは、下忍を数多く持っていて、その者たちを各大名の城下に散らしていた。

門下を数多く、各大名の剣術指南として押しつけている。下忍は柳生新陰流とは別の集団である。いかに十兵衛でも下忍たちには殺されている。

だが、宗矩は十兵衛を殺さなかった。家光の忠臣でありながら、やはり、将軍家を神道にもどしたかったのだ。そう思えば、いろいろとわかって来ることがある。

大井川でのことも、家臣たちの見ている前で、十兵衛が家光を斬ってもらっては困るのだ。暗殺にはならない。だから宗矩は十兵衛の前に立ちはだかったのだ。

誰だかわからないように殺さなければ、暗殺ではない。宗矩は家光を暗殺して欲しかったのではないのか。

中山道を行く。

十兵衛は、宗矩に踊らされていたのかもしれない。神田・鍋町の奈良屋宗吉にしても、当然、宗矩の息がかかっていた。十兵衛のために金を出したわけではない。

裏で宗矩が動いていた。だから奈良屋は十兵衛を大事にあつかった。

また、宗矩は十兵衛がいなくなったことについて、各地の大名を調べさせているのだ、と家光に言っていた。

だから、大井川でも家光は親しく十兵衛に声をかけて来たのだ。宗矩は、十兵衛一人を潰すのは、わけないことだったのだ。

「わしは、父に踊らされていた。父の手の中で踊っていただけのことだったのか」

伝七郎が、十兵衛の顔を覗き込んだ。

「いや、何でもない」

あるいは、十兵衛が北野にいることも、宗矩はとうに知っているのではないか。すると、今度の暗殺計画も知られている。

今度の日光の社参には、宗矩は同行しないという。ということは、家光を暗殺しろ、ということなのか。邪魔はしない。家光を暗殺しても柳生家は安全だ。そういうことなのか。

宗矩が、家光を暗殺せよ、と言っているような気がする。今回は、父宗矩も敵ではないのか、

と思ってみる。だが、よくわからない。宗矩が同行しないということが気にかかるのだ。

中山道・熊谷宿に着いたのは、四月十二日だった。桜の木が葉桜になっているころである。二人は旅籠に入った。旅装を解く。

旅籠に入るのを見ていたらしい木賊孫十郎がやって来た。孫十郎はいつも着流しである。たいていは刀は腰に刺さずに、肩にかついでいる。

部屋に入って来た。

「準備はできている。臥雲さんと二階堂さんは、別の旅籠に入っている。この熊谷では、集まらないほうがいいだろう、と言っている」

「それもそうだな」

六人の浪人が一室に集まっては、宿場の噂になる。できるだけ目立たないほうがよい。

「鎖帷子は集めた。臥雲さんと相談して、黒装束は止めにしたいと思うがどうだろう。頭巾だけにした。そのほうが動きやすい」

「そうだな。黒装束は風衆だけのほうがよいな」

孫十郎は、二人分の鎖を持って来ていた。

「明け六ツに宿を立つ」

「幸手への道は」

「忍城下を通っていく。これが一番近いようだ」

熊谷と幸手の間には山はない。関東平野の一部分である。

忍城主は三万石の松平信綱で老中である。信綱は江戸城に残っている。

「十三日の泊りは忍か」

「いや、忍に泊っては先が長い。野宿することになろうな。昼前には、家光の行列が幸手に入る。その前にわれわれは幸手に入っていたい」

十四日、昼ころには家光の行列は、幸手の聖福寺に入る。昼食を取ることになる。昼食を取りはじめたところで、風衆百人が境内に斬り込む。

その騒ぎを聞いて、十兵衛たちは塀を乗り越え、そのまま本堂に斬り込む。本堂に入る前には、広い階段がある。

その階段には守備の旗本が立っている。本堂に入れば、家光休息所の前には、これまた旗本が二十人ほどいる。

それを突破しなければ、家光にはたどりつけないのだ。時がかかれば正福寺にいる者たちが駆けつける。

その前にけりをつけなければならない。勝負は一気につけなければならない。

「休息所に裏口はないのだな」

「ない、わしらが斬り込んでも家光は逃げられない」

「目的を果したら、それぞれに逃げる」

「忍城下に隆成寺という寺がある。そこに集まることにしたらどうだろう」
「けっこうだ。臥雲さんたちにもそう言ってくれ」
「わかった」
孫十郎は、それだけ言ってもどっていった。それから夕食になる。二人とも風呂には入らなかった。
飯をすますと、女中が夜具を敷きに来る。
「酒をもらおうか」
と十兵衛が言った。
「神谷さん」
「なんの、寝酒だ。よく眠れるぞ」
女中が、酒膳を運んで来た。銚子一本ずつである。
「伝七郎、よく今日までついて来てくれたな」
「なんの、死場所を探していただけだ。柳生さんと知り合って九年か、おかげで退屈しないで生きて来れた」
「死ぬなんて思うな、生きよ、今度だって斬り抜けるさ。ただ数が多いだけだ。使い手などおらん。もっともよけいな殺しはしないほうがいいな。首はただ一つでよい」
「六人の中で、わしが一番弱い。まず、わしが死ななければならん」

「なあに、伝七郎だって、わしと一緒になって、あちこちで斬って来た。それほど弱くはない。死ぬなどと思うな。まず生きることを考えよ。伝七郎には女がいる。女がついて来る。飢えずに生きれるのだ。京にはお鯉さんが待っているぞ」
伝七郎は、恥ずかしそうに笑った。浪人していても、わりに汚れない質の男だ。どこかの大名に推挙してやりたいほどだ。
やさ男だが、天ヶ嶽では、よく山賊を斬っていた。もっとも以前は、浪士改めにいて、浪人たちを斬っていたのだ。玄蕃や主水たちには及ばないが、大名に仕官すれば、剣術指南にはなれる男だ。
もっとも、仕官などしようとは思っていない。女に食わせてもらって、のんびり生きるのがふさわしい男だろう。
「死のうと思っても、なかなか死ねぬものだな。これが寿命というものかな」
「せっかく生まれて来たんだ。白髪になるまで生きよ。生きていればいいこともある。長く生きても、五十年、せいぜい六十年だ。人の一生などたいしたことではない。五十で死のうと三十で死のうと」
伝七郎は、十兵衛よりも年上だ。
銚子を空にして夜具に入る。十兵衛は夜具に入ると、すぐに寝息を立てはじめた。伝七郎は、眠れないようだった。

2

明け六ツになると、旅人たちが旅籠を出はじめる。それと一緒に十兵衛と伝七郎は宿を出た。街道を歩く。宿場を出たあたりで、玄蕃ら四人が待っていた。話さなくてもみなわかっている。

「十兵衛さん、どうだ」

と玄蕃が肩を並べて来た。少し歩いて街道を外れる。忍への道だ。六人は、それぞれに間をとって歩く。

「今度の幸手が最後だろうな」

「こんなことになろうとは思わなかったな。忠長公に、五百石で召抱えられなければ、わしの生き方も違っていた」

「悔んでいるのか」

「なんの、これも運命だ。わしは武士ではないが、五百石で召抱えてくれた忠長公には報いてやらなければなるまい。忠長公は壮健か」

「壮健のようだな。町の暮しにも馴れておられる」

「家光が死ねば、返り咲けるのか」

「その辺はわからぬが、豊後守が何とかしてくれるだろう」

「十兵衛さんはどうする」

「できることなら、柳生の里にもどって、のんびりとしたいな」

「十兵衛さんは、帰るところがあってよいな」

「玄蕃さんも、一緒に来てもらってもよい。柳生流の道場もある。そこで門弟たちに教えてくれれば助かる」

「そう、うまくいくといいがな。柳生家だって、家光を討てば、どうなるかわかるまい」

「そういうことだな。生きのびられるかどうかもわからんな」

「無理はするな、首は一つだけだ」

玄蕃も同じことを言う。だが、旗本たちも必死で斬り込んで来るだろう。家光を守るためなら死ぬる連中だ。

忍城下で昼食を取った。そして六人分の握飯を造ってもらった。もう四月だ、野宿もそれほど寒くはない。

二人ずつ組んで歩く。伝七郎は二階堂主水と肩を並べて歩く。この主水は、はじめは十兵衛を斬るように頼まれた。だが、及ばぬと知って、一味に加わった。

主水は一度も十兵衛と対峙したことはない。大納言忠長とも、あまり関りはなかった。それなのに、何となく一緒について来たのだ。

玄蕃だって、はじめは十兵衛を斬るように頼まれ、十兵衛に出会う前に、忠長に召抱えられた。

重兵衛にしても孫十郎にしても同じだった。はじめは十兵衛を狙ったのだ。十兵衛の敵が味方になったのだ。

だから、十兵衛ははじめは一人で徳川幕府に挑んだのだ。府中城に忠長をどれほど口説いたことか。

だが、何の反応もなかった。忠長の重臣たちは、みな徳川宗家の臣だった。将軍家に対して謀叛などできるわけがなかった。

それなのに、十兵衛だけが踊った。他はただ踊る十兵衛を見ているだけだった。家老の一人でも、十兵衛の考えていることをわかってくれていたら。

いま思っても仕方のないことだ。

宮代という村に来た。幸手はすぐ近くだ。重兵衛と孫十郎が、百姓家を借りた、と言って来た。

その家でも、家光の社参は知っている。幸手の聖徳寺で休息することも。

「わしらは、将軍家の行列を裏から守る、と言ってある。そのつもりで」

と孫十郎が言った。

これで野宿しなくてすむわけだ。六人は百姓家に居り、広間を与えられる。ここで六人は雑魚寝だ。

百姓の家の者たちも、六人の顔を見て、賊とは思わなかった。六人とも荒くれではなかった。豪農だろう。郷士か、屋敷は広いようだ。

この家の娘と女中たちが茶を運んで来る。六人の頭は、神谷兵庫と言ってある。六人は握り飯を出して食う。茶は次々と運ばれてくる。

十兵衛は雪隠に立った。用を足して出てくると、そこに白髪の老人が立っていた。

「神谷さまに、お願いがございます」

「何かな」

「わしの孫娘に、お種をいただくわけにはまいりませんか」

「なにっ」

と思わず言っていた。

「この家を継いでいくには、強い男の子がいるのです。曲げてお願い致します」

その老人の後に娘が立っていた。娘はうつむいている。

「娘ごは承知か」

「はい。孫娘から申したことでございます」

「みんなが世話になっている。仕方あるまいな」

と苦笑した。ここまで来て、種馬になるとは。もっとも、うまく種が入るとは限らない。だ

が、一度だけで孕むということがないわけではない。

ほんとのところは、種が欲しいのかどうかはわからない。孫娘は十兵衛を一目見てその気になったのだろう。それで祖父に頼んだ。十兵衛の種が欲しいと言えば、道理になるのだ。

十兵衛は、種をあちこちに撒きちらしている。何人かの女は孕んでいるのではないか。孫娘は多香と言った。まだ二十歳前だろう。もちろん亭主はいるのだ。たいていは十五、六で祝言を上げるのだろう。

多香に奥の部屋に案内された。風呂に入れられる。釜風呂である。風呂から上って部屋に案内されると、そこには夜具が敷かれていた。

女中が、酒膳を運んで来る。床入りの前に形だけでも盃ごとをする。そのあとから浴衣姿の多香が入って来た。美形ではないが、可愛く、女らしい体つきをしている。尻も丸い。胸の膨みもあるのだろう。

膝を折り両手をついた。

「わたしの望み、かなえていただきまして、有難うございます。申しわけありません」

「なんの、気にすることはない」

「神谷さまのような、強い子をいただかせて下さいませ」

十兵衛は美男すぎた。十兵衛の目に女は酔うのだ。はじめに酔ったのがお冴だった。抱かれてみればただの男かもしれない。多香はこの村の名主の孫娘かもしれない。名主の孫娘ともなれば、わがままいっぱいに育ったのだろう。

指も細く白かった。野良仕事などはしないのだろう。十兵衛は、手首を摑んで引き寄せた。膝の上に崩れてくる。

「アッ、まだ盃ごとが」

「そんなものはよい」

多香の手をそのまま股間に誘い込んだ。また、アッ、と声をあげる。ためらいながらも一物を握っていた。手は放さない。

だが、まともには、十兵衛の顔を見られない。耳朶が紅く染まっていた。握らせておいて、衿から手を入れる。乳房を手に包み込んだ。

みごとな乳房であった。手に余る大きさである。十兵衛の手は並の人に比べると大きい。乳首もしっかりとしていた。子を生んでいるのだろう。子に吸わせた乳首である。

その乳首を指で挟みつけると、かすかに声をあげた。感じるのだ。乳首を指の股に挟んで乳房を揉みあげる。

「あーっ」

と声をあげた。この体は十兵衛を期待していたはずである。一物を握ったまま、指を這わせようとはしない。いきなり握らされて恥ずかしいのか。だが、しっかりと握っている。

「口取りします」

と言う。十兵衛は夜具に仰向けになった。多香はそばに寄って来て、一物を改めて手にする。そして、そこに顔を埋めてくる。尖端に舌を這わせてくる。その顔は淫らだ。舐めては放し、一物を眺める。そしてまた舌を這わせる。

百姓の女は、まぐわいを好む。他にたのしみもないからだろう。咥えては深く呑み込む。手はふぐりを包み込んだ。そして頭を上下させる。一物が可愛い唇の間を出入りする。

斬り込みの前だというのに。だからと言って女を抱いていけないというわけではない。目を上げて天井を見る。黒いすすけた天井だ。もっとも梁は太い。

父宗矩の考えがわからない。聖徳寺では何の策もないのか。勝手に十兵衛に家光を討たせる気なのか。それとも、別に手があって、十兵衛たちを捕える気か。

捕えはしない。捕えては十兵衛とわかる。斬り殺しておいて顔を潰す。十兵衛とはわからないようにだ。

十兵衛よりも将軍家のほうが大事なのか。もちろん、柳生家が大事なことはわかっている。柳生家が安泰ならば、家光を殺すのか。何を考えているのかわからん。

多香は体を起して、腰に跨がろうとする。それを布団の上に押しつける。浴衣の裾をめくる。形のいい足が股間まであらわになる。

「あっ、恥ずかしい」

と言った。下腹の毛は黒々としていた。これでは恥ずかしかろう。盛り上った茂りを撫でる。

撫でながらはざまに手を滑り込ませる。はざまには毛はなかった。そこを上下に撫でておいて、指を折る。

「あっ」

と声をあげた。そこはたっぷりと露をためていた。切れ込みを撫であげる。露を上まで運ぶ。指が肉の芽に触れた。

「アッ」

と声をあげて腰をくねらせる。すでに充分の露が出ていた。足のほうに回り、両腿を肩にかつぎ上げた。はざまがむき出しになる。片手で一物を没入させる。一物がずるずると根元まで入っていく。

ひっ、と声をあげて腰を振る。女の体は二つに折る。膝頭が乳房を押し潰す。

「気が」

と叫んだ。だが、すぐにはいかないのだ。肩から足を外してやった。とたんに多香は声をあげてしがみついてくる。腰が激しく動いていた。

十兵衛は、あまり興が乗らなかった。興が乗らないと、放出も遅くなる。だが、多香は狂って次々に気をやる。

「いやーっ、もう止めて、いいえ、止めないで」

自分でどうしたらよいかわからないのだ。脳の中は白っぽくなっているのだろう。もちろん

何も考えられない。

もう、もう、と牛のように声をあげる。快感が深まれば、それは苦しみに似ている。

3

六人は、聖徳寺の森に潜んでいた。鎖帷子を着て黒い頭巾をかぶり、その上に菅笠を乗せていた。

家光一行が聖徳寺に入れば、ざわめきでわかるはずだ。物見は出さなかった。警固の密偵の目に触れたくなかったのだ。

何か気配を感ずれば、道中奉行に告げられる。大勢で家光を囲むことになる。そうすれば、家光まで届かないことになる。

御三家が先に到着し、正福寺に向う。それからしばらくして、御成街道から家光の行列がやってくる。

三百人近くの行列だ。家光の駕籠が勅使門を入る。そして本堂の前に降ろされる。駕籠の中から家光が出る。階段を上る。そして本堂に入る。

それから付きの侍たちが、境内にぞろぞろと入ってくる。騒がなくてもざわついて来る。入りきれない侍たちは、寺の外にそれぞれの場所を占め、食事をとることになる。

そのとき、あちこちに潜んでいた黒装束がとび出して来た。一陣の黒い風になって走る。黒い影はぞくぞくと出てくる。

黒い風は門を入って参道を走る。正面の勅使門は幸いに開いていた。境内はごちゃごちゃしている。

黒い風は、刀を抜いて斬り込む。叫びが上る。侍たちは悲鳴を上げて逃げ回る。

はじめに十兵衛が塀を越えた。玄蕃、主水と続く。十兵衛は墓地を走り抜ける。

本堂の前の階段には、旗本五人がいた。十兵衛は刀を抜き、走り寄りざまに旗本を斬る。旗本が斬り立てられる。

その隙に、玄蕃と主水が本堂に走り込む。そこに重兵衛、孫十郎、伝七郎が走り込んでくる。

その三人にあとをまかせて、十兵衛は本堂に入る。右手に休息所が見える。旗本が斬り込んでくる。

間合いが足りず、おのれの剣尖を足指に切り込む。

「ギャッ」

と声をあげた。それを放っておいて次の旗本に剣尖をつけた。その旗本が上段から斬り込んでくる。

腕をのばした。剣尖は旗本の咽仏に刺さる。それをひねって引き抜く。拍子には乗らなかった。無拍子である。

一人一人をていねいに斬る。二人目の太腿に斬りつける。腿が袴の中から転り出る。旗本はつっかい棒を失ったように転る。転り出て来た足を蹴る。

「ギャッ」

と叫んで気絶した。腿を失った足からは、血が流れ出してくる。その血に斬り込んで来た旗本が滑った。床は板張りである。血を吸い込まない。

あわてて旗本が起き上ろうとするところを、十兵衛は片膝ついて薙いだ。刃はスーッと首に吸い込まれていき、反対側に抜けた。

十兵衛は一歩退く。そこに首が転り落ちる。血が音をたてて噴き上る。あたりは血だらけになる。

むこうにも玄蕃と主水に斬られた旗本が血を流し転がっている。血は油と同じだ。よく滑る。滑るので斬り込んでは来られない。

むこうの休息所に、家光の姿が見えた。それを玄蕃が斬った。家光の首がとんだのをしっかりと見た。

十兵衛は、本堂の入口に立って、笛を吹いた。鈍い笛の音だった。

黒い風は、道を切り開きながら去っていく。外にも供の旗本たちがいた。騒ぎを知って参道に入ってくる。

そこでまた黒い風と斬り合うことになる。鍛えられた黒い風と旗本たちは相手にはならなか

った。

思わず道を開ける。そこから、まさに風のように走り去るのだ。

十兵衛はあたりを見回し、走った。墓地を走り抜けて、塀をとび越える。そこにいたのは伝七郎と孫十郎だけだった。

正福寺も、騒ぎを知ったころだ。そこの侍たちが押し寄せてくる。

「家光の首がとぶのを見た。玄蕃が斬った。先に行こう、あとから来るだろう」

三人は走り出した。さっき来た道を走る。走りながら頭巾をとり、捨て、笠をのせる。黒い頭巾では目立つのだ。

忍城下まで走るのだ。後を振り向いたが、あとをついて来る者もいない。追手もない。走り続けるしかない。

十丁ほど走って足を止めた。伝七郎も孫十郎も傷を負っていた。そばの草むらに坐って傷の手当てをする。

たいした傷ではない。この季節では膿むこともないだろう。

「誰も来ませんね」

と伝七郎が言った。

「家光の首のとぶのを見た」

「わしも見た」

と孫十郎が言った。

斬り合いは短かった。現代の時間で言えば三分くらいだろう。風衆も境内には五分ほどしかいなかった。

「どうしたんですかね」

とまた伝七郎が言う。

玄蕃、主水、重兵衛の三人がわからないのだ。玄蕃は家光の首を刎ねた。主水も近くにいたはずだ。重兵衛はどこにいたかわからない。

「ようやく、目的を達したな」

「孫十郎は、これからどうするのだ」

「しばらく、各地を回ってみようと思う」

「そうか、伝七郎は」

「生き残ったんですかね」

「そういうことだ」

「京に向いますよ」

「そうだったな、お鯉さんが待っているな」

「神谷さんは」

「わしは江戸に行く。豊後守にも会わねばならんだろう」

小野次郎右衛門にも会いたい。

「そのあとは」

「柳生の里に帰ることになろうな。気がむいたら来てくれ」

「これで、みんな終ったんですね」

と伝七郎が言う。

「終ったな」

と言いながら、バンザイ、と両手を上げる気分ではなかった。ほんとに家光の首をとばしたんだろうか、と思う。

簡単だった。あっ、という間に終ったのだ。何か違うのではないか、と不安になる。たしかに家光の首がとんだのを見た。間違いない、とおのれに言い聞かせる。

「三人は、先に忍の隆成寺に行ったのだ。ここで坐り込んでいてもはじまらん」

と十兵衛は立ち上った。三人は歩き出した。伝七郎は足を引きずっている。

追手がかかった様子もない。あるいは追手は日光街道、御成街道に向けられているのかもしれない。

玄蕃と主水と重兵衛は、斬死にしたのではあるまいな、と思ってみる。まさか、玄蕃ほどの男が。玄蕃も最後の奉公と思っていた。

玄蕃ならば、たとえ目の前に但馬守宗矩が立っても斬れたろう。玄蕃を阻める者はいない。

休息所には、主水もいた。二人がいて斬死するはずはない。

忍の城下に着いたときには、あたりは暗くなっていた。隆成寺に足を向けた。だが、そこには人影はなかった。

しばらく待ってから、城下の旅籠に宿をとった。三人一部屋である。三人とも疲れている。伝七郎と孫十郎は傷ついている。夕餉をとって酒を運ばせた。

それぞれに手酌で酒をのむ。

「どうしたんですかね」

「玄蕃や主水が死ぬわけはない。よそに逃れたのだ」

「この忍への道には来れなかった。斬り抜けている」

と孫十郎。

「とにかく終った。ご苦労だった」

と十兵衛は盃を上げた。

「この十年、いろいろあったな」

と孫十郎が、むかしを思い出すように言った。

「まだ、土屋十郎左衛門は、浪士改めにいるのかな」

孫十郎も伝七郎も、浪士改めにいる十郎左衛門には世話になっている。

「加賀爪甚十郎は、南町奉行になったからな。まだ、浪士改め役では、浪人を斬っているのかな」

いまの浪士改め役は、神尾備前守である。

「家光が死んだとなれば、江戸は大騒ぎだな」

「そうではあるまい。公儀では家光の死は伏せるだろう。日光社参で暗殺されたではすまんからな」

「そういうことですか。二カ月後くらいに、病死として発表することになるのですかね」

それもある、と十兵衛は思った。

4

家光にはまだ子がなかった。家光が死んで誰が将軍になるか。保科正之がいる。正之は二代将軍秀忠がお静という女に生ませた子である。お江与の方はこの正之がいるとは知らずに死んでいった。

正之が取り立てられたのは、お江与の死のあとである。忠長が高崎で死んでいれば、四代将軍の座は正之に回って来ることになる。

だが、忠長は浪人として生きている。老中阿部豊後守は、忠長を奉じて、江戸城に乗り込む。四代将軍は忠長である。豊後守はずっと、忠長が甲府に転封になったときから、これを狙っ

ていた。

だから、十兵衛をおのれのほうに引き寄せた。孕んだお冴を、おのれの屋敷に引き取りもした。お冴は人質の役目も持っていた。

このときを考えて、豊後守は、忠長を高崎で死なせなかった。影武者を死なせたのだ。十兵衛たちが聖福寺に斬り込むことを知っていた豊後守は、御三家と共に正福寺に入っていた。

これで、豊後守は目的を達したことになる。豊後守も、仏教将軍家光を廃したかった。神道派だったのだ。将軍家はあくまでも神道でなければならなかったのだ。

これで京の主上（天皇）ももとの神道にもどる。十兵衛も、主上に申しわけが立つということだ。

やっと終った。十年が無駄ではなかった。胸中に満足感が拡がっていく。幕閣も入れ代ることになるだろう。豊後守が大老になる。幕府の実権を握ることになる。

翌日――

十兵衛たちは、旅籠を出た。そして、隆成寺に足を運んでみた。玄蕃たちがいるわけはなかった。

「どうしたんですかね」

と伝七郎が言う。

「まさか、討死したわけではないだろう」

玄蕃と主水は、聖福寺を出て、どこかに消えた。忠長の恩には報いた。そう思って旅に出たのかもしれない。だが、桐生重兵衛はもどって来なければならない。

重兵衛はもとは旗本だったのだ。江戸以外には知らない男だった。どこかに消えるわけはない。とすると討死したのか。

もっとも、江戸にもどれば、ひょっこり十兵衛の前に姿を現わすかもしれない。忠長の世になれば、重兵衛も取り立てられることになる。

重兵衛だけではない、伝七郎も玄蕃も主水も、そして孫十郎も取り立てられる。更には柳生家は、宗矩が隠居して十兵衛が返り咲く。それで、すべてうまくいく。

忍の城下を出て、中山道に出た。そこで伝七郎、孫十郎とは別れることになる。

「孫十郎、忠長公の世になったら、江戸にもどって来い。お召抱えになる」

「神谷さん、それは無理だな。わしはいまさら侍になる気はない。浪人暮しが長すぎた。わしはごろつきだ」

「それでもよい。暮しが立つようにしよう」

「そうなったらな」

「伝七郎、お鯉さんを大事にしろ。二人で江戸に来てもよい」

「別れの話はそれくらいにしよう。達者でな」

着流して刀を肩にかついだ孫十郎は背を向けた。それでは、と伝七郎が手を上げて去ってい

く。

十兵衛は江戸へ向う。江戸へは十五里余である。どこかに一泊することになる。歩きながら、すっきりしない。

たしかに家光の首が転がり落ちるのを見た。見間違いということはない。もっともおのれが手にかけたのではない。

上尾宿に宿をとった。上尾から江戸まで九里である。部屋に入り旅装を解き、風呂に入った。肌に湯が染みて来るようだ。

女の肌に触れたいところだ。手足をのばした。

「もう終った」

と呟いてみる。だが、一沫の不安がある。この不安は何だろう、と思う。簡単にいきすぎた、ということはない。このことに十年も賭けたのだ。

もっとよろこんでいいはずだ、とおのれに言う。だが、よろこびがどこかで止まっている。つき抜けないのだ。女の肌に触れればすっきりするのか。

部屋にもどる。夕餉を取る。夜具を延べに来た女中に酒をたのむ。銚子が運ばれて来た。手酌で酒をのむ。

「十年か」

と呟く。長かったような、短かったような。十兵衛も十年だけ年をとったのだ。

たしかに無駄ではなかった。多くの術を身につけた。たしか龍尾からはじまった。無拍子は身についたのか。

拍子斬りは、拍子が崩れたときに危い。そのことに天ヶ嶽の山賊を斬っていたときに気付いた。拍子に乗りすぎると、とんだ目にあう。拍子に乗らずに、一人一人をていねいに斬る。たしかに拍子に乗ったほうがよく斬れる。鉢とばしなども、拍子に乗らなければうまくいかない。腰車も同じだ。

無拍子というのは、おのれを守る術でもある。老師忠明は、小川町で浪人二十人を拍子斬りに斬ってみせた。

老人が、よくあれだけ動けたものだ、と思う。もちろん、腕や体、足腰はまだ保っていたのだろう。

拍子斬りというのは、相手次第ということもある。二十人の浪人がいる。その人数に合わせて斬る。これが二十五人ならば、また斬り方も異ってくる。拍子斬りは息をつかない。無息である。

どれくらい息をつかないで斬れるものか。二十人くらいが限度か、それ以上だと息をつかなければならない。するとおのれが乱れることになる。その乱れは死につながる。

拍子斬りには限度があるということだ。現代的に言うと酸素がなくなる。酸素を補充するには、肺に空気を入れなければならない。

無拍子は息の継ぎ方でもある。息を継ぎながら相手を斬る。すると何人斬っても疲れが少い。剣術には無駄も必要ということでもある。無拍子は長生きするための術である。武芸者が長生きするのはむつかしい。

翌朝——

上尾宿を発った。次の大宮宿まで二里、大宮から江戸まで七里。江戸に着いたのは夕方だった。

中山道は、千住宿から途中本郷を通る。本郷には、屋代甚三郎と名を変えた忠長が住んでいる。忠長に会おうか、と思ったが止めて神田川に架る芋洗橋を渡る。

奈良屋は、すぐそこである。須田町通りを行くと鍋町になる。奈良屋のわきに路地がある。裏木戸から奈良屋に入る。

主人の宗吉がとんで出て来た。座敷に上げられる。その間に離れ家の掃除をする。

「ご苦労さまでした」

と宗吉が言う。

「京の伊勢屋には世話になった」

「手紙を書いておきましょう」

どうでした、とは聞かない。結果はそのうちに出るはずである。十兵衛も家光暗殺を果した、とは言わない。

「宗吉、あれから十年だ」

「はい、わたしも年をとりました。しばらくは江戸においでございますか」

「いや、柳生にもどろうと思っている。カタがついたならばな」

そこに女中が入って来た。離れ家に入る。

わが家に帰って来たようだ。障子は開けてある。畳に座せば庭が見える。木々の枝葉は青々としていた。江戸にもどって来たのは久しぶりのような気がする。

翌日——

十兵衛は奈良屋を出た。編笠を頭に乗せていた。顔を隠すようにして歩く。将軍家光を暗殺したのだ。天下の大罪人である。

江戸はまだ静かだった。家光が死んだのを知らないのだ。公儀が家光の死を発表するのはいつのことだ。

浜町河岸に向う。ここには豊後守忠秋の下屋敷がある。この屋敷には、お冴と娘のお芳がいる。十兵衛は一度だけ会っている。

阿部家の門の前に立った。門番がいる。門番は換っていた。だから十兵衛の顔を知らない。

「神谷兵庫と申す。土久里三郎どのにお会いしたい」

しばらくお待ちを、と言ってくぐり戸から中に入る。土久里三郎が出て来た。

「少し歩きましょうか」

と言って歩き出す。もちろん、豊後守忠秋は帰って来ていない。幸手の聖福寺は、あのあとどうなったかわからない。それが気になって来たのだ。

「忠秋どのから、書状は来たのか」

「はい、昨日。届いたようです。ですが、ご家老あてですから内容はわかりません」

「お帰りは」

「二十一日だと思われます」

日光東照宮に参詣して、一行が江戸に着くのは四月二十一日の予定である。

「行列は日光に向ったのかな」

「はい、そのようです」

土久里は、十兵衛たちが、聖福寺に休息中の家光を襲ったことは知っている。

「異変は」

「聞いておりません」

もちろん家光の死は外に洩れることはないのだろう。

「お冴さんに、お会いになられますか。お芳ちゃんも大きくなられました」

十兵衛は目を細めた。

「いや、いましばらく待とう。お帰りになられたら知らしてくれ。わしは奈良屋にいる」

「そうしましょう」

「土久里、何か知っているのではないか」

「いいえ。何も知りません」

「知っていても言えぬということだな」

「わたしは、阿部家の家臣です」

「わかった、土久里を責めても仕方がないな。待っている」

と言って十兵衛は背を向けた。土久里は何か言いたそうだった。

5

十兵衛は足を本郷に向けた。忠長に会ってみようと思ったのだ。豊後守は忠長を擁して江戸城に乗り込むはずである。そうなれば二度と会えないかもしれないのだ。

柳原土堤を歩く。神田川を渡らずに八辻ヶ原まで行く。そして芋洗橋を渡るのだ。そして神田明神の前を通って本郷通りに入る。

しばらく歩くと右手に加賀百万石の上屋敷の白塀が見える。そこで左に折れる。屋代甚三郎の玄関が見えていた。

その玄関から浪人が出て来た。その浪人は刀を手にしていた。振り向いて刃を拭う。十兵衛は目を剝いた。浪人は誰を斬ったのだ。

十兵衛は、刀を鞘に収めた浪人の前に立った。
「おまえは、誰を斬ったのだ」
「浪人だ。屋代甚三郎という浪人をな」
浪人は笑っている。十兵衛は青ざめた。
「屋代甚三郎が誰だか知っているのか」
「知らん。頼まれて斬った。十両くれるというのでな」
「甚三郎は、駿河大納言忠長公だぞ」
「まさか、ただの浪人だよ」
十兵衛は怒りと共に殺気を放った。浪人の顔が凍りついた。殺気を浴びて動けないのだ。
「誰に頼まれた、言え」
「わわわわ」
と言うだけで、声にはならない。どうせ聞いたってわからない。十兵衛はゆっくり刀を抜いた。浪人は目を剝いている。
忠長を助けるために、どれほど苦労したことか。その忠長が、こんな浪人に殺された。十兵衛は、刀を上段にとり、腰を据えて、浪人の左肩を雁金に斬り下げた。
声もあげなかった。
左肩の着物が大きくめくれ、左肩をさらした。浅黒い肌だ。黒さは垢だろう。肩が左腕の重さで、ゆっくりと裂けていく。

肉が見えた。思ったよりも白い肉だ。めくれていく。白い粒のように見える肋骨が左右に二十四個見える。そのむこう、背中のほうにも二十四個見える。空洞がある。肺である。
左手が地面につき、流れて、肩まで地面についた。それでもまだ浪人は立っていた。立ったままとうに死んでいた。
十兵衛は、刃を拭った。白い肉に血がにじみ出した。にじんだ血が寄り合って流れはじめる。あわてて走り込んでも間に合わない。表戸は開いままだった。草履を脱いで上り框を上る。
忠長は、仰けざまに、血まみれになって死んでいた。刀を手にすることもできなかったのだろう。
すでにただの屍だった。数日のうちに江戸城に上り、将軍になるはずだった男だ。まさに屋代甚三郎として死んでいった。
武士は仰けざまに死んではならぬ、と言ったのは紀伊の頼宣だった。たしかに仰けざまに死ぬのはみっともない。
十兵衛は、忠長の体をうつ伏せにしてやり、その場に坐った。忠長の顔はこちらを向いて、目を剝いていた。顔には恐怖が貼りついていた。
手を当てて瞼を閉じさせた。
将軍家の嫡子として生まれながら、この死にざまだ。まだ、五十二万石、駿河大納言だったこ

ろの忠長を思い浮かべる。十兵衛が、謀叛なされ、と口説いたときには、薄笑いを浮かべていた。

そのとき、そうだ、十年前だ。十年後にこのように死ぬとは思ってもいなかったろう。どうして今なのか。どうせ殺すのなら、もっと早くてよかったはずだ。

もう三日も待てば、将軍の座に坐れたはずだ。それなのに、どうして。十兵衛は合掌して、ポトリと涙を落した。

誰が忠長を殺したのか。屋代甚三郎が殺されたのではない。忠長が殺されたのだ。憐れだった。高崎では、死にたくない、と泣いていた。

このように野良犬のように殺されるのなら、高崎で自刃していたほうがよかった。人にはそれぞれに死にざまというのがある。将軍の嫡子がこのように死んではならないのだ。

涙がボロボロこぼれた。

「あわれだ」

忠長の代りに屋代甚三郎が高崎で殺されたのが、寛永十年十二月五日だった。それから三年も生きられなかった。

暗殺団に殺されたのではなかった。どこの馬の骨ともわからぬ浪人に殺されたのだ。こういう殺し方をしたのは誰だ。

忠長を四代将軍にしたくない者がいる。誰なのだ。忠長が死ねば、四代将軍になるのは保科正之だ。その手の者が殺したのか。

父但馬守宗矩も、忠長を将軍にしたくなかったのではないのか。家光も暗愚だが、それ以上に忠長は暗愚だった。

宗矩は、どうせなら保科正之をと思ったのかもしれない。宗矩なら、屋代甚三郎が忠長と知っていてもおかしくはない。

宗矩が忠長を暗殺したのか。宗矩は家光を十兵衛に暗殺させておいて、忠長をおのれの手の者に暗殺させた。忠長なら、誰にも殺せたはずだ。

十兵衛は肩を落した。忠長が将軍になれば十兵衛は、十年かかっても目的を達成したことになるのだ。

家光を暗殺したが、その代りのように、忠長も殺された。

忠長の屍はそのままにして十兵衛は奈良屋にもどった。そして数日、十兵衛は奈良屋の離れ家にごろごろしていた。

四月二十日——

土久里三郎が迎えに来た。行列は昨日日暮れ近くに江戸城に着いた。主のない行列だった。それでも屍を日光まで運んで社参をして来たのだ。

「殿がお呼びです」

と土久里が言った。

十兵衛は、浜町河岸の屋敷に行った。広間に通され、忠秋が姿を見せるのを待つ。仏教将軍

を十兵衛が神道将軍にしようと思わなければ、忠長は死なずにすんだのか。
そうはいかないだろう。家光はしきりに忠長を殺したかったのだ。
忠秋が姿を見せた。絹衣の着流しに袖なし羽織を着ていた。
「十兵衛、ご苦労であったな。これで終った、終りにしよう。余も諦めた」
「どういうことですか」
「今度も、但馬にしてやられた」
「但馬、父にですか」
「そうだ。十兵衛が討ったのは、上さまの影武者だった」
「何と申される。わたしは上さまの首が落ちるのを見ました」
「そうだ、その首が影武者だった。わかるか、本堂の右の部屋が上さまのご休所だった。左に勅使のご休所があった。上さまはそこで休息されていた」
十兵衛は、ポカンと口を開いていた。
「一部の旗本だけしか知らされていなかった。われわれさえ知らなかったのだ。十兵衛これまでだ。これ以上、無理はできん」
「すると」
「そうだ。わしの手の者が忠長さまを殺した」
「なんと」

十兵衛は、また口を開いた。
「忠長さまに生きておられたら、余が困る。忠長さまは、すべてをご存知だ。生きていてもらっては困る」
なんと、忠秋が忠長を殺したのだと。
「十兵衛、そなたの人に負けたのだ。諦めるしかあるまい。十兵衛、余を斬りたいか」
「すでに、その力もありませぬ」
やはり、但馬守宗矩は、家光の忠臣だったのだ。策があるから、江戸城に残った。
「たしかに、参りましたな。父宗矩には遠く及びません」
「十兵衛、どうする。これからだ。余が召抱えてもよい。五百石でどうだ」
「冴と芳がお世話になりました。母娘を連れて柳生の里にもどります」
「そうか。惜しいがな、それもよかろう。十兵衛、忠長公は高崎で死なれた。それが一番よい。忠長公の骨は、高崎まで運んで、屋代の骨と取り換えよう。屋代の墓は忠長公の墓のそばに立ててやる」
「せめてものことですね」
と十兵衛は頭を下げた。
お冴とお芳を連れて、飯田町の小野次郎右衛門忠明の屋敷に行き、忠明に会わせた。

「そうか、柳生の里に行くか、それもよかろう。冴、十兵衛さんと一緒に居れるようになってよかったな」

お冴は、はい、と言った。まだまだ容色は衰えていなかった。お冴とも十年になる。

この年に、十兵衛は、お冴とお芳を連れて柳生の庄に帰る。そして書きはじめたのが、『月之抄』と言われている。その序文に、

『寛永十三年拾月、さることありて、君の御前を退いて、私ならず、山に分け入ぬれど、みづからの世をのがるると人はいふめれど、物うき山のすまい、柴の庵の風のみ荒れて、かけひならではつゆの音のうものなし。（中略）尋ねゆく道のあるじやよるの杖つくこそいらね月のいづれは。よりてこの書を月之抄と名付くるなり』

この『月之抄』は、宮本武蔵の『五輪書』と同じ技術書である。

二年後の十五年十月、十兵衛は江戸に呼び出され、御書院番として出仕する。だが、やがて、柳生の家督を弟主膳宗冬にゆずり、柳生の庄にもどった。

そして、慶安三年、山に猟に行き、死ぬ。一説には毒の矢を射かけられて死んだという。その翌年、将軍家光は暗殺される。殺したのは由比正雪である。正雪は十兵衛の意志を継ぎ、若い御書院番を洗脳して家光を殺させた。もっともこれは別の物語である。

十兵衛を暗殺したのは阿部豊後守忠秋だという者もいる。

あとがき

——柳生十兵衛十巻を書き終えて——

十巻を書き終えて、柳生十兵衛について何かを書いておかなければならないと思った。

徳間文庫の前島不二雄さんが私に「峰さん、柳生十兵衛を書かないか」と言って来た。私はよろこんで受けた。実は柳生十兵衛の構想を持っていて、いつか書こうと思っていたところだ。

私はプロである。そのままで小説は書けたと思う。だが、前島さんが協力してくれた。それで小説は面白くなり、広がりと深みを増した。柳生十兵衛の愛読者であれば、一巻目から思い出していただきたい。

一巻目、二巻目はとにかく、三巻目の〝逆風の太刀〟、〝剣術猿飛〟は場所が京都である。だが私には京都が全くわからなかった。当時から京都なのか、鴨川は加茂川ではないのか、その辺の基本からわからなかった。

天皇家はこの時期に、家康と家光によって神道から仏教に変えられた。それで幕府は泉涌寺を建て天皇家の菩提寺とした。後水尾天皇はそういう幕府に、徳川将軍家に憤怒されていた。

そういうことを私は全く知らなかった。それを教えてくれたのは前島さんだった。出ぶしょうの私を京都まで引っぱり出してくれた。柳生十兵衛を書くには柳生の里に行かなければならないと、むりやりに連れていってくれた。

前島さんは京都の生まれである。だから京にくわしい。加えて日本史の先生をしていたこともある。それで歴史にくわしい。

そういう前島さんが私の担当編集者であったことが、私に柳生十兵衛を書かせたのだ。前島さんは、「峰さんは、江戸はくわしい。これからは京都をテーマにして書け」と口ぐせのように言った。

洛北に後水尾天皇の別荘「円通寺」がある。これも前島さんが案内してくれた。寛永時代に建てられた円通寺がそのまま残っている。

それを知ったおかげで、十兵衛は後水尾天皇に円通寺でお会いすることができた。これらを書けば長くなる。

柳生の庄では、柳生撓えを見た。竹を細くさいて糸で巻き、それを馬皮で作った細長い筒に入れたもの。馬皮は牛皮より厚くて弾力がある。その撓えで打ち合うのだ。竹刀とは全く異るものである。

着込みがあった。綿入れの今日でいうベストである。その綿入れの中に鎖が入れてある。つまり鎖帷子に綿を着けてある。これらを目にすることができたのは前島さんのおかげだ。

加えて前島さんは、小説に必要な部分を二、三枚コピーして送ってくれる。朝廷のことや京の当時の遊び所など。それがいまでも役に立っている。

それで、十巻目〈無拍子〉では、京の北野天満宮の門前町だった上七軒という茶屋街が書けた。西陣の旦那衆が散財したところだという。祇園や島原は知られていても、上七軒というのはあまり知られていない。

前島さんのおかげで、京がわかるようになって来た。いまは京都だがむかしは京である。作家というのは、さまざまなことを意外に知らないものである。私を加えてである。だから生涯勉強だと思っている。

編集の方々も、時代小説を担当される方は勉強してもらって、資料を運んでもらいたい、と思うのは、私のぜいたくだろうか。

私がビックリしたのは、私の時代小説を担当する編集の人が「私は時代小説は一冊も読んだことがありません」と言ったことだ。若い人ならとにかく、五十近い人だった。

編集者とは、本を読む人ではなかったのか。こういう人を見ると怖ろしくなる。将来、時代小説は少なくなってしまうのではないかと。いまでも、時代小説のわかる編集者は少くなっている。せめて、私が生きている間くらいは、時代小説のわかる編集者がいて欲しいと思っている。

前島さんは、私と同じ年である。だから、二年前に停年になっている。柳生十兵衛にタッチ

されたのは、七巻目の〝無刀取り〟までだった。

時代小説のわかる編集者が停年で辞めていくのは、出版社の大いなる損失である。残ってもらう方法はなかったのか、と私は悔んでいる。前島さんが編集をしてくれれば、私はまだまだ面白い売れる小説が書けたのに、と残念である。

十兵衛にはサブタイトルがある。〝龍尾の剣〟〝逆風の太刀〟など、十巻目まで九ツの極意がある。剣には極意が各流派、百種以上あると思っている。ところがそのほとんどは、師伝、直伝とあって解説はない。おそらく書けなかったのだろう。

これを酒呑みながら前島さんと二人で考える。暗中模索である。猿飛ならば、跳び上るのだろう。跳び上っただけは面白くない。とび上って相手の首をはねる。前島さんもけんめいに考えてくれる。それで〝剣術猿飛〟ができ上ってくる。

読者の方々は、そういう剣術は資料がちゃんとあるのだろう、と思っているのかもしれない。もちろん、剣の解説書がないわけではない。宮本武蔵の『五輪書』、十兵衛が書いた『月之抄』など、だが、これらは難解で私にも理解できない。そういうのを引っぱり出して小説の中に書いても、読者にもわからない。だから、私はわかるものだけしか小説には書かない。わからないものを小説に転書するのは読者にも失礼である。

つまり、十兵衛十巻の秘剣は、前島さんと私と、酒を呑みながら出て来たものである。これほど熱心に考えてくれる編集者は他にはいない。

はじめ、前島さんが私のところに、十兵衛の話を持って来たときには、三冊だと思った。それで三冊までの構成を考えていた。三冊目は、駿河大納言忠長が高崎で自刃するまでである。ところがこれが売れた。

「峰さん、売れているよ。もっと先までやろうよ」と前島さんが言う。そうなると構成を変えなければならない。引きのばしただけでは読者に失礼。それで頼りない頭を絞る。

「峰さん、売れているよ、十兵衛は私の引退の花道になる」とおだてられると、ますます張り切ってくる。私は、作家は編集者にホめられると木にも登る、と思っている。

編集者は、もっともっと作家をホめて乗せなければならない。すると面白い売れる小説が書き上るのだ。

売れないというのは作家よりも編集者の責任だと思っている。小説が売れるということは出版社も儲かるということだ。

編集者の仕事というのは、作家に売れる小説を書かせて、出版社を儲けさせること、と私は考えている。小説を依頼すれば、小説は書き上る。それを取りに行って、あとは編集するだけが仕事だと考えている編集者が多すぎるのではないだろうか。こんなことを書けば編集の方々に怒られそうだが。

そういう意味で、前島さんが停年で辞められたことは残念である。たしかに前島さんのような編集者が担当になれば、書くほうとしては苦しい。

だが、とにかく十巻を書き上げた。もっともホッとする時間は私にはない。次の仕事が待っている。

私のあとがきのあとに、前島さんが〝解説〟を書いていただけるはずである。

峰　隆一郎

解　説

前島不二雄

峰隆一郎の『柳生十兵衛』が第十巻、本書〈無拍子〉で完結した。

すべて書き下ろしである。

見事だったと、まず賛辞を呈したい。ありがとうございます、とも申し上げたい。

はからずも、この稿の筆者は、解説を書く前に、作者の〔あとがき〕を読んでしまった。編集者として過分な評価をしていただいた。編集者冥利に尽きるとしかいいようがない。

けれども、面映ゆくて、すこぶる書きにくい。努力はするが、この稿が、通常のあるべき理想の解説とはいささか異なったものになりそうな予感がする。あらかじめお詫びしておく。

さて、第一巻が刊行されたのは、平成元年だったから、完結までに六年ばかりかかった事になる。

寛永三年（一六二六）に二十歳だった十兵衛三厳は、本書の冒頭で描かれている寛永十二年には、二十九歳、次の正月を迎えれば三十歳である。

その間に、十兵衛は、龍尾、逆風、猿飛、八重垣、無刀取り、斬馬剣、転(まろばし)、と各巻のサブタイトルになった柳生流の秘剣を次々と極めてきた。各巻に登場する剣客を、それらの秘剣で倒してきた。

術の名称は伝わってきているのだが、その剣技の内容は、すべて不明である。剣技を示す絵巻物は残されているが、基本的には一子相伝、それも口伝だから、絵を見ても、分からない。だから峰さん（と呼ばせてもらう）は、それらの剣術のなんたるかを考え、描いてきた。そして、十兵衛が成長してきたのと同様に、十兵衛を描きつつ、峰さんも文章上での卓越した剣客になったのであった。

無刀取りによって、四十八人の相手を倒す十兵衛の描写が出来るようになったのである。

全巻で、一体、何人の剣士を斬っただろうか？

平成五年九月、峰さんの作家生活、十五年の間に刊行された時代小説とミステリーの長編小説が、百三冊を突破したのを祝う会がもたれたが、その時、〔三千人斬殺〕供養もあわせて行われた。作品の中で、これだけ斬れば、達人・名人になっても不思議ではない。

そして、完結編が本書、〈無拍子〉である。

十年間、徳川家光を三代将軍の座から引き摺り落とすために闘ってきた。そのために、父宗矩とも対決した。そして大井川では、宗矩の気迫の前に破れた。十兵衛にとって、最強の相手は、父宗矩なのである。

何にしても、十兵衛の志はいまだに達成されていない。ときとして、何のための十年だったのか、とむなしさを感じざるを得ない十兵衛である。

だが、本編でも、十兵衛は、家光暗殺を諦めていない。

幕府は、また宗矩は、それを探知しているだろうか？

はたして、暗殺が成功するのか？

そのための秘策は？

将軍の警護は厳重である。鉄砲隊もいようし、当然、すさまじい乱闘とならざるを得ない。お側さらずの宗矩は、いかなる警護体制をとっているのか、何にしても、おそらく対決は避けられまい。そのとき父を斬れるか、……。十兵衛は考え込む。

その闘いで振るわれる剣技が無拍子である。

無拍子とは、いかなる剣なのか？

それを書くのは、読者諸賢の興を殺(そ)ぐことになるので触れない。

この十兵衛シリーズは、峰隆一郎の代表作となった。おそらく、今後も文芸評論家によって代表作として評価され、位置付けられると思える。

なにしろ、四〇〇〇枚を越える大作である。峰さんにとって、これまでの作家生活のなかでも、最大というか最長の長編小説になった。

小説家には、ほとんど無限の力が備わっていると考えられるものの、四〇〇〇枚という大作は、簡単に書けるものではないであろう。作家の一生の中でも、滅多にあるものではなかろう。『柳生十兵衛』シリーズの刊行に携わりつつ、筆者としては、峰さんの筆力には、ただただ、感嘆するばかりだった。読者が多数いなければ、十巻、四〇〇〇枚の大作は生まれなかった。商業ジャーナリズムの立場からいえば、当然である。多数の読者の存在なしには十巻も続かない。

じつは、この作品も初めから全何冊という厳密な予定・計画のもとにスタートした訳ではなかった。作者峰さんも、担当編集者だった筆者も、何冊になるのか分からないままに走り出したのであった。

計算なしに走り出したというのは、編集者としては落第、失格である。が、人間には性分というものがある。筆者は走りだし、暴走しながら考えるタイプだから、その点については、許しを乞うしかない。

シリーズの途中で、筆者は定年で退社したから、峰さんも、後任の担当者・本間肇も苦労したはずだ（ゴメンナサイ）。

けれども、最初から一冊や二冊では終わらない事は、作者にも筆者にもよく分かっていた。柳生流の秘剣をサブタイトルにする点も互いに合意していた。

元編集者の立場でいうと、柳生十兵衛が剣豪のなかでも、宮本武蔵と並ぶヒーローであるこ

とも分かっていた。それゆえに、評判になり、売れるはずだという計算もそれなりにたてていた。

ところで、今では、よほど幸運でなければ、古本屋でも見付からないと思えるが、戦前、『柳生十兵衛漫遊記』という人気講談本があった。

（それに触れる前に、連想ゲームのようだが、講談の『宮本武蔵』について一言しておきたい。講談では、佐々木小次郎は武蔵の親の仇と設定されていた。小次郎は老人だったのである。小次郎を前髪立ちの若者に仕立てたのは吉川英治である。もし、通常いわれているように、小次郎の師匠が小太刀の名人富田勢源、あるいは鐘捲自斎だったとすれば、武蔵よりはるかに年上である。だから、五味康祐の『二人の武蔵』（徳間文庫）では六十前後の老剣客と設定されている。

宮本武蔵に触れたのは、理由がある。峰さんは、目下、全十巻にするという構想のもとに、『素浪人宮本武蔵』という作品を書き下ろしで、光文社で刊行しつつあるのである。その作品では、どのような小次郎像が誕生するのか、峰さんの愛読者とともに楽しみにしたいからなのである。）

ところで、講談は意外と真実を語っている面があって、『十兵衛漫遊記』で、但馬・出石出身の禅僧・沢庵和尚との剣術問答が語られているのだが、柳生家と沢庵とは深いつながりがあった。沢庵の『不動智神妙録』（徳間書店）は柳生宗矩のために書かれた、剣禅一致を説く書

物なのである。

それはともかく、その講談では、何人斬れるか、という沢庵の質問に、十兵衛は秘太刀の名称を次々に上げる。が、最後に、何としても百八人しか斬れないことが明らかになる。十兵衛は追い詰められる。そこで沢庵は禅の修行を勧めることになっているのだった。

峰さんは、柳生が禅と関わるようになってから次第に弱くなったと考えている作家である。事実、十兵衛の弟・宗冬以降は、出色の武芸者はいなかった。一万二千石余の単なる田舎大名に過ぎなくなっていった。

もっとも、本書でも、十兵衛は精神を研ぎ澄ますための修行として、森林のなかで座禅を組んでいる。

それを教えたのは、一刀流の小野次郎右衛門忠明であった。本シリーズの中で、もっともユニークな存在は、小野次郎右衛門であり、十兵衛の師匠である。十兵衛の最初の愛人は次郎右衛門の娘冴である。その間に一子をもうけている。彼の存在によって、この小説は、より面白くなったと思える。じつは、普通の剣客伝によれば、次郎右衛門は寛永五年（一六二八）に死んでいるのである。六百石の旗本で徳川秀忠の剣術指南役である。たいがいの人名辞典には彼の記述はない。厳密にいえば生没年不明の剣客なのである。

だから、峰さんにお願いした結果、面白いキャラクターだから、最後まで生かしておきましょう、ということになった。

完結編なので一応、それを記しておくが、筆者は、この程度のウソは、小説には許容されると考えている。

ついでに書いておくと、いただいた一冊目の原稿を読んで、筆者は目を剝いた。

峰さんが、ユニークな歴史観の持ち主だとは承知していた。が、正直なところ驚いた。

神徒である十兵衛は、仏徒である将軍家光を廃して、神徒の忠長を擁立せんとして活動するという設定になっていたからであった。

筆者は、日本の宗教の基本的な性格、特徴は、神仏混淆にあると考えてきた。その考えは今でも変わらない。

けれども、筆者の編集者としてのスタンスは、小説家には、まず造語の権利・権限があることを認める点にあった。高見順が、感情を情感と初めて書き、それが日本語として定着した事実を知っていた。

よし、峰さんが、神道と仏教をまったく別の物と考えておられるなら、その思想と徹底的に付き合おう、……と決心した。

それが出発点だった。

ウソのない小説は存在しない、というのが筆者の基本的な考えである。フィクションによってしか、真実を描けない事、場合もある、と思う。

歴史の大きな潮流のなかでは、無数の不明な事実や人物が出てくるのは自明の理である。例

えば、奈良時代の天武天皇は、天皇でありながら生年は不明である。けれども、小説で天武を描くのには、その年を推定しなければ書けない。

筆者は、時代小説（峰さんの用語では、チャンバラ小説）に要求されるのは、歴史的事実の単なる再現ではなくて、ストーリイや登場人物のキャラクターの面白さだと考えている。その意味で、峰隆一郎は、四〇〇〇枚の見事なチャンバラ小説であり、青春時代小説とも言える『柳生十兵衛』を世に送り出したのである。

おそらく、十兵衛は、こんな男だったのか、と読者諸賢の胸の中に長く生き続けることであろう。

一九九四年四月

（この作品は徳間文庫のために書下されました）

徳間文庫

柳生十兵衛（やぎゅうじゅうべえ）

《無拍子》

© Ryûichirô Mine 1994

1994年5月15日 初刷

著者 峰隆一郎（みねりゅういちろう）

発行者 徳間康快（とくまやすよし）

発行所 株式会社徳間書店
東京都港区新橋四―一〇（〒一〇五）
電話（〇三）三四三三・六二三一（大代）
振替 東京四―四四三九二番

印刷 凸版印刷株式会社

製本

〈編集担当 本間肇〉

ISBN4-19-890128-7（乱丁、落丁本はお取りかえいたします）

時の報酬
勝目梓
過去からの使者が持ち込んだ依頼。悦楽と暴力の日々が始まった。

女飼い
広山義慶
五人の牝を武器に、腐蝕した政界に狂気の牙を剝く裏街道の男。

会社再生
阿部牧郎
利権絡みの様々な思惑の中で、企業再建に挑む男たちの熱き闘い。

重役奮闘日誌
咲村観
いびられ、こき使われて三十年。重役いうのも、ツライもんでっせ。

近未来パニック
ケースD
糸川英夫
未来捜査局
80年代、世界情報にある操作が！地球は21世紀を迎えられるのか？

国税局調査部〈脱税を追え！〉
立石勝規
土地転がし、計画倒産、絵画売買……。消えた黒い金の行方を追え！

佐高信の斬人斬書
佐高信
悪書を斬り、返す刀で悪人を斬る。激辛評論の真髄ここにあり！

韓非子入門
岡本隆三
「悪書」とされた戦略書に学ぶ極意——進言の妙と部下操縦術。

徳間文庫の最新刊

サラリーマンの屁無頼語講座
安部譲二
ギョーカイ用語じゃ物足りない！　もっと面白いヤクザ語を満載！

葉煙草（シガリロ）の罠
山村美紗
清水寺で殺された外国人貿易商。ダイイング・メッセージは十円玉。

柳生十兵衛〈無拍子〉
峰隆一郎
いよいよ飛ぶか……家光の首！　百人を血に染める剣の境地。

熱海初島殺人事件
島田一男
百億の遺産絡みか？熱海初島に漂着した色年増の全裸死体。

生贄
飯干晃一
暴行犯の裏側に棲む欲望と、生贄となる女体の暗部を照らし出す。

レッドサン ブラッククロス 2
〈追撃の鉄十字〉
佐藤大輔
ホワイトハウス炎上！独軍の電撃侵攻作戦により合衆国は崩壊。

日本の戦史 日露戦争 上
旧参謀本部編纂
屍に覆われた遼東の曠野。二〇三高地の死闘。旅順港閉塞戦の軍神。

日本の戦史 日露戦争 下
旧参謀本部編纂
主戦場・満洲で連戦連勝の日本。だが急北上する最強の露艦隊。